

は或は印度ジョーは決して捉るまいと案じ、或は捉るかとも思ひ、半信半疑の裡を絶えず往來してゐた。さうして唯一つ確なのは、この男が死んでその死骸を自分の目で見るまでは片時も安心がならな
いといふことであつた。

役人達は賞を懸けてその地方を隈なく探したが、印度ジョーは影も形も見せなかつた。聖ルイス
から一人の探偵が来て嗅ぎ廻り首を振つて、やつと「手がかり」だけは発見したが、當の犯人の行方
は一向分らなかつた。トムは以前同様に不安を感じた。

晝の遅い日が一日一日と過ぎた。さうして一日は一日とこの少年の恐怖を少し宛薄らさせた。

二十六、寶探し

その昔海賊が所々に財寶を埋め隠したといふ傳説のあるアメリカに於ては、何處かへ行つてそれを
掘り出さうといふ強烈な願望が少年時代の或時期に達するとムクムクと頭を擡げて来る。これは苟く
も馬鹿でない男の子ならきつと經驗するところである。トムは或日の事突然この願望に取りつかれ
た。彼はジョー・ハーバーを探しに出懸けたが、見當らなかつた。次に彼はベン・ロージャースを尋ね
たが、釣魚に行つて不在だつた。間もなく彼は紅手のハック・フィンに偶然出會した。トムは彼を
人知れぬところへ連れて行き、打明けて相談した。ハックは直ぐに乘氣になつた。ハックは暇が潰れ
て資本のかゝらぬ事なら、どんな目論見にも常に一口乗る氣であつた。時これ金といふが、彼には金に

ならぬやうな時が持て餘す程澤山あるのであつた。

「何處へ行つて掘るんだ。」とハックが言つた。

「何處と定つたところはない。まあ何處でも行つて掘つて見るんさ。」

「ふーん、それぢや何處にでも匿してあるんだな？」

「さうぢやない。大變むづかしいところに匿してあるんだよ、ハック。島に匿してあることもあれ
ば、枯れた大木の下に朽つた箱へ入れて、大枝の先端の影が夜の十二時に映る地點へ埋めてあること
もあるが、大概は幽霊屋敷の床下に匿してある。」

「誰が匿すんだい？」

「泥坊さ。定つてあらあ。誰が匿すと思つたんだい？ 日曜學校の校長さんかい？」

「知らないから訊いたのさ。けれども乃公だつたら匿さないな。乃公ならみんな使つて面白いことを
すらあ。」

「僕だつてさ。けれども泥坊はさうしない。泥坊は何時でも窺つと匿して置く。」

「さうして最早取りには來ないのかい？」

「いゝや、來る氣だけれども、大抵は目じるしを忘れたり、さもなければ死んでしまつたりするの
さ。兎も角金は長い間埋つた儘で錆び朽ちて來る。するとその中に誰か目じるしの見つけ方を書い
てある古い黄色くなつた覺え書を手に入れる。さうしてこの覺え書を讀み分けるに一週間もかゝる。」

何故かといふとかういふ證文は大抵暗號や象形文字で書いてある。」

「象——何だつて？」

「象形文字さ——繪だの物だのを竝べて何のことか一寸見ては分らないやうに書いてあるのさ。」

「そんな證文をお前持つてゐるのかい、トム？」

「いゝや。」

「それぢやどうして目じるしを見つけようと言ふんだい？」

「僕は目じるしは要らない。泥坊は定り切つて島か幽霊屋敷の縁の下か、大枝が一本突き出てゐる枯木の下に金を埋めて置く。ところで、僕等はジャックソン島で少し探して見たことがあるだらう。彼處へもう一遍探しに出懸けることも出来るし、幽霊屋敷なら竝木の小川の上へ行けば評判のがあるし、彼處此方に何程でもある。」

「枯木の下なら何處のでも宜いのか？」

「馬鹿を言ふない！ さう何處にでも金がザク／＼あつて溜るものか。」

「それぢやどうして金のある枯木の見分けをつけようと言ふんだい？」

「構ふことはない。一本々々掘つて見るさ。」

「大變だ、トム。そんなことをすれば夏中かゝるだらう。」

「夏中かゝるが、どうしたんだい。百圓も入つてゐる壺かダイヤモンドの一杯詰まつてゐる箱でも掘

り起して見る。夏中かゝつたつて何のことがあるもんか？」

ハックの目は輝いた。

「さうなりや素晴らしいもんだ。おい、その百圓は乃公がもらふよ。乃公はダイヤモンドなんか要らない。」

「宜いとも。けれども僕はダイヤモンドは一粒も手放さないぜ、中には一粒で二十圓もするのがある。どんなのでも五六十錢か一圓しないのはない。」

「成程、そんなものかなあ。」

「さうとも——誰にでも訊いて見給へ。ハック。お前はダイヤモンドは見たことがないのかい？」

「ないなあ。」

「王様は澤山持つてゐらあ。」

「ところが乃公は王様は一人も知らないや。」

「それは知らなからうさ。けれどもヨーロッパへ行けば彼方此方にウヨ／＼跳ねてゐらあ。」

「跳ねるのかい、王様は？」

「跳ねる？——馬鹿！ 跳ねやしないよ。」

「それぢや今何て言つたんだい？」

「分らない奴だなあ！ 大勢ゐるつて言つたのさ。跳ねるんぢやない、——跳ねてどうするんか？」

彼方此方に蝗のやうにウヨ／＼してゐるといふ意味さ。あの駝背のリッチャードのやうにな。」

「リッチャード！ 苗字は何と言ふんだい？」

「苗字はない。王様は名ばかりで苗字はないものだ。」

「ないのか？」

「ないのさ。」

「ふーん、はじめて聞いた。苗字のないのが好きなら、それでも宜からうが、乃公は王様になつても苗字がないんぢや御免蒙る。黒ん坊見たいぢやないか。それはさうと——おい、何處を掘るんだい、最初に？」

「さあ、何處つてあてもないが、竝木の小川の向う側の小高みに枯れた大木がある。あいつを掘つて見たらどうだらう？」

「宜からう。賛成だ。」

そこで二人は先端の折れた鶴嘴とシャブルを手に入れて、一里餘りの遠足に出懸けた。彼等は暑くて汗ばみ喘ぎながら目的地に着き、枯木の蔭に腰を下して暫く休んだ。

「面白いなあ。」とトムが言った。

「うむ、面白い。」

「おい、ハック。こゝで寶物を見つけたら、お前は割前をどうする積りだい？」

「さあなあ、乃公は毎日饅頭を食つて、ソーダ水を飲んで、曲馬が掛る度に見物に行く。毎日面白く暮すのさ。」

「ふーむ、それぢやちつとも溜めて置かないのか？」

「溜めて置く？ 何だつて溜めて置くんたい？」

「何さ、その中に一本立ちになれる身上を拵へる爲めにさ。」

「や、そいつは無駄な話だ。大急ぎで乃公が使つてしまはなけれや、親爺が今に歸つて来て手に持つたが最後、見てゐる間に飲んでしまはあ。トム。お前は分前をどうしようと言ふんだい？」

「僕は新しい太鼓と能く切れる劍と赤い襟飾とブルドックの小さいのを買つて結婚する積りだ。」

「結婚？」

「さうさ。」

「トム。おい——しつかりしろ！ お前は氣が狂つたな！」

「まあ待てよ、今に分るから。」

「結婚なんて馬鹿の骨頂だぜ。乃公の親爺とお袋を見ろ！ 年が年中喧嘩をし通した。乃公はよく知つてゐる。」

「それは構はない。僕の貰はうと思つてゐる女の子は喧嘩をしないよ。」

「トム。女は皆同じことだぞ。皆人を引つ掻くぞ。このことはもう些つとよく考へて見るが宜いぜ。」

是非思案し直すが宜いよ。一體その尼つ子の名は何といふんだ？」

「尼つ子ぢやない——女の子だ。」

「何方でも同じことぢやないか。尼つ子といふ人もあれば女の子といふ人もある——どつちにしても物は同じだ。まあ宜いや、その女の子の名は何といふんだ？」

「いつか又話す——今は言はない。」

「さうか。それぢや又聞くこと、しようが、兎に角お前が結婚すると乃公は益々淋しくならあ。」

「いや、そんなことはない。お前は乃公の家へ来て一緒に暮せば宜い。ところでどうだい、話はこの位で切り上げにして、そろそろ掘りに掛らうぢやないか。」

二人は半時間ばかり汗を流して働いた。一向験がなかつた。彼等はもう半時間辛抱した。やつぱり験が見えなかつた。ハックは言つた。

「泥坊は何時でもこんな深く埋めて置くもんかなあ？」

「深く埋めることもあるが、何時でもさうぢやない。大抵のはこんなに深くはない。どうもこれは箇所が間違つてゐるのだらうぜ。」

そこで彼等は新しい場所を見つけて又始めた。根氣が少し弱つたが、彼等はなほ手を休めず、暫く無言でコツ／＼と働いてゐた。竟にハックはシャブルに凭り掛り、額に玉爲す汗を袖で拭つて、かう言つた。

「こゝが濟んだら何處を掘る積りだい？」

「ドグラス未亡人の裏のところのカーヂフ山のあの枯木を掘つて見ようと思ふんだ。」

「あいつは好からうぜ。けれどもトム。折角掘つてもあの未亡人が取つて了ひはしなからうか？ あの木のあるところはあの家の地面だぜ。」

「未亡人が取るつて？ それは何とか苦情をつけたがるかも知れないが、かういふ寶物は誰でも見つけた人の所有になるんだ。誰の地面にあらうとそんなことは構はないんだ。」

これで納得が行つた。労働は繼續した。間もなくハックが言つた。

「畜生！ 又箇所が間違つてゐるに相違ない。どうだらう？」

「どうも變だよ、ハック。わけが分らない。魔法使が邪魔をすることが時々あるからなあ。大方その爲めに掘つても寶物が出て來ないのだらうよ。」

「馬鹿を言つてる！ 魔法使は晝の間はどうすることも出來やしない。」

「成程、さうだなあ。そいつは氣がつかなかつたよ。うむ、わかつた／＼！ 乃公達はまあ何といふとんまだらう！ 夜の十二時に大枝の影の映るところを見つけてそこを掘らなければ駄目なんだ。」

「畜生！ それぢや今迄やつた仕事は悉皆むだ骨折か？ 忌々しいなあ！ 乃公達は今夜又出直して來なけりやならない。随分遠路だぜ。お前出られるかい？」

「出られるとも。それに今夜の中には是非片をつけなけりやならない——誰かこの穴を見つけようもん

なら、直に氣取つて寶物を探し始めるからなあ。」

「それぢや乃公は今夜お前のところへ寄つて猫の鳴聲をするぜ。」

「宜いとも、それからこの道具は叢林の中へ匿して置かう。」

子供達はその晩豫定の時間頃に其處に辿り着いた。彼等は十二時を待ちながら木蔭に坐つてゐた。それは淋しい處で、傳説を彼れ此れと思ひ合はせると頗る氣味の悪い刻限であつた。亡魂がザワ／＼と動く木の葉の間で囁き、幽霊が暗く物蔭に潜んでゐるやうであつた。犬の吠える聲が遠くから漂つて来て、梟がこの世事とは思へぬやうな音でそれに答へた。子供達はこの物凄しい光景に悉皆元氣を挫かれて了つて、殆んど口を利かなかつた。間もなく彼等は最早十二時が來たと察して、枝影の映る地點を突き止めて仕事に着手した。彼等の希望は高まり始めた。彼等の興味は益々強さを加へ、彼等の勤勉はそれと歩調を共にした。穴は段々と深くなつたが、彼等は鶴嘴が何物にかカチリと中る音を聞く度毎、唯々失望を繰り返した。それは石塊か土塊に過ぎなかつた。竟にトムが言つた。

「駄目だなあ、ハック。箇所が間違つてゐるんだ。」

「間違がつてゐるつて、今度は間違ひやうがないぢやないか。影の映るところをキツカリと突き止めたぢやないか。」

「それはさうだが、他に未だ考へなけりやならないことがある。」

「かうよ、乃公達は十二時だらうと當推量をしたばかりだ。それだから實は十二時が過ぎてゐたかも知れないし、未だ十二時前だつたかも知れない。」

ハックはシャブルを取り落した。

「成程、そこだて。」と彼が言つた。「それだからいけないんだ。それぢやこゝは止めなけりやならぬ。時計がないからほんたうの十二時は分りつこない。それに魔法使や幽霊の出歩く夜夜中にこゝでこんな仕事をするのは氣味の悪い頂上だ。乃公は始終何か背後にあるやうな氣がしてならない。前面にも何か怪物が待ち構へてゐはしないかと思ふと、乃公は怖くて身體の振り向けやうがない。ここへ着いてからといふものは乃公は始終這ふやうにしてゐる。」

「もつともだ、ハック。僕だつてやつぱり同じことだ。泥坊は寶物を木の下に隠す時には番をさせるやうにきつと死人を一緒に埋めて置くといふからなあ。」

「ほんたうか？」

「ほんたうとも。人もさう言ふし、本にも書いてあらあ。」

「トム。乃公は死人のあるところなんかウカ／＼と餘り長居をするのは厭だぜ。死人に掛り合へば碌なことにならないに定つてゐる。」

「僕だつて死人に崇られたくはない。こゝへ埋つてゐるのがヒョククリと髑髏を擡げて何か言ひ出さうものなら……」

「止せやい、トム。馬鹿なことを言ふなよ、氣味の悪い！」

「實際氣味が悪いよ、ハック。僕はちつとも好い心持がしない。」

「おい、トム。こゝは止さうよ。何處か他を當つて見ようよ。」

「宜いとも、それに限る。」

「何處にしよう？」

トムは一寸の間思案してから言つた。

「あの幽霊屋敷さ。彼處なら間違はない。」

「厭なことだ、トム。乃公は幽霊屋敷は嫌ひだ、幽霊が出るんぢや死人よりはなほ氣味が悪いや。死人は物を言ふかも知れないが、幽霊のやうに此方の氣のつかない間に白装束で摺り寄つて来て、いきなり肩越しに顔を覗き込んだり齒を食ひしはつたりはしないからなあ。トム。乃公はとてもそんな怖いことは辛抱出来ない——誰だつて出来まい。」

「それはさうとも。けれどもハック。幽霊は夜だけしか出歩かない——晝間彼處へ行つて掘る分には邪魔しなからうぜ。」

「成程、それはさうだなあ。けれども晝間だつて夜だつてあの幽霊屋敷へ寄りつく人はないぢやないか？」

「ふむ、それは誰だつて人殺しのあつたところへわざわざ行きたくはないからさ。けれどもあの家へ

何か出るといふのは夜だけのことだ——それも窓のところを青い火が通るだけで、本式の幽霊ぢやないといふ話だ。」

「それにしても青い火が見えるやうなら、その直ぐ背後に幽霊があるに定つてゐる。それでなくちや理窟に合はない。青い火なんかは幽霊の外には使ふ者がいないからなあ。」

「それはさうだよ。けれども兎に角幽霊は晝間は出て來ない。晝間出て來ないなら何も怖がるに當らない。」

「うむ、宜いとも。お前がさう言ふならあの幽霊屋敷を一つ當つて見ることにしよう。けれどもこいつは危い仕事だぜ。」

彼等は最早この時には山を下りかけてゐた。見渡すと、月光を浴びた下の谷合の中程にその幽霊屋敷が立つて居た。これは全く人里離れた一軒屋で、垣根は疾うに失せ、雜草が入口の石段を匿す程まで生ひ繁り、煙突は崩れ落ち、窓框は風に吹き抜かれ、屋根の片隅がベコンと落ち凹んでゐた。子供達は窓のところを青い火が通るかと思つて稍暫く見詰めてゐた。それから場所柄時刻柄低い聲で話しながら幽霊屋敷を避ける爲めに右手へ進んで、カーヂフ山の裏裾の森を通つて家路へ急いだ。

二十七、幽霊屋敷

翌日の晝頃子供達は枯木のところに着いた。彼等は道具を取りに來たのであつた。トムは早く幽霊

屋敷へと苛立つた。ハックもかなり乗氣になつてゐたが急にかう言ひ出した。

「おい、トム。今日は何曜日だか知つてゐるか？」

トムは胸の中で七曜表を繰つて見た。さうして驚いたやうな眼付をしながらグイッと頭を擡げて、

「こいつはいけない！ 僕はちつとも氣がつかなかつたよ、ハック。」

「乃公もさ。けれども今急に、や、今日は金曜日だと思ひ出したんだよ。」

「厄介だなあ。けれどもハック。用心の上にも用心が大切だ。金曜日にこんな仕事に掛つたら、どんな眼に會ふかも知れない。」

「知れない？ 知れないぢやない。會ふに定つてゐると言つても宜いくらゐるものだ。他に縁起の好い日が何程もあるだらう。けれども金曜日は縁起が悪い。」

「それはどんな馬鹿でも知つてゐる。お前が今初めて言ひ出したことぢやないよ。」

「だから乃公が初めて言ひ出したとは言つてゐやしない。さうして金曜日だからだけぢやない。乃公は昨夜大變厭な夢を見た——鼠の夢を見た。」

「よせやい。縁起でもない。鼠が喧嘩をしたかい？」

「いゝや。」

「うむ。それなら未だ結構だよ、ハック。喧嘩をしない時は唯災難が手近にあるといふ前知らせだけだ。それなら乃公達はよく氣をつけてその災難に罹らないやうにしてゐれば宜いんだ。今日はこの仕

事は中止にして遊ばうよ。ハック。お前はロビン・フッドを知つてゐるか？」

「知らない。何處の人だい、ロビン・フッドといふのは？」

「何さ、イギリスで一番豪かつた人だ——さうして一番善い人だつた。山賊だつたよ。」

「素敵だなあ！ 乃公も成りたいなあ！ 山賊ならものを取つたらう？ 誰のものを取つたんだい？」

「役人だの僧正だの金持だの王様だの、物はかり取つたが、貧乏人には決して手をつけなかつた。貧乏人を可愛がつて、始終物を分けてやつた。」

「成程、心掛けの好い人だつたに相違ないなあ。」

「さうとも、ハック。僕が保證する。實に心掛けの立派な人だつたよ。あんな人は今とてもないなあ、實際。この人に敵ふ者はイギリス中に一人もなかつた。どんな奴でも片手で負かしてしまふんだからなあ。水松弓を引き絞つて一哩半のところから十錢銀貨を射つたが、百發百中だといふから驚いてしまふ。」

「水松弓つてどんなもんだい？」

「どんなものだか見たことはないけれど、無論やつぱり弓には相違あるまい。さうして若し銀貨の真中へ中らないと、大將その場にガクリと坐つて口惜し泣きに歎き狂ふといふことだ。それはさうとして、乃公達はロビン・フッドごつこをして遊ばう——面白いぜ。僕が教へてやる。」

「宜からう。賛成だ。」

そこで彼等は時々物欲しげな眼付を谷合の幽霊屋敷に浴せ、明日の掘り出し物の見込を語りひながら、晝過を悉皆ロビン・フッドごつこに潰した。日が西に沈みかけた時、彼等は林のひよる長い夕影を横切つて家路に向ひ、間もなくカーヂフ山の森の中に姿を匿した。

土曜日の正午少し過ぎに彼等は又々枯木のところに現はれた。彼等は木蔭で一休みしてから、前に掘りかけた穴の中を少し掘つた。これは確な見込があつたからではなく、もう五六寸といふところまで掘り下げてゐながら諦めたあとへ、他の人が来かゝつて唯一鍬で寶物を掘り起したといふやうな話が往々あるとトムが言つたからであつた。ところがこの際はさうは問屋で卸さなかつたので、彼等は道具を擔つて出かけた。むだ骨折のやうだつたけれど、とにかく好運を取りはづすやうな手落ちはせず寶掘りに成功するのに、爲なければならぬだけのことを爲終せたと思ひながら、その場を立ち去つた。

彼等が幽霊屋敷に辿り着いた時には炎天の裡に森閑としてゐるその邊の静けさに何となく物凄いところがあり、又屋敷の荒れ果てた淋しい有様に名状し難い陰氣さが付き纏つてゐたから、彼等は氣おくれがして一寸の間は内へ進み兼ねた。それから彼等は戸口へ這つて行つて震へながら覗き込んだ。草の生えた床のない壁の落ちた一室と昔風の煖爐と硝子戸のない窓と朽ちかけた階段が見えた。そこにもこゝにも到るところに蜘蛛の巣が張り詰めてあつた。間もなく彼等は窺つと入つて行つた——胸

をどきつかせ、ひそく囁き合ひ、微かな音も聞き取れるくらゐに耳を欬て、筋肉を緊張させ、いざといへば直ぐ逃げられるやうに身構へをしながら。

暫くすると周圍に慣れて彼等は稍度胸が据わり、自分達の大膽さに且つは驚き且つは呆れながら、その室を隅々まで仔細に取調べた。次に彼等は二階を見たかつた。これは退路を絶つやうな業であつたが、彼等はお互に虚勢を張り合ひ、道具を片隅に投げ棄て、階段を昇つて行つた。二階も同じやうに荒れ果てゐた。彼等は一隅に必ず何か秘密の籠つてゐさうな押入を見つけたが、それは全く見掛け倒しで、開けて見たら何もなかつた。今や彼等は勇氣が出て、大分仕事に油が乗つて來てゐた。彼等はそろく掘り始める爲めに下りて行かうとしてゐたが、その刹那に、

「シッ！」とトムが言つた。

「何だらう？」とハックは怯えて顔色を變へながら囁いた。

「シッ！ ……來た！ ……聞えるだらう？」

「うむ！ ……さあ、大變だ！ 逃げよう！」

「ぢつとしてゐろ！ 動くなよ！ 真正面に戸口の方へやつて來てゐる。」

子供達は板張りの節穴に目を押しつけて床の上に腹這ひ、恐れ戦きながら階下の形勢をうかがつてゐた。

「止まつたぞ……いやく——やつて來る……そら來た。最早口を利くなよ、ハック。大變なことに

なつた！　こんなところへ来るんぢやなかつたのになあ！」

二人の男が階下の室へ入つて来た。子供達はお互に肚の中でかう言つた。「おやく、此奴は近頃二度町で見かけた啞聾の年寄のスペイン人だ——もう一人は一向覺えのない顔だ。」

「もう一人」は襤褸を着た薄汚い男で、人相も決して好くなかつた。スペイン人は肩掛を羽織つてゐた。房々とした白髻を生やし、長い白髪を縁の廣い帽子の下から垂らして、青色の塵除け眼鏡を掛けてゐた。入つて来た時、「もう一人」は低い聲で何か言ひ續けた。彼等は壁に背中を向け戸口に面して地面に坐り、口を利いてゐた奴はなほ語り止めなかつた。彼の人目を忍ぶやうな態度は稍寛いで、彼の言葉は前よりも明晰になつて来た。

「い、や。」と彼は言つた。「乃公もそのことはよく考へて見たが、感心しない。危いよ。」

「危えつて！」と啞聾の筈のスペイン人が唸つた——これには子供達は甚く驚いた。

「この臆病者め！」

この聲を聞くと子供達は息を詰めてガタ／＼と震へ出した。それは印度ジョーの聲であつた！　暫く沈黙が續いた。それからジョーが言つた。

「何が危えつて河上のあの仕事ぐれえ危え話はなかつたぜ——それでも一向足がつかねえぢやねえか？」

「あれは別だ。河上は大丈夫だ。周圍に他の家は一軒もない。乃公達の手を出したことが知れる氣遣

ひはない。」

「それぢやどうだい、晝日中こゝへ来るくれえ危えことはなからう？　——乃公達を見かけた者は誰

だつて疑るだらうぜ。」

「それは乃公も承知だ。けれどもあんなぶまな仕事をしてしまつては、他にこゝほど重寶な匿れ場所はないなかつたんだ。乃公はこの家はもう縁切りにしたい。昨日でおしまひにしたかつたんだが、あの厄介な餓鬼共が直ぐ眼につく山の上で遊んであやがつたから、出ようつたつて出られなかつたんだ。」

その「厄介な餓鬼共」はかう聞いて再びガタ／＼震ひを始め、昨日金曜日と氣がついて一日待つことにしたのをこの上もない好運だと思つた。彼等は何なら一年も待てば宜かつたにと残念がつたが、今更どうしやうもなかつた。

二人の男は食物を出して辨當を使つた。雙方長いあひだ考へ込んで黙つてゐた後、印度ジョーが言つた。

「おい、相棒。手前は手前の出所の河上へ歸れ。歸つて乃公から音信のあるまで待つてゐろ。乃公はどうにかかうにかして様子を見に、もう一遍町へ這入り込むわ。乃公が周圍を少し探つて歩いて手順が好いと見極めがついてから、乃公達はその危え仕事をやらかすでしょう。それからテキサスへ逃げる。二人で一緒に歩いて行かう。」

この相談に異存はなかつた。二人は間もなく欠伸をし始め、印度ジョーがかう言つた。

「乃公は睡くて仕様がねえ。今度は手前が見張りをする番だ。」

彼は雑草の中に體軀を縮めて直ぐに鼾をかき出した。彼の相棒はその音を憚つて一二度彼を揺振つた。すると彼は靜になつた。そのうちに番人も睡氣を催した。彼の頭がコクリくと段々下つて來て、今や二人で鼾をかき始めた。

子供達はやれ有りがたしと太い溜息をついた。トムはかう囁いた。

「今こそ逃げ時だ——さあ、來いよ！」

ハックは言つた。

「とても行けない——彼奴等の眼を覺ますくらゐなら乃公はこゝで死ぬ方が好い。」

トムは頻りに勧めた——ハックは決して應じなかつた。竟にトムは徐つと竊り立ち上つて獨りで出懸けた。しかし彼の踏んだ第一歩が狂つて床に恐しい音を軋らせたので、彼はギョツとして竦んでしまつた。彼は再び動かうとはしなかつた。子供達はもうこの世が盡きて永遠に入り、その永遠が既に白髪頭になつたに相違ないと思はれる位まで、足遅い時間を待ち侘びながらそこに寝轉んでゐた。それからたうとう日が沈みかけたと氣がついた時、彼等は有りがたいと思つた。

今や片一方の鼾が止んだ。印度ジョーは起き直つて四周を睨み廻し——頭を膝の上に垂れてゐる相棒に凄い微笑を浴せかけ——足で揺り起してかう言つた。

「おい、手前は番人ぢやねえか？ まあ宜いや——何事もなかつたから。」

「おや！ 乃公は寢てゐたかい？」

「うむ、一寸だ、一寸だよ。ところで兄弟分。もうそろそろ出懸ける刻限だぜ。こゝへしまつて置いた商賣物はどうしやうかなあ？」

「さうさなあ——今迄通りやつぱりこゝへしまつて置きな。高飛をする時までは取り片付けるにも及ぶまい。銀貨で千三百圓は持ち廻るに骨が折れらあ。」

「道理だ——それぢやさうしやう——もう一遍こゝへ來るにしてもわけはねえや。」

「さうとも——けれども今迄通り夜來ることにしようぜ——その方が宜いわ。」

「さうだ。けれどもおい。乃公がああの仕事にいよく手を下す機會を見つけるまでには未だ大分暇が要るかも知れねえ。油断はならねえぜ。こゝは商賣物をしまつて置くには随分劍呑なところだ。どうだい、几帳面に埋めて置かうぢやねえか？——深く埋めて置かうよ。」

「それは好い考へだ。——と相手は答へて、室の片側まで歩き、煖爐の奥の方の石を一個揚げて、しつくり重い袋を取り出した。彼は中から自分に五六十圓、印度ジョーにもそのくらゐ引き去つて、今や隅の方に膝這ひながら大きな庖丁で地面を掘つてゐた相棒に袋を渡した。

子供達は忽ちにして不安も難澁も悉く忘れてしまつた。彼等は羨ましうな眼付をして一舉一動を打目成へた。運が向いて來た！——有ゆる想像に絶した大成功！ 千三百圓は五六人の子供を富豪たらしむるに足る金額であつた！ この位都合の好い寶探しはなかつた——何處を掘らうかと尋ね

廻る面倒は一切なかつた。彼等は絶えず眼惹き袖引きして、「おい、こゝへ来てゐて宜かつたなあ！」といふ意味を言葉よりも明瞭に傳へ合つた。

ジョーの庖丁が何物かに當つた。

「おや！」と彼は言つた。

「何だい？」と彼の相棒が言つた。

「半分腐つた板だ——いや、箱だよ、これは。おい——一寸手を借しな。何が入つてゐるか見ようぢやねえか。うむ、宜しく、もう穴が明いてゐらあ。」

彼は手を突つ込んで中のものを掬へ出した——

「おい、金だ！」

二人は一掴みの金を吟味した。それは金貨であつた。二階の子供達は彼等に劣らぬ興奮と歡喜を感じた。

ジョーの相棒は言つた。

「此奴は手つ取り早く片付けようぜ。煖爐の向う隅の草の中に錆び腐つた古い鶴嘴がある——乃公は今しがたこの目で睨んだ。」

彼は急いで行つて子供の鶴嘴とシャブルを取つて、仔細にぢつと検め、首を振つて、何か口吐言を言ひ、それからそれを使ひ始めた。箱は間もなく掘り起された。それは餘り大きくはなかつた。長い

年月埋つてゐたと見えて朽ちてゐたが、鐵帶が廻してあつて、以前は極めて堅牢なものだつたに相違なかつた。二人は嬉しさ餘つての無言の儘、暫くの間この寶物を眺めてゐた。

「兄弟分。二萬圓はあるぜ。」と印度ジョーが言つた。

「マーレルの一味が」と夏この邊をしきりにうるつき廻つたといふ評判が始終あつたぜ。」と相棒が言つた。

「それは乃公も聞いてゐる。」と印度ジョーが言つた。「これはきつとその連中のだぜ。」

「どうだい、これだけ手に入りや手前はもうあの仕事はしなくつても宜からう。」

合の子は眉を擧めた。彼は言つた。

「手前は乃公の肚の中が分らねえんだなあ。あの仕事の経緯をちつとも知らねえんだなあ。あれは物取りばかりぢやねえ——意趣返しだ！」
「癡惡な光が彼の眼に燃え立つた。」「手前には是非手傳つて貰はなけりやならねえ。あの仕事は片付いたらそれ、直ぐにテキサスへ飛ぶんだ。手前は女房子のところへ歸つて、乃公から沙汰のあるまで待つてゐて呉れる。」

「うむ——さうするとこの掘り出し物はどう片付けるんだい——又こゝへ埋めて置くか？」

「さうよ。(二階では踊り出したいくら喜んだ。)いや、とでもこゝへは埋めて置けねえ！」

(二階は甚く失望した。)乃公は忘れてゐた。その鶴嘴には新しい土が附いてゐたぜ。(子供達は忽ちギョツとした。)どうしてこゝに鶴嘴とシャブルが置いてあるんだらう？ どうして新しい土が附

いてゐるんだらう？ 誰かこゝへ持つて来やがたらう——持つて来た奴等は何處へ行きやがたらう？ 手前は誰か来た音を聞きはしなかつたか？——誰か見掛けはしなかつたか？ 何？ 又埋めて置いて奴等が来て掘るかどうか見届けろつて？ いけねえ。乃公の匿れ場へ持つて行かう。」

「成程、上分別だ。そこまでは乃公も気がつかなくかつた。一號だらう？」

「いや——二號だ——十字架の下だ——一號はいけねえ——餘り明けつ放した。」

「宜いとも、萬事呑み込んだ。ところで最早出懸けても宜いくらゐ暗くなつて来たぜ。」

印度ジョーは立ち上つて用心深く外を覗きながら窓から窓へと歩いた。間もなく彼は言つた。

「一體誰がこゝへこの道具を持つて来やがたらう？ ことによると奴等は二階にゐるんぢやなからうか？」

子供達は息がつけなくなつた。印度ジョーは庖丁に手を掛けて、決し兼ねたやうに暫く立ち止まり、それから階段の方へ向き直つた。子供達は押入へ匿れようと思つたが動く力が、抜けてしまつた。聲音が階段をギイ／＼いはせながら上つて来た——せつば詰まつて子供達は死物狂ひの決心を鼓した——彼等は押入へ飛び込もうとして身を起した。その刹那に朽ちた材木のメリ／＼ツといふ音が聞え。印度ジョーは壊れた階段諸共ズシーンと地面へ投げ落された。彼は悪態を吐きながら這ひ起きた。彼の相棒は言つた。

「おい／＼、よせやい。骨折損だ。誰かが二階にゐるなら、何時までなりとゐさせろな——構ふ事は

ない。かう階段が落ちてから飛び下りて怪我をしたと言ふなら、御勝手次第だ。もう十五分すると日が暮れらあ——それから乃公達の跡を跟けたいと言ふなら跟けさせるまでのことだ。異存はない。乃公の睨んだところではこゝへこの道具を持つて来た奴等は乃公達を一眼見て幽霊か悪魔か何かと早合點をしたに相違ない。きつと今頃は未だセッセと逃げてゐる最中だ。」

印度ジョーは一寸の間咥いてゐた。それから成程相棒の言ふ通り最早暮れかけてゐるから出懸ける支度をするにはこの上手間を取つてゐられないと思つた。暫くの後彼等は段々濃くなつて来る夕闇に乗じて幽霊屋敷を抜け出し、大切の箱を携へて川の方へ進んで行つた。

トムとハツクは弱り切つてゐたがそれでも大分安心して立ち上り、家の丸太の隙間から泥坊共の後姿を一心に見送つた。跡を跟ける？ どうして／＼。彼等は首の骨を挫かずに地面へ下り山越しに家路に就くことが出来るのをこの上ない儲けものと思つてゐた。彼等は餘り物を言はなかつた。彼等は口が利けないほどお互同志を怨み合つてゐた——鶴嘴とシャブルを彼處へ持つて行くやうになつた不運を呪つてゐた。若しあんなことがなかつたら、印度ジョーは決して疑ひを起さなかつたらう。彼は彼の「意趣返し」が濟むまで銀貨と一緒に金貨を悉皆彼處に匿して置き、掘つて見ると蛙一疋もゐないに吃驚仰天するだらう。道具を彼處へ持つて行つたのは返す／＼も不覺であつた。

彼等は、かのスペイン人が意趣返しの仕事の機会を覗ひに町へ顔を出した折には見張つてゐて何處でも構はないからその「二號」といふところまで跟けてやらうと決心した。それから氣味の悪いこと

がトム胸に浮んだ。

「意趣返し？　おい、ハック。乃公達のことだつたらどうしよう？」

「よせよ、おい！」とハックは殆んど絶え入りさうに言った。

彼等はこの問題を語り續けた。さうして町へ入つた頃にはこれは恐らく誰か他の人のことだらう——萬一こつちにしても高々トム獨りだらう、かの折證人に立つたのはトムだけだからといふ解釋に一致した。

たゞ一人危い境遇にあるのはトムには頗る心元なかつた。仲間があれば確に凌ぎ好からうにと彼は思つた。

二十八、小探偵

日中冒した危難がその夜トムの夢を甚く騒がせた。四度彼はあの夥しい財寶に手を掛けたが、眼が覺めて苦々しい失敗の實況に立ち戻つた時には、四度ともそれが彼の指の間から消え失せてゐた。曉方彼の大冒險の一部始終を思ひ出しながら寢轉んでゐた時、彼はそれが妙に穩かに遠く見え——どうやら他の世か餘程の昔に起つた事柄のやうに感じられた。それから彼のかの大事件その物が元來夢だつたに相違ないと思ひ浮んだ。かう考へるには極めて有力な理由が一つあつた。即ち彼の目撃した金銀貨の額は眞實とは思へぬ程莫大であつたといふことがそれであつた。彼は千とか萬とかいふ數は

單に言葉の綾に過ぎず、こんな金額は實際は世の中になくと思つてゐる點において彼のやうな年輩の子供達と同様であつた。彼は百圓といふがごとき巨額の金が現金で一個人の手にあらうとは片時も想像したことがなかつたからだ。若し彼の探してゐる埋れた財寶について彼の見込額がどのくらゐだつたと穿鑿したら、それは眞正の小銀貨一と掴みと幻に想像するにとゞまる大銀貨一桮に過ぎなかつたであらう。

併しながら彼の冒險の委細は思ひ返すほど著しく濃厚明瞭に現はれて來た。そこで彼は間もなくあの事件はやはり夢でなかつたらしいと思ふやうになつた。彼は朝御飯をそこ／＼に濟ませて、ハックに會ひに出懸けた。

ハックは平底船の舷に腰を掛け、足を無頓着に水の中に垂れ、極めて陰氣な顔をしてゐた。トムはハックに先づ昨日のことを言ひ出させようと思つた。若し彼が何とか言ひ出さないやうなら、それは例の大事件が夢に過ぎなかつた證據である。

「おい、ハック。どうだい？」

「おい、トム。どうだい？」

暫く無言が續いた。

「トム。若しあの忌々しい道具を枯木の下へ置いて行つたら、乃公達はあの金が手に入つたらうにあ。酷い眼に遭つたなあ！」

「うん、それぢや夢ぢやない、夢ぢやないんだな！ 乃公は夢だつたら宜いと思ふくらゐだ。實際忌
忌しいからなあ、ハック。」

「何が夢ぢやないつて？」

「何さ、昨日の事件さ。乃公は夢だと思つてゐた。」

「夢だと！ 若しあの階段が壊れて落ちなかつたら、夢どころの騒ぎでないことがほんたうに分つた
らうぜ。乃公は昨夜は一晚夢ばかり見てゐた——どの夢にもあの青眼鏡のスペインの悪魔が出て来て
乃公に付き纏やがつた——あの畜生くたばつてしまへ！」

「い、や、畜生くたばつてしまへぢやないよ。畜生出て来いだよ。彼奴を見つけて金の在所を突き止
めるんだ。」

「トム。彼奴は決して見つからないよ。あんな大金を手に入れる機會は一生に唯一度しか来るものぢ
やない——その大切の機會を乃公達は失してしまつたのだからなあ。兎に角乃公は彼奴に會ふとな
る、恐しくて手足が利かなからうと思ふ。」

「成程、乃公だつて氣味は好くないが、兎に角彼奴を見つけて——跡を跟け度い——あの二號といふ
ところまで。」

「二號——さう、二號だ。乃公はその二號の事を考へてゐたんだが、どうも一向分らない。何の
ことだらうなあ？」

「分らない。わづかしいなあ。どうだらう、ハック——ことによつたら家の番號ぢやなからうか？」
「成程！ ……いや、トム、さうぢやあるまい。若しさうだとすると、こんな小さな町ぢやない。

この町には家に番號はついてゐないからな。」

「ふむ、さうだなあ。待てよ。分つた！ ——室の番號だ——宿屋の室のだ。さうだよ。」

「成程、圖星だ！ それに相違ない。宿屋は二軒あるばかりだ。直ぐに分るよ。」

「ハック。お前は乃公が来るまでここに待つてゐろ。」

トムは直様立ち去つた。彼は人中へハックと一緒に出るのは好ましくなかつた。彼は半時間すると
戻つて来た。一番上等の宿屋では二號室は最早長いこと若い辯護士が借り切つてゐて、今もその儘だ
といふことを確めた。それより格の低い宿屋では二號室が疑問であつた。宿の子息子の話によると、そ
の室は始終閉切りで、夜分の外は人の出入するところを見ることがないといふのであつた。小息子は
それがどういふわけかに就いてはこれぞといふ取り留めたことは何も知らなかつた。彼は多少好奇心
を持つてゐたが、それも至つて微弱なものであつた。恐らくあの室には幽霊が出るのだらうぐらゐの
ことで満足し、その祕密を精一杯大袈裟に語つた。現に昨夜はあの室に燈火の點いてゐるのを見た
と言つた。

「ハック。乃公の聞き出して来たのはこれだけだ。どうもこれがつきり乃公達の探してゐる室らし
いぜ。」

「それに相違なからうよ、トム。ところでどうするよ」

「さあなあ。」

トムは長いこと考へ込んでゐた。それから彼は言つた。

「かうしたらどうだらう、あの二號室の裏の戸口は——あの宿屋と裏のガタ馬車のやうな古い煉瓦倉の間に狭い路次があるだらう——あの路次へ通じる出口になつてゐる。ところで、お前は見つかるだけ澤山の鍵を手に入れる。乃公も伯母さんの鍵を悉皆搔つ攫ふ。さうして闇の晩が來次第二人で行つてあの戸を明けるんだ。それから宜いかい、印度ジョーの見張り番をするんだ——彼奴は意趣返しの場合を探りにもう一遍町へ寄るつて言つてゐたからなあ。若し彼奴を見つけたらお前は跡を跟けるんだ。さうして若し彼奴があつた二號室へ行かないやうなら彼處ぢやないんだ。」

「弱つたなあ！ 乃公は獨りで彼奴を跟けるのは厭だ。」

「なあに夜やるんだよ、夜。先方は多分お前に氣がつくまい——若し氣がついたつて何とも思ひはしなからうよ。」

「さうさなあ、かなり暗い晩なら乃公だつて跟けるよ。けれども覺束ないなあ。まあい、や、一つやつて見よう。」

「乃公も暗ければきつとやるよ、ハック。彼奴は意趣返しが出来ないと諦めをつけ、いきなりあの金を取りに行くかも知れない。」

「それはさうだよ、トム。それはさうだ。乃公は彼奴を是非跟ける。命に懸けても突き止める！」

「大きく出たな。きつと弱音を吹くなよ、ハック。乃公は大丈夫だからな。」

二十九、二號室

その晩トムとハックは彼等の冒險事業に直様着手した。彼等は九時過まで宿屋の近傍をぶらついてゐた——一人は少し離れたところから路次を見守り、もう一人は宿屋の裏口から目を放さずに。誰も路次から出入りしなかつた。スペイン人らしい姿が裏口から出入りする様子もなかつた。夜は晴らしかつた。そこでトムは若しかなり闇になつたらハックに猫の鳴き真似で誘つて貰ひ、抜け出して來てあの戸に鍵を合はせて見ようと手筈を極めて家へかへつた。しかしその夜はたうとう曇らなかつた。ハックは十二時頃見張番を罷めて、砂糖の大空樽の中へ寝る爲めに引き取つた。

火曜日には子供達は同じやうに不成功であつた。水曜日にも運が向いて來なかつた。しかし木曜日の晩は大分見込があつた。トムは伯母さんの錫の角燈とそれを包む積りの大きなタオルを持つて早目に抜け出て來た。彼は角燈をハックの砂糖樽の中に匿した。それから見張番が始まつた。十一時に宿屋は店を仕舞つて、燈火を消した。その界限ではこの家の燈火だけがそれまで點つてゐたのであつた。スペイン人は一向見えなかつた。路次に入出入りする者は一人もなかつた。萬事好都合であつた。周圍は眞暗闇、物一つ動かぬ静けさが唯時々遠雷の囁くやうな音に破られるばかりであつた。

トムは彼の角燈を取り、ハックの櫛の中で灯を點し、タオルで隙間なく包んで、二人の冒険家は宿屋を指して闇の中を忍び始めた。ハックは番人を勤め、トムは路次の中へ手探りしながら進み入った。それからハックの胸を山のやうに重く押しつける心配な待つ間が暫く続いた。彼はせめて角燈の閃光でも見れば宜いと飽み始めた——見えたらギョツとするだらうが、少くともそれによつてトムが未だ生きてゐるといふことを確かめられると思つた。トムが行つてから最早餘程時刻が移つたやうに感じられた。きつと彼は氣絶してゐるに相違ない。或は既に殺されて了つたのだらう。ひよつとする恐怖と興奮の爲めに心臓が破裂したのかも知れない。不安のあまりにハックは段々と路次へ吸ひつけられた。彼は有らゆる恐しい事柄を想ひ浮べ、今にも大災難が降り湧いて彼の息をビタリと止めてしまふだらうと刻々豫期してゐた。否、事實彼の息は最早止めるといふ程も残つてゐなかつた。何となれば彼は今は唯極く小刻みに喘げるだけで、彼の心臓はその搏ち方から察すると間もなく絶え入つてしまひさうであつた。忽ち燈火の閃きがサツと現れ、トムが彼の側を飛ぶやうにして駆け通つた。「逃げる！」と彼が言つた。「逃げる、命がけだ！」

彼はそれを繰り返して言ふには及ばなかつた。一遍で澤山であつた。二度目の勸告が肩から洩れない中に、ハックは一時間三四十哩の速力を出してゐた。子供達は町の下外れの今は使つてゐない屠牛場の小屋へ着くまでは決して止らなかつた。彼等がこの匿れ場へ飛び込んだ刹那に夕立が寄せて雨がザア／＼降り出した。息をつけるやうになるや否やトムはかう言つた。

「ハック。怖かつたなあ！ 乃公は極く／＼窃つと鍵を二個試して見たんだが、氣のせゐか落ちついて息も出来ないくらゐガチ／＼音がした。加之に鍵は嵌まつた切り廻らないんだ。で、何の氣なしに握りを握ると、戸が開いたぢやないか！ もと／＼鍵はかつてなかつたんだ！ 乃公は占めたと思つて跳ね込んで、角燈からタオルを振り落した。すると驚いたの何のつて！」

「何だ？ 何があつた、トム。」

「ハック。乃公はもう少しで印度ジョーの手を踏むところだつた！」

「嘘だらう？」

「ほんたうだ！ 奴、床の上にグツスリ寝込んでゐた。やつぱりあの眼鏡を掛けて兩腕を長々と伸ばして。」

「驚いたなあ！ それからどうした？ 奴、目を覺ましたのかい？」

「いや、身動きもしなかつた。酔つ拂つてゐたらう。乃公はタオルを掴み上げて一目散に逃げ出した。」

「よくタオルに氣がついたなあ！ 乃公なら忘れて來るところだ。」

「だが乃公は忘れないよ。失さうもんなら伯母さんに酷い目に合ふからなあ。」

「おい、トム。あの箱は見えたかい？」

「いや、ハック。乃公は見廻す暇がなかつた。箱も見なかつたし、十字架も見なかつた。塚が一本と

錫の盃が一個印度ジョーの手近の床の上に轉つてゐた。さうだ。室の中には樽が二個と壘が未だ澤山あつた。これであの幽霊部屋の正體が解つたらう。」

「どうして？」

「どうしてつて、あの室へ出る幽霊はウイスキーだ。多分何處の禁酒旅館にも幽霊部屋が一つはあるんだらうよ、ハック。」

「成程、大方そんなことだらうよ。それはさうと、トム。若し印度ジョーが酔つ拂つてゐるなら、今こそあの箱の取り時だぜ。」

「それはさうよ！ お前やつて見ろ。」
ハックは震へた。

「まあ、御免蒙る——眞平だ。」

「乃公も御免だよ、ハック。印度ジョーの側に壘が一本あるだけぢや心細いや。三本あつたらすつかり酔つ拂つてゐるんだらうから、乃公もやつて見るんだけれど。」

二人は長い間考へ込んで黙つてゐた。それからトムが言つた。

「おい、ハック。乃公達は印度ジョーの不在を突き止めるまでこの上この仕事には手をつけないことにしよう。今直ぐやるのは餘り向ふ見ず過ぎるよ。ところが若し毎晩番をしてゐれば、乃公達は何時かきつと彼奴の出て行くところを見かけるに定つてゐる。その時手つ取り早くあの箱を攫つてし

まふんだ。」

「成程、合點だ。乃公は今夜は夜つびて番をしよう。若しお前が晝間の方を受け持つて呉れ、ば乃公は毎晩でも引き受ける。」

「若し奴が出懸けたらお前は飛んで来て猫の鳴眞似さへすれば宜いんだ——若し乃公が寝てゐたら、窓へ小石を打付けるんだ。すれば乃公は間違なく出て来る。」

「宜いとも、上等だ。」

「さあ、ハック。夕立が止んだ。乃公は家へ歸る。もう二三時間で夜が明けるだらう。お前は戻つて行つて夜の明けるまで番をするんだ。宜いかな？」

「宜いつて言つてゐるぢやないか、トム。乃公が番をするよ。乃公は一年間毎晩あの宿屋へ詰めかける決心だ！ 乃公は晝は悉皆寝て夜は悉皆番をする。」

「それは結構だ。ところで何處へ寝ようと言ふんだい？」

「ベン・ロージャースの家の草乾場へ寝る。ベンも承知だし、ベンの家の黒ん坊のジエークも承知だ。乃公は頼まれ、ば何時でもジエークに水を汲む手傳ひをしてやる。彼奴も乃公が頼むと取つて置きさへすれば何時も食物を分けて呉れる。彼奴はなかく話せる黒ん坊だぜ、トム。」

「ふむ、さうかい。それぢや晝間お前の手を借りるやうな事が起らなけりや、乃公はお前を寝かして置くぜ。邪魔をしには來まい。若し夜分何か出來したら飛んで来て鳴いて呉れよ。」

三十、ハツクの追跡

金曜日朝トムが先づ耳にしたのは楽しい音信であつた——判事サッチャー氏の一家が夜前町へ歸つて來たのであつた。印度ジョーも財寶も差當りは第二の問題になつて、ベツキイがトムの屈託の主な部分を占めた。彼は彼女に會ひ、彼等は一群の學校友達と共に種々の遊戯に打ち興じた。一日は特に満足に終つた。ベツキイは長い約束で延引になつてゐた遠足會を明日催して呉れるやうにと頻にお母さんを強請り、お母さんは承知した。娘は限りなく喜んだ。トムも劣らず嬉しがつた。招待状がその向々へ日の暮れない中に廻された。忽ち町の子供達は明日の支度と楽しい豫想に熱狂した。トムは調子づいてかなり晩くまで寝つかれず、ハツクの猫の鳴聲が聞えるかと待ち設け、うまく行けば明朝ベツキイ初め遠足會の連中に掘り出し物を見せてアツと言はせる事が出來ると思つてゐた。しかし彼は失望した。その晩は何等の合圖も來なかつた。

たうとう朝になつて、十時か十一時頃には燥ぎ切つた子供達の一隊がサッチャー判事の家を集まり出發の用意が萬端整つた。年寄連中が加はつて遠足會の興を殺ぐことはしない習慣であつた。子供達は十八九の娘さんや、二十三四の青年紳士各數名に托して置けばそれで大丈夫と思はれてゐた。古い小蒸氣が一艘當日の催しの爲めに借り切つてあつた。間もなく陽氣な一群は御馳走を詰めた籠を肩に掛けて本町道を練り始めた。シッドは病氣だつたのでこの遊山に漏れ、メリイは彼の相手をする爲め

に家に居残つた。サッチャー夫人が別れる折にベツキイに言つたことはかうであつた。

「歸りは大分晩くなるでせうよ。何なら今夜は渡船場の近所にお住ひのお友達のお家へ泊めて戴いたが宜いでせうよ。」

「お母さん。それなら私、スシイ・ハーバーさんのお家へ泊めて戴きますわ。」

「さうなさいよ。お行儀を好くして御面倒を掛けないやうになさいよ。」

「ねえ、かうしよう。ジョー・ハーバーのところへ行かないでドグラス未亡人のところへ泊ることにしよう。あすここにはアイスクリームがあるよ。何時行つても澤山ある。奥さんは僕達が行くと大喜びをするよ。」

「お、さぞ面白いでせうね？」

ベツキイは一寸考へて言つた。

「しかしお母さんが何といふでせう？」

「お母さんに知れるもんですか。」

女の子は考へ迷つてゐたが、澁々かう言つた。

「私、悪いことだと思ふけれど——」

「悪い——大丈夫ですよ！ お母さんが知らなければ構はないでせう？ あなたの祖母さんはあなた

が安全であればい、と思つてゐるだけだ。それに未亡人の家のことを思ひ出したならば、きつとそこへ泊るやうに仰有つたに違ひない。

ドグラス未亡人の大袈裟な歡待は誘惑の餌だつた。それとトムの説服とが結局ベツキイを負かした。そこで彼等は夜の豫定については誰にも話さないことに決めた。

忽ちトム胸には今夜ハックが来て合圖をするかも知れないといふ考が浮んだ。この考は少なからず彼の晩の計畫から感興を殺いだしたが、彼はドグラス未亡人家に於る面白い遊びを思ひ切ることが出来なかつた。彼は考へた——昨夜も合圖がなかつた、恐らく今夜もないに違ひない、だから家に歸るには及ばない。そしてそこが子供らしい所で、彼はより強い誘惑の方に従ひ、その日は例の金のこととはもう考へないことにした。

町から三哩河下で小蒸氣はとある谷合の森の入口に止まり、そこに繩を繋いだ。一行は蟻の群るやうに岸邊に吐き出され、間もなく森の奥と岩の高みから叫んだり笑つたりする聲々が遠近に響き起し始めた。汗をかいたり勞れたりするやうな運動が數限り行はれて、暫くすると子供達は空腹を催して根據地へ引き揚げ、そこでお辨當を開いた。御馳走が濟んだ後、彼等は枝を張つた櫛の林の蔭で暫時休息と談話に餘念もなかつた。その中に誰かかう叫んだ。

「誰か洞穴へ入るものはないか？」

我も我も入ると言つた。蠟燭が幾束か用意して來てあつた。忽ち子供達は一齊に山へ駆け登り始め

た。巖窟の入口は山の腹にあつて——Aといふ字の形をしてゐた。その岩丈な櫛材の戸は門が外してあつた。内には冷蔵庫のやうにヒヤ／＼する小さな一室があつた。これは人の拵へたものでなく、その天然の壁は常に冷汗を泌ませてゐる堅固な石灰石から成つてゐた。この眞暗闇の中に立つて日光を受けた青葉の谷合を見晴らすのは身を神仙の境に置くやうなすが／＼しい趣きがあつた。しかし子供達は直にその場の目覺ましい光景に馴れて了つて、再びふざけ騒ぎ始めた。蠟燭が點るか點らないに皆はその持主目掛けてワーツと押し寄せる。寄越せ渡さぬの烈しい格闘がつゞいて起り、蠟燭は間もなく叩き落されるか掴み消されて了ふ。すると又ワーツといふ嬉しげな笑聲が鳴り響いて新しい争ひ合ひが始まる。しかし物事には何れも限りがある。これも間もなく下火になつて、一行は天井まで殆んど六丈もある岩壁を燭光によつて兩側に仰きながら洞窟内の本路を爪先下りに前進した。この道は廣さ二間とまではなかつた。數歩毎にやはり見上げるやうな、しかし更に狭い割目があつて、本道から左右へ小路を分岐させてゐた——何となればマクドールガルの洞窟は曲りくねつた細道の交り合つて行止りの知れぬ一大迷宮であつた。その岩隙間の絡み合つた大小無数の道を數日數夜續け様に歩き廻つてもこの洞の際限は決して見つからず、又下へ下へと地底へ降りて行つてもやはり同じことだらうといふ話であつた。この巖窟を探險し盡した者は一人もなかつた。それは不可能なことであつた。この地方の青年は大抵その一部分を知つてゐた。さうしてこの分つてゐる範圍から先へは餘り踏み出さないことになつてゐた。トム・ソウヤーの知つてゐるところもこれ以上でなかつた。

行列は半哩以上洞内の本道を辿つた。それから二人三人と散り分れになつて岐路へ外れ込み、物凄いやうな岩の隙間を走り傳ひ、路の交叉する地點に待ち受けてお互に不意打ちをし始めた。間道は多いし、蠟燭の灯のあるところ以外は眞の闇だつたから、彼等は安全地域を越さずとも半時間ぐらゐ隠れん坊をすることが出来た。

その中に一隊又一隊と子供達は喘ぎながら洞の口へ戻つて来た。彼等は頭から足まで蠟の滴りに汚れ、粘土に塗れ、遠足會の成功に全く満足してゐた。それから彼等は氣のつかぬ間に時刻が移り、既に日が暮れかゝつてゐたのに驚いた。鈴は最早半時間も皆を呼び集める爲めに鳴つてゐた。しかし一日の遊山がかういふ具合に終るのも時に取つての一興だつたから、彼等は些かの苦情もなかつた。小蒸氣が一行を乗せて河流に突き進んだ時、船長の外は誰も潰した時間を惜まなかつた。

ハックは小蒸氣の燈火が波戸場をピカつきながら通り過ぎた時、既に見張番に着手してゐた。彼は甲板に何等の物音をも聞かなかつた。何となれば子供達は疲れ切つた人々に有り勝ちのやうに、ぢつと静まり返つてゐたのであつた。彼は何處の小蒸氣かと怪み、何故波戸場へ寄らないのだらうと訝つた。それから彼は船のことは忘れて、自分の仕事に氣を配つた。空も雲つて闇夜になつて来た。十時になつた。車の音は絶えた。彼方此方の燈火が明滅し始めた。夜歩きの人達は皆姿を収めた。町は眠りに就いて、小見張番は獨り寂寥と幽靈を友とした。十一時が来て、宿屋の灯が消えた。今や到るところ闇になつた。ハックは倦きくするくらゐ長く待つたが、何事も起らなかつた。彼の信念は搖ぎ

始めた。かうやつてゐて何になる？ 實際何の效能があるのだらうか？ 止めにして寝ても宜かりさ

うなものではないか？

ふと物音が聞えた。彼は忽ち全身を耳にして傾聴した。宿屋の裏の戸が窸つと開いた。次の瞬間に二人の男が彼の側を擦れくに通り抜けた。一人は何か小脇に抱へてゐるやうであつた。それはあの箱に相違ない！ 愈々彼等はあの財寶を他へ移すのだ。さあ、トムを呼ばうか？ それも間の抜けた話である——そんなことをしてゐる間に彼等は箱を持つて姿を匿して了ひ、決して二度と見つかるまい。駄目々々、この儘直に彼等の跡を跟けよう。この闇では先づ以つて感付かれることもあるまい。かう思案して、ハックはちよこくと走り、纔かに目につかないだけの距離を保つて、跣足で猫のやうに物靜かに彼等の足跡を辿つた。

彼等は河沿ひの往來を五六町上手へ進んでから、辻を左に折れた。彼等はカーヂフ山から、辻を左へ折れた。彼等はなほずんく行つて、竟にカーヂフ山へ爪先上りになる小路へ出、それを登り始めた。彼等は片時も躊躇することなく山の中腹にある年寄のウエルス人の住宅を通り過ぎて、なほも上へ上へと志した。うまいぞとハックは思つた——彼等は舊の石切場へあの箱を埋めるのだ！ ところが彼等は石切場で一向止まらなかつた。彼等はどんく登つて山の頂上に達した。さうして小高い叢林の間の狭い路へ入つて、忽ち闇の中に姿を匿して了つた。ハックは最早見つかつたと思つて、追ひ迫り、彼等との間隔を短くした。彼は暫くトコト走り続け、それから餘り速過ぎるかと思つ

遣つて歩調を緩めた。なほ一寸の間前進し、次いでピタリと立ち止まった。彼は耳を澄ました。何にも聞えなかつた。自分の心臓の鼓動と思はれるもの、外、周囲は悉皆静まり返つてゐた。山の彼方から梟の鳴く聲が響いて来た——不吉な音である。しかし聲音は全く絶えてゐた。失策つた！逃げられて了つたのだらうか？ 彼は後を追つて駆け出さうとした。その刹那に彼から四尺ばかりのところで咳拂ひをしたものがあつた。ハツクはギョツとして、瘡に取りつかれたやうにガタ／＼震へた。この分では腰が抜けて倒れるに相違ないと思ひながら立ち竦んでゐた。彼は自分のいま居るところを辨へてゐた。彼はドグラス未亡人の屋敷へ通じる石段から五六歩のところにいることを認めた。宜しい、こゝへ埋めさせろ、こゝなら探すのに困難はない——と彼は思つた。

今や人聲が——極く低い聲が——印度ジョーの聲が聞えた。

「あの阿魔め！ 今夜は客があると見える——この晩ののに灯がついてゐる。」

「乃公にはちつとも見えない。」

これは知らぬ人の聲であつた——あの幽霊屋敷で見かけた知らぬ人の聲であつた。ハツクは全身ヒヤリとした——それではこれが「意趣返し」の仕事なのだ！ 彼は逃げ出さうと思つた。それから彼はドグラス未亡人が再三彼に親切を盡して呉れたことを想ひ起し、なほこの連中が今彼女を殺さうとしてゐるのだと氣がついた。彼は彼女のところへ駆けつけて危険を警告したかつたが、それはとてもかなはぬことと悟つた——走り抜けようとするれば彼等が遮つて彼を捕へて了ふのは見え透いた話であ

つた。彼がこれだけのことを考へたのは、相手の言葉に對して印度ジョーの次の言葉を發するまでのほんの瞬く間の事であつた。

「そこからは叢林があるからだ。かう——此方へ寄りねえ——さあ、見えるだらう、どうだ？」

「うむ、成程、客が來てゐるんだ、それに相違ない。中止にするが宜い。」

「中止にするつて！ さうして乃公は今この土地を離れ、ば最早二度と再び來ねえんだぜ！ 中止にしたら又といふ機會は恐らく決してあるめえ。幾度も言ふやうだが、乃公はあの女の金が欲しいんぢやねえ——金は手前に遣らあ。けれどもあの女の亭主が乃公に非道なことをしたんだ——それも一度や二度ぢやねえ——乃公を浮浪人だといつて牢へ打ち込んだ治安判事は彼奴だ。さうしてそればかりぢやねえ。未だ／＼何程もある。彼奴が乃公を鞭で叩かせやがつた——牢屋の前で黒ん坊のやうに鞭で叩かせやがつた——町中の者の見てゐるところで、乃公は鞭で叩かれた——おい、分つたか？ 彼奴は乃公を散々苛めて置いて死んだ。けれども乃公は彼奴の後家に意趣を返してやる。」

「おい、殺すなよ！ 殺すのはよせよ！」

「殺す？ 誰が殺すと言つてゐる？ 乃公が生きてゐたら、彼奴は是非とも打ち殺してやるんだが、

あの女は別だ。婦人に仇を討つ時には命は取らねえもんだ——縹緞を臺なしにしてやる！ 鼻を殺いでやる！ 豚のやうに耳を裁ち割つてやる！」

「けれどもそんな酷いことを……」

「餘計な説法は中止にして置け。手前の身の爲めにならねえぞ。乃公はあの女を寢臺へ縛りつけて呉れる。若し血が止らなくて死んだらそれまでの話だ。乃公の知つたことぢやねえ。おい、相棒。これにはお前に片肌脱いで貰ひてえ——友達甲斐にな——それでお前はこゝへ来てゐるんだ——乃公は獨りでは覺束ねえ。いよくといふ場合に尻込みをすると、打ち殺して了ふぞ。宜いか、分つたか？ さうして若し手前を殺すやうなことになるれば、乃公はあの女も生かしちや置かねえ——すれば誰がこの仕事をしたか恐らく手掛りがつかずに濟まうといふものだ。」

「ふむ、どうしても思ひ止れないと言ふなら仕方がない、さあ、はじめるとしよう。早い方が好いぜ——乃公はブル／＼ものだ。」

「今やれと言ふのか？ 客が来てゐるのに？ おい／＼、手前はどうも怪しいぜ——氣をつけねえと爲めにならねえぞ。今は黙目だ——燈火が消えるまで待つんだ——何も急ぐことはねえ。」

ハツクはこれから一しきり彼等が黙り込むだらうと察した——彼等の無言は百の腥い談合にも勝つて恐しいやうに思へた。そこで彼は息を殺して薄氷を踏むやうに後退りをはじめた。彼は片脚立ちの覺束なく殆んど踏みさうになつて身體の釣合を取りながら、足を窺つと固く地面に下した。彼は同じやうな苦心を込め同じやうな危険を冒して、又一步踏み退いた。それから更に一步なほ一步——枯枝が彼の足の下でパチンと折れた。彼は息を呑んで耳を澄ました。何も聞えなかつた——周圍は全くひっそりとしてゐた。彼はやれ／＼と命拾ひをしたやうに有りがたがつた。今や彼は自分の身體を蒸

汽船か何かのやうに用心深く扱つて方向を更へ直した——それから速刻みにしかも警戒して音を偷みながら歩き始めた。叢林の間の路から石切場へ出た時、彼は最早大丈夫と思つて、駈けること／＼。下へ／＼と急ぎ／＼、遂にウエルス人の家へ着いた。彼はその戸を破れるばかりに叩いた。間もなく老ウエルス人とその筋骨逞しい息子二人の頭が窓から現はれた。

「どうしたんだ、大騒ぎをして？ 誰だ、戸を叩いてゐるのは？ 何の用だ？」

「入れて呉れ——早く！ わけは直話すから。」

「一體誰だ、お前は？」

「ハツクルベリ・フィンです——早く入れてお呉れ！」

「ハツクルベリ・フィンだつて！ ふーむ、おいそれと戸を開けられない名前だなあ、けれども倅共や、入れてやりな。さうして何事が出来たか訊いて見よう。」

「私が言つたとは決して言はないでお呉れよ。」と、ハツクは家へ入ると直ぐに頼んだ。「どうぞ言はないでお呉れよ——知れると私は殺されてしまふ、きつと殺される——けれどもあのドグラスのをばさんには私は度々恩になつてゐるから、言ひたいんだ——私が言つたと決して言はない約束をして呉れ、ば私は言ふ。」

「この小僧きつと何か大切なことを聞き込んで知らせに來たのだな。さもなければかう妙にキョトキョトはしまいて。」と老人が言つた。「さあ、言つて御覽。大丈夫だ。こゝにある者は誰も決して他へ

は言はない。」

數分後には老人と二人の息子は十分身拵へをして山に登り、それ／＼手に武器を持って叢林の間の小路へ爪先歩きに入り込んでゐた。ハックはそれから先までは従いて行かなかつた。彼は大きな石の蔭に姿を匿して耳を敏く、ゐた。待ち遠い不安な沈靜が暫く續いた。それから忽ち數發の鐵砲の音と叫び聲が殆んど同時に響き渡つた。

ハックは委細を突き止める爲めに待つてゐなかつた。彼は飛び立つて、足のつゞくかぎり山を走り下りた。

三十一、ハックの手柄

日曜の朝、東が心持ち白み始めた頃に、ハックは手探りながら山へ登つて来て、老ウエルス人の立關の戸を靜かに叩いた。家の人は皆寢てゐたが、夜前の事件に氣が立つてゐたから、コトリといつても目覺め勝ちの有様であつた。直ぐに窓から返事が來た。

「どなたですか？」

ハックの怯えた聲が低い調子で答へた。

「どうか入れて下さい！ ハック・フィンです。」

「うむ、ハック・フィンなら夜でも晝でもこの戸は開ける——好く來た、お入り！」

これはこの浮浪少年には耳新しく且つ今までに全く聞いたことのない嬉しい言葉であつた。戸はすぐに開いて、彼は入つた。ハックは椅子に請ぜられ、老紳士とその丈の高い息子二人は手早く着換をした。

「ところで小僧さん。お前は未だ朝飯前で飯じからうなあ。日が昇ると直ぐに朝御飯の支度が出来。一緒に熱い奴を喰べよう——なあ、心配も遠慮も要らない。俺等は昨夜はお前がこゝへ戻つて來て泊れば宜いと思つてゐた。」

「私は甚く怯えて了つて逃げ出したんですよ。」とハックが言つた。「ピストルの音がした時、一目散に駆け出して足の續く間はちつとも立ち止まらなかつたんですよ。どうなつたか知りたいので今又やつて來ました。彼奴等には死骸にでも會ひたくはないと思つて、夜の明けない中にやつて來ました。」

「ふむ、可哀さうに、成程夜つびて案じ通したやうな顔をしてゐるな——朝御飯が濟んだらこゝで一寢入りするが宜い。けれども小僧さん、彼奴等は死にはしなかつたよ——眞に残念なことをした。俺等はお前から聞いて悪漢共の居所をチャンと知つてゐた。そこで奴等から三四間のところまで忍び寄つた——あの叢林の中は鼻を掴まれても分らないくらゐの闇だよ——すると俺は急に嚏が出たくなつた。時もあるうにほんたうに廻り合せの悪いことさ。俺は我慢しようと骨を折つたが、駄目だつた。

出物で仕方がない、たうとう出てしまつた。俺はピストルを突き出しながら先頭に立つてゐた。嚏の音を聞いて彼奴等が小路から外れようとして動き出したとき、俺は『打て！』と號令を掛けて、

ガサ／＼音のするところを目がけて打つた。息子等も打つた。けれども悪漢共は素早く逃げ出した。俺等は後を跟けて森の中へ駆け込んだ。弾丸は一向中らなかつたやうだ。奴等も逃げ際に各々一發打つたけれど、弾丸が風を切つて通つただけで、俺等はちつとも怪我をしなかつた。聲音を聞き失ふと早々俺等は追跡を罷めて山を下り刑事を叩き起した。連中は直様非常召集をして、河岸を見張りに出懸けた。さうして夜の明け次第に執行官が部下を連れてあの森を搜索することになつてゐる。息子等も間もなくその仲間に入る筈だ。あの悪漢共の人相や風體が多少なりと分つてゐると宜いのだがな——すると仕事之餘程爲易い。けれども闇の中で見たのではどんな奴だつたかお前には分らなかつたらうなあ。

「いえ、分つてゐます。私は町で見て跡を跟けて行つたんです。」

「これは耳寄りだ！ 言つて御覽——どんな奴だつたか見た通りを言つて御覽！」

「一人は一二度町へ来たことのある啞聾の年の寄つたスペイン人で、もう一人は人相の悪い襤褸を着た……」

「それで澤山。小僧さん。俺は其奴等を知つてゐるよ！ いつぞやドグラス未亡人の屋敷裏の森の中で其奴等に行き合つたことがある。成程、後暗いやうな風をして逃げて行つたよ。おい／＼倅共や早く出懸けて行つて今聞いた通りを執行官に話しなさい——朝飯は明日の朝喰べなさい。」
ウエルス人の息子達は早速出て行つた。彼等が室を立ち去る時、ハックは追ひ絶つてかう叫んだ。

「どうか私が言つたと誰にも言はないで下さいよ！ どうか頼みます！」

「宜いとも。さうお前が言ふなら俺等は言はない。けれどもハックや、お前の知らせた手柄はお前が取るのが當然だよ。」

「いえ／＼、手柄は要りません！ どうか言はないで下さい！」

息子達が行つて了つた時、老ウエルス人が言つた。

「倅共は言ひはしないよ——さうして俺も言はない。けれどもお前は何故さうこの事を内證にしたがるのかい？」

ハックはこの連中の一人に就いては既に持て餘すほど知つてゐるから、自分があの悪事をかれこれ言つたと傳へられたくない——若し先方の耳に入ると殺されるに定つてゐると言ふ以上に詳しい説明をしなかつた。

老人は再び秘密を約束してからかう尋ねた。

「それはさうとして、小僧さん。どうしてお前は彼奴等の跡を跟けるやうになつたのだい？ 奴等が

胡散臭く見えたのかい？」

ハックは相應に用心深い返答を考へ出すまで黙つてゐた。それから彼は言つた。

「それは何ですよ、あなた、私は不幸者なんですよ——兎に角皆がさう言ふし、私もさう思つてゐます——それで身の上を考へたり、どうして出世をしやうかと思つたりして、時々餘り寝られない事

があるんです。昨夜もやつぱりさうでした。私は眠られなかつたんです。そこで夜半に町を彼方此方とぶらぶら歩いて、禁酒旅館の側のあの古い壊れかゝつた煉瓦の倉のところへ来た時、又あの壁に寄り掛つて考へ込んで了ひました。すると恰度その時、あの二人が何か盗んで来たらしいものを小脇に抱へて、こつそりと私の直側へ差し掛つたのです。一人は煙草を喫つてゐてもう一人が火を借りましたから、二人は私の真前で立ち止りました。葉巻の火がバツと光つた時顔が見えて、大きい方は白髯と塵除眼鏡で啞聾のスペイン人と分り、もう一人は襤褸を着た人相の悪い奴だと思ひました。」

「葉巻の火で襤褸まで見えたのかい？」

「この質問にハックは一寸の間面喰つて行き詰まつた。それから彼は言つた。
「さあ、確には分りませんが——どうもさうらしく思へたんです。」

「それから奴等は歩き出して、お前は……」
「さうです、跡を跟けたんです。跟けて行つたんです。どんなことになるのか見たかつたんです——餘り様子が變でしたからねえ——私はドグラス未亡人の屋敷へ入る石段まで跟けて闇の中に立つてゐました。すると襤褸を着た方の奴が未亡人を堪忍してやれと頼み、スペイン人は未亡人の縹緞を臺なしにしてやると私が昨夜あなたと息子さん達に話した通り言つたんです。」

「何！ 啞聾の男がそんなことを言つたのか？」
「ハックは又も大失策をした。彼はスペイン人の素性をこの老紳士に感づかれまいとして百方苦心し

てゐたが、彼の舌は何處迄も彼に禍する積りで見えた。彼は難局を切り抜けようと種々骨を折つたけれども、老人がちつと彼を見据ゑてゐるので、失敗に失敗を重ねた。間もなくウエルス人が言つた。小僧さん。お前は俺を怖つてはいけない。俺は決してお前の爲めにならないやうなことはしない積りだ。さうとも——俺はお前を庇護つてやる——お前の味方になつてやる積りだ。このスペイン人は啞聾ぢやない。お前は識らぬ間にさう口を迂らしてゐる。今更匿さうと思つても駄目だ。お前はこのスペイン人のことで何か他人に知らせたくない秘密を知つてゐるのだ。さあ、俺を信用しなさい——何だかその秘密を俺に言つて御覽——俺は大丈夫だ——決してお前の迷惑になるやうには計らない。」

「ハックは老人の正直さうな眼を暫くの間見詰めた後、その耳許へ口を持つて行つてから囁いた。
「あれはスペイン人ぢやないんです——印度ジョーです。」
ウエルス人は殆んど椅子から跳ね立ちさうになつた。忽ち彼は言つた。

「それで悉皆分つた。耳を斷ち割るの鼻を殺ぎ取るのとお前から聞いた時は、俺はお前が尾鱈をつけてさう言ふのだらうと思つた——白人はそんな復讐の仕方はしないものだからなあ。けれども土人なのか？ 土人なら又全く別問題だ。」

朝御飯の間の談話が續いた。その中に老人は息子達が昨夜あれから寝る前に提灯を點して行つて血の痕があるか否かと石段や其近所を調べて見たと言つた。悪漢共は怪我をしなかつたと見えて血痕は少しもなかつたが、息子達は包を一個そこから拾つて来た。

「何が入つておました？」とハツクの聲は覺えず識らず喧しく筒抜けた。さうして返答を待つて、彼の眼は廣く見張り、彼の呼吸は全く止まつた。ウエルス人はハツとした——同じくポカンと目を見張つた——三秒——五秒——十秒——それから答へた。

「強盗の道具が入つてあつたのさ。けれどもお前は一體どうしたのだい？」

ハツクはこの上なく安心して、靜に深く喘ぎながら、乗り出した體軀を再び椅子に凭らせた。ウエルス人は不思議さうに屹と彼を打目成り——暫くしてから言つた。

「さうさ、強盗の道具さ。さう聞いて大層安心したやうだね。けれどもお前はどうしてあんなに吃驚したのかい？ 何が入つてたと思ふのかい？」

ハツクは進退谷つた——相手の探るやうな眼光が遠慮なく彼の顔に注いだ——彼は何か道理らしい應答の材料を手に入れる爲めには身上有りつたけを差し出して宜いくらゐに思つた——探り求めるやうな眼光は益々深く食ひ入つて来た——ふと頓珍漢な返答が胸に浮んだ——その是非を考へる暇がなかつたので、彼は運を天に委せて思ひついた通りを覺束ない調子で言つた。

「日曜學校の本かしらと思つたんです。」

可哀さうに、ハツクは笑顔も作れない程情氣であつた。しかし老人は大聲を立て、樂しさうに笑ひ出し、クツ／＼と身體中を揺り動かした擧句、こんな大笑は財布の中の金と同じことだ——お蔭で醫者の拂ひが少なくて濟むからと言つた。それから彼はなほ附け加へた。

「小僧さん。可哀さうにお前は顔色が青い。大變弱つてゐる——少し加減が悪いのだ——可笑しなことを口走るのも無理はない。けれども直に癒るよ。ぐつすり寝て御覽。きつと氣分が清々して快くなるよ。」

ハツクはこんな馬鹿な立振舞をして怪まれるくらゐ躍氣になつたと思ふと今更忌々しかつた。彼はドグラス未亡人の屋敷の石段で悪漢共の相談を立聞した刹那、彼等が宿屋から持つて来た包は財寶だといふ推察を棄て、了つた。しかし彼は財寶ではなからうと思つてゐた、けで——確にさうでないとは斷言が出来なかつた——そこで包を拾つたといふ話が出たとき、彼はちつとしてゐられなくらい興奮したのであつた。けれども大體から見て、彼は今しがたの失策ももつたの幸ひだと思つた——何となれば、最早彼はその包が例の包でなかつたことを明白に確めてその結果全く安心出来たのであつた。實際今は萬事が順當に運んでゐるやうに思へた。財寶は未だ二號室に置いてあるに相違ない。奴等は今日掘つて牢へ入れられるのだらう。すれば彼とトムとは即夜何の面倒も聊かの故障の懸念もなくあの金貨を取ることが出来る。

朝御飯が濟んだ時に戸を叩く者があつた。ハツクは最近の事件に微かにでも關係してゐたかないといふ料簡から、隠れる爲めに飛び去つた。ウエルス人はドグラス未亡人を初めとして數名の淑女紳士を請じ入れ、なほ町の人が群つて——このあつた石段を眺めに——山へ登つて行くのを認めた。その位評判が最早廣まつてゐたのであつた。

ウエルス人は昨夜の一部始終を來客に話さなければならなかつた。未亡人は命拾ひをした有りがたさを率直な言葉で述べ始めた。

「奥様。この事に就いては一言も仰有るな。俺や息子によりも尙一層貴女がお禮を仰有らなければならぬ者が他にあるのでございます。けれども残念ながらその者は名を申さないで呉れと固く俺に頼んで居ります。若しその者がなかつたら俺等は全く知らずじまひで、お屋敷邊まで參るところではございませんでしたらう。」

無論この話は當の事件そのものが影薄くなるほどの莫大な好奇心を起した——しかしウエルス人は來訪者一同をその好奇の念の苦めるに委せ、なほ彼等によつてそれが廣く町中へ傳はる儘にして置いた。彼はどうかあつても祕密を打ち明けないのであつた。それ以外の事柄を悉く聞き知つてから未亡人が言つた。

「私は床の中で書見を致しながら寝ついて了つてそんな騒動のあつたことも知らずに朝まで眠り通しました。何故お出になつてお起し下さいませんでしたの？」

「お知らせ申上げるまでのこともあるまいと存じましたので。奴等は最早戻つて來さうもなかつたのです——何しろ道具をそっくり置いて行つて了つたのですから大丈夫と思ひまして、お知らせして怯えさせるのも餘計な事と存じました。宅の黒ん坊が三人とも、あれから夜つびてお屋敷の見張番を致しました。今しがた歸つて參つたばかりです。」

そこへ又來訪者が續々と詰めかけた。老紳士は同じ物語を二三時間繰返しく傳へなければならなかつた。

學校の暑中休暇中は日曜學校がなかつたけれども、皆は早朝から教會へ押し寄せた。物騒な事件は遠近に傳つた。二人の兇漢は未だ一向に手がかりがないといふ評判であつた。説教が濟んで會衆が教會から出始めた時、サッチャー判事の夫人はハーバー夫人の側に摺り寄つてかう言つた。

「宅のベツキイは今日一日寢通す積りなのですか？ 随分疲れたことだらうと私は存じて居りましたか。」

「お宅のベツキイさんでございませうか？」

「え、さうでございませうよ。」と稍案外の面持をして、「ベツキイは昨夜お宅で御厄介になつたのでございませんの？」

「いゝえ。」

サッチャー夫人は青い顔をして座席にグタリと坐つた。恰度その折トムの伯母さんのポリイが友達と忙しげに話し合ひながら通りかゝつた。彼女は二人の姿を見ると、かう言つた。

「おや、奥様方。お早うございます。私は悪戯つ子が何處かへ行つてしまつたので探してあるところでございませう。宅のトムは昨夜お宅へ——お二方の中何方かへ御厄介になつたのでございませう。さうして今日は叱られると思つて教會へ出て參らないのでございませう。私は一つお仕置をしてや

らなければなりません。」

サッチャー夫人は纒かに首を振つて、益々青靄めた。

「坊ちゃん宅へはお泊りでございませぬよ。」とハーバー夫人は心配さうな様子をし始めながら言つた。際立つて不安な色が伯母さんのポリイの顔に現はれた。

「ジョー・ハーバーさん。あなたは今朝宅のトムを見かけませんでしたか？」

「い、え、一向。」

「何處で彼に會ひました——一番最後に？」

ジョーは考へ出さうと努めたが、どうも斷言出来なかつた。皆は教會から出懸けるのを止めてしまつた。囁語がそれからそれへと傳はり、不吉な憂色が一同の顔に浮んだ。子供達と若い教師連中は頻りに問ひ詰められた。彼等は皆昨日の歸途にトムとベツキイが小蒸汽に乗つてゐたか否か氣がつかなくなつたと言つた。最早日が暮れて暗かつたし、人數を調べて見ることは誰も思ひつかなくなつた。しまひに一人の青年が或は二人は未だ洞窟の中に残つてゐるのではなからうかと言ひ出した。サッチャー夫人は卒倒した。伯母さんのポリイは泣いたり手を擦り振つたりして悲んだ。

これは大變といふ言葉が唇から唇へ、群から群へ、往來から往來へ傳はつて、五分間以内に半鐘が喧しく鳴り渡り、町中が活動を始めた。カーヂフ山の殺傷未遂事件は忽ち二の次となり、盜賊の噂は忘れられて、馬は鞍を置き、小舟は人を乗せ、渡しの小蒸氣は熾んに煙を吐き、騒ぎ出してか

ら半時間にならない中に二百人の男が街道と河を洞窟へ向けて下つてゐた。

その長い晝過中町は空明きになつて全く生氣のないやうに見えた。大勢の婦人連中がトムの伯母さんのポリイとサッチャー夫人を訪れて百方慰めた。彼等はなほ二人と一緒に泣いた。さうしてこれが言葉よりも更に効果があつた。倦き／＼する夜もすがら町中は報告を待ち構へてゐたが、漸く明けて日の目が見えた時到着した音信は唯一もつと蠟燭と食物を送れ——といふに過ぎなかつた。サッチャー夫人は殆んど狂氣した。伯母さんのポリイも同様であつた。サッチャー判事は巖窟の中から希望と激勵の傳言を發したが、それには何等ほんたうの元氣が罩つてゐなかつた。

老齡のウエルス人は蠟燭の油に汚れ、粘土に塗れ、疲れ果て、曉方に家へ歸つて來た。ハックは老人が彼の爲めに設けた寢床に未だ寝てゐたばかりか、熱に浮かされて夢我夢中の態であつた。醫者は皆洞窟へ出懸けてゐたから、ドグラス未亡人が來てこの病人の介抱を引き受けた。彼女はこの少年が善い子だらうが、悪い子だらうが、又は善くも悪くもない子だらうが、それには頓着なく、やつぱり神さまのものであつて見れば仇おろそかにして置けないから、及ぶ限り彼に盡したいと言つた。ウエルス人はハックにはなかく善いところがあると言つた。すると未亡人は、

「そこが實際神さまのお手の跡でございますよ。神さまは必ずお手跡をつけて置きなさいませぬ。決してお忘れになりませぬ。お手の業になるもの一々の何處かへそれをおつけなさいませぬ。」朝の時刻の進むにつれて疲れ切つた人達の群が三々五々町へ跋を引きながら戻り始めたが、根氣の

好い連中はなほも巖窟内に踏み止つて残る限ないまでと搜索を續けた。種々の報告が達した。普通見物人の歩き廻るところから遙か奥の岩壁に蠟燭の油煙で書いた「トムとベツキイ」といふ文字が見つかり、その手近で汚れたリボンが拾ひ上げられた。サツチャー夫人はその品を受取ると直ぐに娘のものと認め、これが一番最後まで身につけてゐた形見かと抱き締めて悲歎の涙に暮れた。

二日三晩が待ちもどかしい不安の裡に過ぎて、町は火の消えたやうであつた。誰も何をしようといふ元氣がなかつた。禁酒旅館の亭主が店に酒を匿して置いたといふ偶然の發覺も、常なら一評判になるところだが、殆んど一般の耳目を惹かずに済んで了つた。ハックは氣分の輕くなつた合間に、それとなく話題をこの町の宿屋の方へ持つて行つて、竟に——怪まれはしまいかと恐る／＼自分が病氣になつてから、禁酒旅館で何か見つかつた品物があるといふやうな噂はないかと尋ねた。

「さういふ評判がありますよ。」と未亡人が答へた。

ハックは目を見張つて床の上に起き直つた。

「何です？ 何が見つかつたんです？」

「お酒ですよ！——その爲めあの宿屋は商賣を差し止められました。さあ、お寝なさい——突然起き直つて大きな聲を出したり！ 私は吃驚しましたよ！」

「たつた一つお尋ねしたい事があるんですよ、たつた一つ。それを見つけて出したのはトム・ソウヤーですか？」

ト—エン 十四折五十嵐

未亡人は涙を零した。「お黙りなさい、ねえ、お黙りなさい！ 先刻も申した通りお前さんは口を利いてはいけません。未だ／＼餘程悪いのですからね。」

それでは酒の外は何も見つからなかつたのだ——若し金貨だつたら大評判になつてゐるのだらうかと彼は思った。して見ると彼の財寶は永久になくなつてしまつたのか——最早永久に此方の手へは入らないのか！ しかし未亡人は一體何で泣くのだらう？ 泣くとはどうも變だ。

この種の考慮がハックの胸中を騰るに往來して、甚く身體を疲らせたので、彼はうと／＼と寝ついた。未亡人は獨りごとを言つた。

「さあ——好い鹽梅に寝てしまつた。トム・ソウヤーが見つけたかつて！ 此方はトム・ソウヤーが見つからないので困つてゐるところです。噫、可哀さうに！ 最早かうなつてはこの上捜し續ける根のある者が餘り残つてゐないのですからねえ。」

三十二、地底の暗

さてトムとベツキイは洞窟の中の奇觀に心を奪はれて覺えず時刻を移し、周圍の淋しさが身に沁みて仲間と一緒になりたいたいと思ひ出した頃には清水のムク／＼と湧く岩間の泉を見つたり、夥しい數の蝙蝠に追はれて蠟燭の火を奪はれさうになつたり、地底の湖の畔を辿つたりして、既に全く深い入りをしてゐた。

「おや、私、気がつかかなかつたけれど、皆の聲が聞えなくなつてから最早大分になつたやうよ。」
とベツキイが言つた。

「ベツキイさん。僕は皆のある下の方をずつと歩いて來たんだよ——どれくらゐ西へ來たんだか東へ來たんだか、ちつとも見當が分らない。」

ベツキイは不安心になつた。

「トムさん。この下の方へ降りて來てから餘程たつてゐてよ。最早歸る方が宜いわ。」

「その方が宜い。そろそろ歸らう。」

「あなた道が分つて？ 私には込み入つてゐてこの中はちつとも方角が分らないのよ。」

「大抵分る積りだけれども——あの蝙蝠がねえ。若し彼奴等に二人とも蠟燭を消されてしまはうものなら、それこそ大變だよ。彼處を通らないやうに他の道を捜して見よう。」

「え、さうしませう。けれどもだん／＼奥の方へ迷ひ込まないやうにしたいものねえ。私、考へると恐しいわ！」

彼等は一廻廊を辿り始め、若しや見覺えのあるところではないかと思つて、岩壁の割れ目が細路を分岐する毎に眼を配りながら長いこと無言の儘に進んだが、何處も皆初めての路であつた。トムが立ち止まつて檢める度にベツキイは必ず勵ますやうな目付をして彼の顔を見守つた。すると彼は元氣よくかう言ふのであつた。

「大丈夫だよ。この路はさうぢやないけれど、もう直に見つかるよ。」

しかし彼は失敗を重ねる度毎に自信が薄らいで、早く探してゐる道に出たいと焦る餘りに、間もなく無暗に横路へ入り込み始めた。口先ではやはり「大丈夫だ」と言ふもの、彼の胸はしつくり重い懸念に壓しつけられて、言葉が自ら力を失ひ「駄目だ！」と言つたと同じやうに響いた。ベツキイは怖ぢ恐れて彼に寄り添ひ、泣くまいと頻りに我慢したけれど、涙は言ふことを聞かずに止度もなく流れた。竟に彼女は言つた。

「トムさん。蝙蝠があつても構はないわ。あの道を歸りませうよ。捜してゐればあるほどいけなくなるやうだよ。」

トムは立ち止まつた。

「黙つて聞いてゐて御覽。そら！」と彼が言つた。

四邊は森閑としてゐた。黙つて耳を澄ましてゐると、二人の呼吸が手に取るやうに聞えるくらゐ静かであつた。トムは叫んだ。その聲が空虚の路に傳つて響き渡り、何者かのせゝら笑ふに似た微かな音になつて遠く消え去つた。

「最早およしなさいよ、トムさん。お、怖かつた！」とベツキイが言つた。

「怖いけれど、やつぱり呼んで見る方が宜い。皆に聞えるかも知れないからね。」と言つた。トムは再び叫んだ。

「聞えるかも知れない。」といふ言葉は氣味の悪い笑聲よりも尙恐るべき物であつた。それは絶望の告白であつた。子供達はちつと立つて耳を敏くした。然し何等の結果もなかつた。トムは直様戻り道の方へ向つて早足に歩き出した。暫くして彼の何となく不決断な様子がベツキイに又一つ恐しい事實を覺らせた——トムは蝙蝠があるからと言つて見合せたあの戻り道を見つけて出せないのであつた。

「トムさん、あなた何か道へ目印をつけて來なかつたの？」

「ベツキイさん。僕は何かといふ馬鹿だらう！ほんとうに馬鹿だ！歸途のことはちつとも考へなかつた！」

「駄目だ——道が見つかからない。すつかりこんがらがつてしまつた。」

「あゝ、トムさん、トムさん。私達は迷つてしまつたんだ！迷つてしまつたんだわ！私達はこの怖いところから最早出られないんだわ！あゝ、何故まあ皆に別れたんでせうねえ！」

彼女は地面に竦んで、ワーツと泣き出した。トムは彼女がその儘死ぬか氣が違ふかと思つてギョツとしたくらゐであつた。彼は彼女の側に坐つた。彼女は彼の胸に顔を埋めて彼に縋りついた。彼女はこの地底に迷ひ迷つて死ぬ恐ろしさと今更返らぬ後悔の繰言を早口に述べ立てた。すると遠い聲がそれを悉く例の嘲るやうな笑聲に變へた。トムはもう一遍勇氣を出すやうにと頼んだが、彼女は駄目だと言つた。彼は彼女をこんな危地に陥れて實に濟まないと自分を責めた。これが好い影響をおこした。彼女は彼がこの上そんな話さへしなければもう一度希望を起すやうに努めて、何處へなりと導くまゝに跟いて行くと言つた。何故かといふと、かういふことになつたのはトムばかり悪いのでなく、

彼女自らも同じやうに輕率だつたからと付け加へた。

そこで彼等は再び動き出した——目的なく——全く足任せに——彼等のやれる總てのことは動くこと、唯動き続けることであつた。間もなくトムはベツキイの蠟燭を取つて吹き消した。この儉約は意味深遠であつた。それを言葉で説明する必要はなかつた。ベツキイは事情を會得して、再び希望を失つた。彼女はトムのポケットに蠟燭が丸一本と三四片あるのを承知してゐた——それでも彼はなほ儉約しなればならないとは！

その中に疲勞がひし／＼と身にこたへ始めた。子供達はそれに構ふまいと努めた。何となれば時間がかう貴重になつて來た折から腰を下して休むことは考へても恐ろしかった。どの方角へなりと兎にも角にも動いてゐれば、それは少くとも進歩であつて、或は實を結ぶかも知れない。しかしながら坐つてしまふのは死を招いでその追手の足を早める業であつた。

竟にベツキイの弱い脚は最早一步も前へ出なくなつた。彼女はガクリと坐つてしまつた。トムは彼女と一緒に休み、彼等は家と友達と居心の好い寢床と就中燈火のことを語り合つた。ベツキイは泣いた。トムはどうかして彼女を慰めたいものと思つたが、彼の引き立て言葉は使ひ古しになつて皮肉のやうに聞えた。ベツキイは疲勞に堪へ兼ねてうと／＼と居眠りを始めた。トムは有りがたいと思つた。彼は彼女の引き吊つたやうな顔をちつと見詰めて坐つてゐたが、それが楽しい夢のお蔭が緩かに寛いだ表情に戻るのを認めた。間もなく微笑さへそこに浮んだ。

「おや、私、寝たの？ あ、私、目が覚めないと宜かつたわ！ い、え、嘘よ、トムさん。嘘よ！
何故そんなに顔を見てゐるの？ よして頂戴、もうこんなことは言はないから。」とベツキイは暫く
してから目を開いた。

「ベツキイさん。寝てよかつたね。草臥れが直つたらう。僕等は又道を捜しにかゝらなければりやなら
ない。」

「捜しませう、トムさん。けれども私、大變綺麗などころの夢を見てよ。天國でせうかね！ 二人と
も間もなく彼處へ行くのかも知れないと私思つてよ。」

「まさか。そんなことを言はないで、ベツキイさん、元氣を出してお呉れ。さあ、出懸けよう。」
彼等は立ち上つて手に手を取りトボくと歩き始めた。彼等は洞窟に入つてからの時間を推し測つ
て見たが、何日か何週かのやうに思へるばかりであつた。而も蠟燭が未だ盡きないところを見ると、
そんな筈のないことは明白であつた。それから餘程たつてから——どれくらゐたつたか彼等には分ら
なかつたが——トムは清水の滴る音を探し當てるのだから窺つと歩かなければならぬ——湧水を見つ
けなければならぬと言つた。彼等は間もなくとある泉に辿り着いて、トムはこゝで又休まうと言つ
た。二人とも甚く疲れてゐた。しかしベツキイはもう少し先まで行つたらどうだらうと言つた。彼女
はトムがそれに不同意をしたのに驚いた。彼女にはその意味が分らなかつた。彼等は坐つた。トムは
粘土を掬ひ上げて彼等の正面の岩壁に蠟燭を固く立てた。ちつと靜まると種々なことが胸に湧き上つ

て来て、二人は暫くの間無言の儘であつた。それからベツキイが沈黙を破つた。

「トムさん。私、お腹が空いて仕方がないわ！」

トムはポケットから紙包を取り出して、

「お晝のがこれだけ残つてゐるよ。これだけしかないんだ。樽位も大きいと宜いんだけれどねえ。」
と言ひながら、菓子を二つに割つた。ベツキイはうまさうに喰べた。トムは鼠のやうに自分の分前を
ちびく／＼嚙つた。御馳走の後で飲む冷水はそこに澤山あつた。間もなくベツキイは又出懸けようと言
つた。トムは一寸の間黙つてゐた。それから彼は言つた。

「ベツキイさん。僕はあなたに言ふことがあるけれども。あなたは泣かずに聞いてゐられる？」

ベツキイの顔は青褪めた。しかし彼女は我慢出来さうに思ふと答へた。

「さう、それならベツキイさん。僕等はこの飲水のあるところに待つてゐなければならぬだよ、
蠟燭はあの小さい断片でもう最後なんだよ！」

ベツキイは涙を流し、泣聲を揚げた。トムは及ぶかぎり彼女を慰め賺したけれど殆んど效がなかつ
た。竟に彼女は言つた。

「トムさん！」

「何だい、ベツキイさん？」

「皆は私達のゐないのに氣がついて探しに來ますよ！」

「さうとも、探しに来るよ！ きつと探しに来るよ！」

「今頃は最早探してゐるかも知れなくてねえ、トムさん。」

「多分最早探してゐるんだらうよ。さうだと宜いがねえ。」

「トムさん。皆は何時私達のゐないのに氣がつくのでせうねえ？」

「それは皆が小蒸氣へ戻りつく時だらうさ。」

「トムさん。その時分には最早暗くなつてゐるわ——それで皆は私達のゐないのに氣がつかないかも知れないわ。」

「さあねえ。けれどもとにかく皆が家へ歸れば、あなたのお母さんはあなたが歸らないので心配をはじめめる。」

ベツキイの顔に現はれた驚愕の色がトムに迷ひの目を覺めさせた。彼は忽ち自分の算當の手ぬかりを認めた。遠足會の晩はベツキイは家へ歸らない筈になつてゐたのだ！ 二人は黙つて考へ込んだ。次いでベツキイが又泣き出したので、トムは自分の思ひ當つたことに彼女も氣がついてゐると覺つた——それはベツキイがハーバー夫人の家へ泊らなかつたことをサツチャー夫人が知るまでには日曜の朝の時刻が餘程移るだらうといふ懸念であつた。

子供達は彼等の蠟燭の斷片に眼を注ぎ、それがじり／＼と容赦なく溶け去るのを見守つた。たうとう蠟が盡きて一寸に近い芯ばかりが立つてゐるのを見た。弱くなつた焰が伸びたり縮んだりして後、

薄煙の柱に攀ぢ上つて、一寸の間その頂點に明滅するのを見た。それから——眞の闇の恐しさが到るところを罩め切つた。

ベツキイはトムが縋りついて泣いてゐたが、それと氣のついた時にはどのくらゐたつてゐたか二人とも一向に辨へなかつた。彼等は何時間とでも思へるくらゐの長い後に一種の昏睡から覺めて彼等の不運を再び歎き始めたことだけを承知してゐた。トムは最早日曜たらう——或は月曜かも知れないと言つた。彼はベツキイに話をさせようと苦心したが、彼女の悲痛はそれどころでなく、彼女の希望は悉く消えてしまつてゐた。トムは自分達の居ないことが分つてから最早大分になつてゐるに相違ないから、搜索が既に始まつてゐるのだと言つた。叫んで見よう、多分誰か聞きつけて来るだらう。彼は叫聲を發した。しかし眞暗闇の中から遠い笥の答へる物凄さと言つたら！ 彼は二度と叫ばうとはしなかつた。

何時間も過ぎ去つた。子供達は再び餓じさに責められた。トムは先刻折半した菓子を儉約して食ひ残して置いた。彼等はそれを分けて喰べた。しかし空腹は益々募つて来るやうに思はれた。一片の食物は却つて食欲を刺戟したに過ぎなかつた。

間もなくトムが言つた。

「靜に！ 何か聞えるだらう？」

二人は息を殺して耳を傾けた。遠い微かな叫聲のやうな音が傳つて來た。直様トムはそれに呼應し

ベツキイの手を取つてその方角へ廻廊を辿り始めた。暫くして彼は再び耳を澄ました。再び音が聞えた。前よりも少し近くなつたやうに思つた。

「搜索隊だ。」とトムが言つた。「たうとうやつて来た！ さあ、お出で、ベツキイさん——最早大丈夫だ！——」

子供の歡喜は譬へるに物がなかつた。しかし足許には間々穴があるので用心しなければならなかつたから、彼等の歩調は遅々たるものであつた。程なく彼等はその一つに來合せて進むことが出來なかつた。深さは三尺あるかも知れず、或は百尺かも知れず——兎に角それを越す術は一切なかつた。トムは腹這ひになつて、屈く限り足を下して見た。底がなかつた。彼等は搜索隊の來る迄そこに待つてゐる外はなかつた。彼等は傾聽した。明白に遠方の叫聲は益々遠くなつてゐた！ 一二分の後には全く消え失せてしまつた！ その刹那の心細さ！ トムは聲の囁れる迄呼び叫んだが、何の效能もなかつた。彼はベツキイにはまだ望があるやうに話したが、待てど暮せど聲音は再び聞えなかつた。

子供達は泉のところへ手探りをして戻つた。倦き／＼する時間が引き續いた。彼等は又眠つた。さうして餓ゑ悲みながら目を覺ました。トムは最早火曜日になつたに相違ないと信じた。

今や彼は一工夫思ひついた。近邊には横路が幾つもあった。唯手を拱いて退屈を辛抱してゐるよりこの路の中のどれかを探索して見る方が宜からうと思つた。そこで彼はポケットから風絲を出して岩角に結びつけ、ベツキイと連れ立つて絲を繰り出しながら進み始めた。廻廊は二十歩行くと足許が斷

崖に終つてゐた。トムは跪いて下の方を探り、それから足場のある限り横の方へ手を伸して見た。彼がもう一伸び右側を究めようとして跪いてゐると、三間はかり彼方の岩石の後から蠟燭を持った人間の手だけが現はれた。トムは大聲を揚げて叫んだ。同時に手に續いて身體が見えた——印度ジョーの身體が！ トムは腰が抜けた。彼は動けなかつた。次の瞬間に「スペイン人」が走り出して姿を匿したと見ると、彼は安心の胸を擦り下した。トムはジョーが彼の聲を聞き分けて、裁判の復讐に彼を殺しに來はしまいかと思つたけれども、餌の爲めに彼の聲は正の儘では通らなかつたに相違ない。確にさうらしいと彼は理窟をつけた。トムの驚愕は痛く彼の體軀にこたへた。彼は泉まで戻る氣力があるならば彼處に落ちついてどんなことがあつても再び印度ジョーに出會すやうな危険は冒すまいと肚の中で言つた。彼は現に目撃した事柄をベツキイには匿した。彼は今のは唯運の向いて來るお呪禁に呼んで見たのだと言つた。

併し飢餓と悲痛とは結局恐怖よりも優勢を占めるものである。泉の畔で又長らく待ちまた長らく眠つた後に變化が起つて來た。子供達は胃袋に食ひ入るやうな餓じさに苦められて目を覺ました。トムは最早水曜日か木曜日或は金曜日か土曜日に相違なく、搜索は既に打ち切りになつたと信じた。彼は又他の路を探つて見ようと發起した。彼は今や印度ジョーでも何でも來いといふ氣になつた。しかしベツキイは弱り果てゝゐた。彼女は最早どうでも構はぬといふ無神經になつてしまつて、勸めても動かうとしなかつた。彼女は今のところで待つてゐて、この儘死にたい——長いことはないのだからと

言つた。彼女はトムに若し道を探しに行きたいならば必ず風絲を持って出懸けるやうにと念を押し、尙時々戻つて来て口を利いて呉れと頼み、
「いよいよ死ぬ間際になつたら、すつかり濟んでしまふまでは側にゐて手を握つてゐて下さいよ！
宜いの？ 分つて？」と約束を求めた。
トムはワツと泣き出した。

三十三、青天白日

火曜日くわいびの晝ひるが過ぎて夕闇ゆふぐらみになつた。聖ペテロ町セントペテロまちは依然として歎き悲しんでゐた。行方不明になつた子供達は未だ見つからなかつた。彼等の爲めに一般の祈禱會いのちのつどひが催され、なほ全心を罩めた幾多個人の祈禱が夫々の家庭で捧げられた。しかし洞窟からは何等の吉報も來なかつた。搜索者の大部分はあの子供達は到底見つかつこないと言つて、手を引いて日常の仕事に戻つた。サツチャー夫人は悉皆弱つてしまつて、殆んど絶え間なく讒言を言ひ通した。トムの伯母さんはちつと鬱ぎ込んだきり、碌碌人と口も利かず、胡麻鹽頭ごましほねが大方眞白ましろになつてしまつた。町一般は火曜日くわいびの晩諦めた陰氣な心持で眠りに就いた。

夜半よなかに町中の半鐘はんしやうが一齊せいに物々しく鳴り渡り、忽ちにして寢卷ねまきのまゝの人達が往來に群つた。彼等は狂氣のやうになつて「起きろ！ 起きろ！ 子供達が見つかつたぞ！」と叫んだ。この騒動の上につた。
町中まちぢゆうが燈火とうかに輝き返つた。最早再び床に入る者はなかつた。この一夜はその小都會せうとが始まつて以來の賑かなお祭り騒ぎであつた。行列がサツチャー判事の家へ着くと差當り一時間ばかりは人々が引きも切らず詰め寄せて、助かつて來た子供達を捉へて接吻し、サツチャー夫人の手を握つてお祝ひを言はうとしたが情が迫つて口が利けず——夥か涙を零して退出した。

トムの伯母さんのポリイは満足この上はなかつた。サツチャー夫人は未だ洞窟の中で人を指揮してある良人にこの吉報を傳へる爲めに取り急いで使の者を立たせた。トムは長椅子に坐つて熱心な聽手に取り圍まれ、はら／＼させるやうな事實を數々間に挿みながら不思議にも一命を全うした一部始終を物語つた。それによると彼はベッキイを寢かして置いて、風絲の届く限り二筋の路を探り、次いで三筋目のを絲の長さだけ進んでから戻らうとする途端に、遙か彼方に一點の日光のやうなものを認めた。彼は絲を手放してその方角へ這ひ寄り、頭と肩を小さな穴へ突つ込むと、廣いミシシッピ河が目の前に流れてゐた。若しこれが夜分であつたらば彼は日光を認めず、隨つてその上この路を究めなうでしまつたらうに、實に仕合せなことであつた。彼は這ひ戻つて行つてこの吉報をベッキイに傳へたが、彼女は勞れ切つてゐるし、最早死にさうだし、それに死にたいと思つてゐるのだから、そんな

嘘を言つて胸を騒がせて呉れるなど答へた。彼は頻りに説明して彼女を納得させた。彼女は手を引かれて暗の中を進み黄色い日光の見えるところへ着いた時には喜び餘つて狂氣しさうであつた。彼は先づ穴から這ひ抜けて彼女を扶け出した。二人は暫くそこに坐つて嬉し涙に暮れた。折から数名の男が小舟に乗つて通りかゝつた。トムは彼等と呼んで實情を語り、尋常ならぬ空腹を訴へた。彼等は最初の間はこの滅法界もない話を容易に信ぜず、「まさか。こゝは洞窟のある村からは五哩川下になつてゐるからなあ。」と言つた。それから彼等は二人を舟に乗せて手近の家に漕ぎ寄せ、夕御飯を當てがひ、日が暮れてから三時間になるまでグツスリ寝かせて後、町へ連れ戻して呉れた。

夜明前にサツチャー判事と小人數の搜索隊の許へ吉報が達した。彼等は未だ腰に綱をつけて洞窟の中を深く探り歩いてゐた。

洞窟中の苦悶と飢餓の三日三晩は、トムとベツキイが間もなく覺つた通り、直様振り棄てることの出来るものでなかつた。彼等は水曜日と木曜日を床の中に暮らし、その間益々疲労が出て来るやうに思つた。トムは木曜日に一寸起き、金曜日に町を出歩き、土曜日には殆んど恢復した。しかしベツキイは日曜日までは外へ出られなかつた。さうしてその折でも未だ大病後のやうに面糞れがしてゐた。

トムは、ハツクの病氣を聞き知つて、金曜日に見舞ひに行つたが、寢室へは入れて貰へなかつた。土曜日と日曜日もさうであつた。その次の日からは彼は毎日面會を許されたが、彼の最近の冒険は話さぬやう又興奮させるやうな問題は一切避けるやうにと戒められた。ドグラス未亡人はトムがこの注

文を守るやうに絶えず同席してゐた。トムは家でカアヂフ山の事件を耳にした。尙「襤褸を着た男」の死骸が、渡場の近所に浮き上つたことも聞いた。彼は恐らく逃げる積りで河を越す中に溺れたのだらう。

トムが洞窟を遁れ出た日から二週間ばかりすると、ハツクは最早氣の立つやうな話を聞けるくらいに元氣が出て來た。そこでトムは彼を訪ねに出懸けた。彼は確にハツクを飛び立たせるやうな大問題があると思つてゐた。サツチャー判事の家はトムの通り路にあつた。彼はベツキイに會ひに立ち寄つた。判事と二三の知人等がトムを引き留めて話を始め、その中の一人がもう一遍洞窟へ入つて見る氣はないかと彼にからかつた。トムは敢て辭さないと言へた。すると判事が言つた。

「トムさん。お前のやうな向う見ずが確に未だ大勢あるよ。けれども俺等はさういふ連中の爲めを計つて手筈をして置いた。最早これからはあの洞窟の中で行方不明になるものは一人もあるまいよ。」

「何故ですか？」
「何故つて俺は二週間前にあの大きな戸を鐵張りにして頑丈な錠前を三個かけさせた——さうして錠は皆俺が保管してゐる。」

トムは忽ち眞青になつて、倒れかゝつた。

「どうした、トムさん！ これ！ どうした？ 誰か行つて水を持って來てお呉れ。早く！」
水が來て、トムは顔一杯に浴せられた。

「さあ、最早大丈夫だ。トムさん。お前は一體どうしたの？」
「い、え、あなた、印度ジョーが洞窟の中にあるんですよ！」

三十四、印度ジョーの最後

數分の中に評判が廣がつて、十何艘といふ小舟が人を満載してマクドウガルの巖窟に向ひ、これも人で一杯の小蒸気が間もなくその後を追つた。トムはサッチャー判事の乗つてゐた小舟に投じた。洞窟の戸を明けて見ると、その場の薄暗黒の中に悲惨な光景が現れた。印度ジョーは地面に身を伸ばして死んでゐた。彼は最期まで外の世界の光明と陽氣に憧れたらしく、顔を戸の隙間に覗くやうに摺り寄せてゐた。トムは自分の經驗からこの悪漢がどんなに苦しかつたらうと察して痛く心を動かした。彼は惻隱の情を催したが、同時に多大の安心を感じ、法廷でこの兇漢の爲めにならぬ證言をして以來常に壓へられてゐた胸の忽ちにして軽くなるを覺えた。

印度ジョーの大庖丁が手近に棄て、あつた。その刃は二つに折れてゐた。戸の頑丈な底木は根氣好く削り殺いであつた。しかしこれは徒勞の業だつた。何となればその外側には天然の岩石が敷居を爲してゐて、それには刃物が立たず、却つて刃物の方が折れたのであつた。また若し岩石の妨害物が假りになかつたとしても、この努力はやはり無効であつた。何故かといふに底木は全く削り切つても、印度ジョーは戸の下から抜け出すことの叶ふ筈なく、本人自らもそれは辨へてゐた。して見ると彼は

單に何かしてゐる爲めに——何かして退屈を凌ぐ爲めに——ちつとして居た、まれない爲めにそこを削つてゐたのであつた。その邊には見物人が使ひ残りの蠟燭を棄て、歸るから、平常は必ず何本も落ち散つてゐるのだが、それが今は影さへ見えなかつた。印度ジョーがそれを探して喰べてしまつた。彼は尙大骨を折つて蝙蝠を捕へ、之も喰べた證據には何疋分かの爪ばかりが残つてゐた。可哀さうに彼は餓死したのであつた。すぐ近くの所に、天井から下つてゐる鐘乳石を傳はつて落ちる水滴の爲に、地面から何代となく昔から一つの石箱が成長してゐた。囚人はこの石箱を毀してその跡へ浅い穴を抉抜いた石を置き、時計の音のやうな單調な規則正しきで二十分に一雫落ちて來る貴重な水を溜めて飲料としてゐたのだつた。この水滴はピラミットが未だ新しく、トロイが陥落した時代にも、ローマの基礎が成り、基督が十字架に就いた時代にも、コロンブスの航海した時も、レキシントンの虐殺當時も落ちつゝあつたのだ。そして今も落ちてゐる。尙これ等の事件が歴史の夕暮と傳説の黄昏の中に沈み、忘却の暗黒に呑み込まれて了ふ未來に至つても落ち続けるだらう。如何なる物も目的と使命とを持つてゐるのだらうか？ この水滴はこの蟲けらの如き人間の必要に備へる爲に五千年も辛抱強く落ち続けて來たのだらうか？ また何か今一つ重大な目的があつて今後一萬年落ち続けるのだらうか？ それはどうでも構はない。運の盡きた合の子が貴重な水を溜める爲に石をくり抜いたのは最早何年も前のことであるが、今日に至るまで、マクドウガルの洞窟の奇觀を見物に來る旅行客は、この心を動かさずには置かない石と氣永に落ちる水滴とに一番長く眼を止める。「印度ジョーの茶碗」と

言へば洞窟第一の見物で、これには「アラディンの宮殿」と呼ばれる奇観も及ばなくなつてゐる。印度ジョーの死骸は翌日洞窟の入口の近くに埋められた。人々は町からも近在からも舟や車に乗つてそこへ寄り集つた。彼等は子供を連れたり辨當を携へたりしてゐた。さうしてこの埋葬によつて死刑の執行を見物したと同様の満足を感じたと言つた。何となればこの兇漢は醫師ロビンソン以外に町の人を四名までも殺してゐたのであつた。

この葬式は一つのことの發展を止めてしまつた。それは州長官に對する印度ジョーの赦免の歎願運動であつた。その歎願はかなり多方面から賛同の署名を受けてゐた。多くの熱烈な演説會が開かれ、また一團の愚かな婦人が委員に選ばれ、州長官を訪ねて彼の義務を無視してこの馬鹿げた慈悲を下すやうに泣きつく筈になつてゐた。印度ジョーはこの町の住民を五人まで殺害したと信ぜられてゐた。しかしそれが何だ？ 若し彼が悪魔自身だつたとしても、多くの人々が歎願書に署名をし、その上に始終故障だらけの水道工事のやうな眼からした、か涙を流したに違ひなからう。

この埋葬の翌朝トムは大切な相談をする爲めに人のゐないところへハックを誘つて行つた。ハックはウエルス人とドグラス未亡人の口からトムの先頃の危難を既に逐一承知してゐた。しかしトムは彼等が話さなかつたことが一つある筈、その件に就いて唯今談合したいと言つた。するとハックは悲しげな顔をした。彼は言つた。

「そのことなら分つてゐるよ。お前はあの二號室へ入り込んだが、ウイスキイの外は何にも見つからなかつたんだらう。お前だつてことは誰も言はなかつたけれども、乃公はウイスキイ事件の評判を聞くと感じた。乃公はお前が失敗したことも察しがついた——金を見つけ出したら何とかして乃公のところへ知らせて来るだらうにと思つたからな。トム。あの實はとても乃公達の手に入らない約束事だぜ。」

「おい、ハック。乃公はあの宿屋へは手をつけなかつたぜ。土曜日に乃公達が遠足に出懸ける時までは何のこともなかつたぢやないか？ あの晩はお前が見張をする番だつたのを忘れたのかい？」

「さう、忘れやしない、思ひ出すと一昔のやうな氣がする。乃公が印度ジョーを未亡人の家へ連れて行つた晩だつたよ。」

「お前が跟けたのかい？」

「さうだ——けれども黙つてゐて呉れ。印度ジョーの仲間が未だ残つてゐるに相違ない。其奴等に覺られて附き纏はれるのはブル／＼ものだ。若し乃公がゐなかつたら、奴は今頃は無事にテキサスへ逃げてゐらあ。」

それからハックは自分の冒險を全部トムに打ち明けた。トムはその一部分をウエルス人から聞いてゐたに過ぎなかつた。

「ところで、」とハックは間もなく本題に戻つて、「誰にしる二號室でウイスキイを没収した者があの金まで没収したんだ——兎に角最早乃公達の手に入らない。」

「ハック。あの金はもとく、あの二號室には置いてなかつたんだよ。」
「何？」とハックは相手の顔を鋭く見つめて「トム。お前はあの金の行方を又嗅ぎ出したのかい？」
「ハック。あの金は洞窟の中にあるんだ！」
ハックの眼は輝いた。

「何だつて、トム？」

「金は洞窟の中にある！」

「トム。おい、冗談かい、本氣かい？」

「本氣だよ、ハック——真劍だよ。一緒に行って擔ぎ出す手傳ひをして呉れないか？」

「宜いとも！ けれども入つたきり出られないやうなところぢや困るが……」

「ハック。そんな心配はちつともしなくて取れるんだよ。」

「それならお安い御用だ！ けれどもお前は どうして金の所在が……」

「その話は先方へ着くまで待つが宜い。若し見つからなかつたら、乃公はあの太鼓でも何でも持つてゐるものを皆お前にやる。きつとやる。」

「結構だ。さうして何時出懸ける？」

「お前さへ都合が好ければ今直ぐ出懸けよう。身體の具合は大丈夫かい？」

「洞窟まで餘程遠いのかい？ 乃公は起きてから最早三日四日になるが、一哩以上は未だ歩けない

——行つて見なけりや分らないけれど、どうもむづかしいやうだ。」

「普通なら五哩ばかりあるけれど、乃公の外は誰も知らない近路があるんだ。ハック。乃公は舟で先方まで連れて行つてやる。乃公が舟を流して行つて、歸途には乃公が又漕いで来る。お前は掌一つひつくりかへさなくても宜い。」

「トム。それぢや直ぐ出懸けよう。」

「宜し。乃公達はバンと肉が要る。袋が一つ二つと麻糸と、それからこの頃出來たあの燐寸といふ奴が要るぜ。乃公は洞窟の中にゐた時、燐寸があれば宜いにと幾度思つたか知れやしない。」

正午一寸過ぎに子供は持主の見えぬ小舟を借用して直様出發した。洞窟の入口の凹地から數哩下流へ來た時にトムが言つた。

「どうだい。あの洞口の凹地から此方は崖が何處を見ても同じやうな態をしてゐるだらう——樵夫小屋一つなくて、叢林ばかり續いてゐるんだもの。けれども彼方の高みに地じりがして一寸禿げたところが見えるだらう。彼が乃公の眼印だ。さあ、こゝで陸へ上るんだ。」

彼等は岸へ飛び上つて小舟を繋いだ。

「おい、ハック。今おれ達が立つて居る所から僕が抜け出した穴に手が届く位なんだが、君には見つかるかどうか探して見給へ。」

ハックはそこ等を探し廻つたが見つからなかつた。トムは得意で茂つた叢の中へ歩いて行つて言

つた。

「ほらこゝだ！ 見ろ、ハック。こんな氣持の好い穴は世界中にないぜ。しかしこれは秘密にして置けよ。僕は山賊になりたいと思ひ立つてから始終かういふ所を骨折つて探してゐたんだが、それも手に入れた。誰にもこのことは教へないことにしよう——しかしジョー・ハーバーとベン・ロージャースだけは別だ。さうしないと山賊隊の人数が揃はない。トム・ソウヤー一味——好い名ぢやないか、ハック？」

「うん、全く好い名だ。そこで誰の物を盗むんだい？」

「誰だつて構はない。待伏せをするのが普通の遣り方だ。」

「それで殺してしまふのか？」

「いや——必ず殺す譯ぢやない。身代金を寄越すまで牢屋にぶち込んで置く。」

「身代金で何だい？」

「金さ。捕へた奴を人質にして、其奴の味方から取れるだけ取り上げるんだ。若し一年経つても、金が来なかつたら其奴を殺してしまふ。しかし山賊は女は殺さない。その女は皆綺麗で金持で大變おびえるんだ。女の時計や品物は取つても宜いが、何時も帽子を脱いで話をしなくちやいけない。山賊位禮儀の正しい者はない——どの本にも書いてある。そのうちに女は山賊が好きになつて来て一週間も洞窟の中にあるれば泣くのを止めて、それから後は歸れと言つても歸らない。追出しても直引返して來

る。それも本に書いてある。」

「そりや素敵だ、トム。海賊よりも好い。」

「うん、色んな好い所がある。家や曲馬や何かに近いからね。」

トムはハックを従へて崖の叢林蔭の小穴から又してもマクドウガルの洞窟へ這ひ込んだ。今度は勝手が知れてゐるから彼等は間もなく例の泉の畔に辿り着いた。トムは思ひ起すと身體中の震へるのを禁じ得なかつた。彼は粘土で岩壁に植ゑてある蠟燭の燃え残りをハックに指し示して、彼とベツキイがその焰の消え去る様を打目成つてゐた心細い有様を物語つた。

その場の寂寞と暗黒に胸を壓へつけられた子供達は今は囁聲で話し始めた。彼等は進んで行つて程なく問題の廻廊を辿り、足許が断崖に終るところへ達した。蠟燭の光で検めると、そこは絶壁ではなくて、五六間の急坂であつた。トムは囁いた。

「ハック。今好いものを見せてやるぞ。」

彼は蠟燭を高く翳して又言つた。

「その右の角へ出られるだけ出て行つて覗いて御覽。あれが見えるか？ そら——彼方の大きな岩の腹に……蠟燭の油煙で描いてある。」

「トム。十字架だよ！」

「二號室といふのはあれなんだ。十字架の下だと言つたらう？ ハック。恰度彼處へ印度ジョーが蠟

燭を點して顔を出したんだ。」

「ハックは暫くの間この氣味の悪い符號を見守つてゐた。それから震へ聲を出して、」

「トム。最早歸らうよ。」

「何？ 財寶を置きつ放しにしてか？」

「さうさ。置きつ放しにして行くさ。印度ジョーの幽霊がきつとあの邊をうろついてゐる。」

「そんなことないよ、ハック。そんなことはない。幽霊は死んだところをうろつき廻る——この洞窟の入口だ——ここからは五哩ある。」

「いや、トム。さうぢやない。幽霊はあの金に念を残してゐる。念の残つたところへ出るに定つたものだよ、幽霊は。」

トムはハックの言ふことが道理らしいと思ひ始めた。疑惑の念が彼の胸中に嵩じて來た。しかし間もなく彼は都合の好いことを思ひついた——

「おい、ハック。乃公達は何といふ馬鹿だらう。印度ジョーの幽霊は十字架のある所などにうろついてゐるものか。十字架は神さまの印だもの。」

これは當を得た解釋であつた。さうして早速の効果を生じた。

「トム。乃公はそこまでは考へなかつたよ。成程さうだ。詭へ向きだなあ、あの十字架は。それぢやそろく下りて行つて箱を探すとするか。」

トムは粘土の坂に無遠慮な足跡を残しながら先づ下りた。ハックが續いた。その大きな岩石の立つてゐる深い鉢の底のやうなところから抜け穴が四つ岐れ出てゐた。子供達はその三つまでを檢めたが、これといふ事もなかつた。岩石の根元に一番近い抜け路の中で彼等は毛布を敷きつめた小さな凹いところを見つけ出した。そこにはなほ古いズボン吊りと燻肉の皮と二三羽の鶏の骨の舐りからしが棄て、あつた。しかし金の箱は見當らなかつた。子供達はその場所を再三探したが駄目だつた。トムが言つた。

「奴は確に十字架の下だと言つた。こゝが恰度十字架の下になつてゐる。まさか岩の下ぢやあるまい——この岩の地から生え抜いてゐるのだから。」

彼等はもう一遍隈なく探し廻つて、それから落膽して腰を下した。ハックは別に好い分別も浮ばなかつた。間もなくトムが言つた。

「おい、ハック。こゝを見ろ。この岩の片一方の側には粘土の上に足跡と蠟燭のボタノ、落ちた跡が残つてゐるけれど、他の側にはちつともない。金はこの岩の下にあるに相違ない。乃公はこの粘土を掘つて見る。」

「それも宜からう。好いところへ氣がついた。」とハックは元氣が出て來た。

トムはナイフを出して直ぐに着手し、四五寸掘ると刃先が何かに當つた。

「おい、ハック——音がしたらう？」

ハックも今は掘り始めた。程なく彼等は二三枚の板に行き當つてそれを抉り起した。この板は岩石の下に通ずる天然の横穴を匿してゐた。トムはその中へ入つて、岩の下へ手の伸びるだけ蠟燭を入れたが、見果てがつかないと言つた。彼はこの横穴の探險を發起した。彼は身を屈めて這ひ込んだ。中はじり／＼と瓜先下りになつてゐた。彼はハックを殿後として最初は右に次いで左にその迂回した進路を辿つた。トムは間もなく角を廻り切ると、大聲を立てた。

「しめたぞ！ ハック。ある／＼／＼！」

地底の細路が小さな洞になつてゐるところに財寶の箱が火藥の空樽、皮袋に入つた二挺の鐵砲、二三足の鹿皮の靴、皮帶、その他の濕氣に沁みた雜物と一緒に置いてあつた。

「たうとう見つけた！」とハックは手を金貨の中に埋めて言つた。「おい、トム。乃公達は金持になつた！」

「ハック。乃公はどうもこの金が手に入るだらうと思つてゐたよ。おい、夢のやうだな。けれども、確だ。たうとう見つけた、最早此方のものだ！ おい／＼、こんなところで手間を取つちやならない。擔ぎ出さう。どうだらう、持ち上げるかしら。」

箱の重量は五貫目ばかりあつた。トムはヨチ／＼しながら持ち上げることが出来たが、具合よく持つて歩くには頗る骨が折れた。

「さうだらうと思つたよ。」とハックが言つた。「彼奴等はあの日幽霊屋敷で如何にも重さうな風に持

つてゐたよ。乃公は怖々ながらも見てゐて覺えがある。公乃達は袋を持つて来て好い事をしたよ。」

金は直ぐに袋の中へ移された。子供達はそれを十字架の岩のところまで抱へ上げて來た。

「これでよしと。それからあの鐵砲や何かも皆持つて來よう。」

「おい。慾張るなよ。鐵砲は今度こゝで山賊ごつこをする時まであの儘にして置かう。」

彼等は時を移さず叢林の中へ這ひ出して、用心怠りなくその邊を透して見、人つ子一人ゐないのを幸ひに、直ぐに小舟に乗り込んで、間もなく舟の中で辨當を使つてゐた。約束通りトムが腕の限り漕いで、二人は日が暮れると早々町へ着いた。

「ところでハック。金は未亡人の家の薪小屋の棚へ匿して置かう。明日の朝乃公が來るから、その時に勘定して分けて——それから森へ行つて大丈夫な匿し場所を探すとしようぢやないか。乃公が駈けて行つてベニイ・テイラーの家の車を借りて來るまでお前はこゝを動かさず品物を番をしてゐて呉れ乃公は手間は取らない。」

彼は姿を匿したかと思ふと最早直ぐに車を引いて戻つて、二つの袋をそれに積み、上に拾つて來た檻樓のやうなものを被せて、ガラ／＼／＼と歩き出した。子供達はウエルス人の家へ着いた時立ち止まつて一休息した。彼等が又出懸けようとしてゐると、ウエルス人が家から出て來て言つた。

「これ／＼、誰だ？」

「ハックとトム・ソウヤーです。」

「恰度好いところだ！ さあ、俺と一緒に來なさい。皆はお前達を待つてゐる。さあ急いらく！
——車は俺が引いてやる。おや、見かけによらず重いなあ。煉瓦かい？ ——古金物かい？」
「古金物だよ。」とトムが答へた。

「さうだらうと思つた。この町の子供は古金物の斷片を探し廻つて鐵工場へ賣りに行くが、そんなことをする暇に眞面目に働けば倍も儲かるのになあ！ けれどもそこが人間の淺墓なところだ——さあ急いらく！」

子供達はこんな急ぐ理由を聞きたかつた。「心配は要らない。ドグラス未亡人の家へ着けばわかるよ。」

ハックは——長いこと有りもしない罪を着せられつけてゐたから——やゝ不安の面持をしてかう言つた。

「ジョーンズさん。僕等は何にも悪いことをしてゐたんぢやないんだよ。」
ウエルズ人は大笑ひをした。

「ふむ、それは俺には分らないよ。ハック。けれども心配することはない。お前と未亡人とは大仲好しぢやないか？」

「さうです。兎に角奥さんは私に大變好くして呉れます。」
「それなら大丈夫ぢやないか。何だつて心配をしたがるんだい？」

この質問の意味がハックの覺りの遅い胸に十分解せない中に彼はトムと一緒にドグラス未亡人の家の應接間へ引つぱり込まれた。ジョーンズ氏は玄關口に車を置いて續いた。

室は燈火が晝を欺く程であつた。町の身分ある人は洩れなくそこにゐた。サッチャー家の人達、ハーバー家の一同、ローヂャー家の皆々、トムの家からは伯母さんのポリイとシッドとメリイ。それに牧師さんと新聞記者とその他大勢が悉く盛装をして來てゐた。未亡人は汚い風體をした二少年を如何にも嬉しげに迎へた。彼等は洞窟から歸つたばかりだつたから粘土と蠟油だらけになつてゐた。伯母さんのポリイはトムを見ると顔を赧らめて眉を擧げて首を振つた。しかし二人の子供の困り具合はそれどころでなかつた。ジョーンズ氏が言つた。

「トムさんは未だ家に歸つて居られなかつたので、諦めました。幸ひ宅の前でトムさんとハック君に偶然出會しましたから、大急ぎでお連れ申したところですよ。」

「恰度宜しうございました。有りがたうございます。」と、未亡人が言つた。さうして、「さあ、子供衆私と一緒ににお出でなさい。」

彼女は二人を寢室へ連れて行つてかう言つた。
「さあ、顔を洗つて着替へをなさい。こゝに新しい服が二着あります——シャツも靴下も何も彼も揃

つてゐます。皆ハックのです——いえ、ハックや。お禮には及びませんよ——ジョーンズさんが一着買つて下さつて、私がもう一着買つたのです。けれども何方も二人によく合ふでせうよ。さあ、

着て御覽なさい。私達は待つてゐますよ——悉皆服装が出来たら下りてお出でなさい。」
それから彼女は立ち去つた。

三十五、招待會

「トム。綱が一本見つければ、乃公達は迂り下りられるんだがなあ。この窓は、地面からさう高くない。」と、ハックが言つた。

「をかした奴だなあ！ 何だつて迂り下りたがるんだい？」

「さあ、乃公はあんな立派な人達の揃つたところへは出つけないからなあ、辛抱が出来ない。トム。乃公はあの室へは下りて行かないぞ。」

「馬鹿が！ 何のことがあるものか。乃公なんか平氣なもんだ。乃公がついてゐて世話を焼いてやるから心配するな。」

そこへシッドが顔を出した。

「兄さん。」と彼は言つた。「伯母さんはお晝から兄さんを待暮らしてゐたんだよ。メリイさんが兄さんの晴着をチャンと揃へて、どうして歸つて來ないんだらうつて皆で心配してゐたんだよ。兄さんの着物についてゐるのは蠟油と糞土だらう？」

「何でも宜いよ、シッド。お前の知つたことぢやない。けれども今夜のこの騒ぎは一體どうしたんだ

い？」

「この奥さんがよくやる招待會だよ。今夜はウェルス人のジョーンズさんと息子さん達が正客さ——この間の晩奥さんが危いところを助けて貰つたお禮だよ。それからねえ、兄さん、聞きたければ未だその上のことがあるんだよ。」

「何だい、その上のことつていふのは？」

「ジョーンズさんが今夜こゝで思ひがけないことを打ち明けて皆をアツと言はせるつもりなんだよ。今日その事を伯母さんに話してゐるところを僕は聞いてしまつたのさ。秘密だつて言つてゐたけれど最早皆感づいてゐる——この奥さんも知らない顔をしてゐるけれど、やつぱり知つてゐるんだよ。ジョーンズさんはハックがあなければ駄目だ——ハックがあないと折角の秘密が何にもならないと言つてゐたよ。」

「それぢやハックの秘密かい？」

「ハックが奥さんの家の近所まで強盗をつけて來た秘密さ。ジョーンズさんはそれを言つて皆に腰を抜かさせる氣であるけれども、皆最早薄々知つてゐるから吃驚はしまいと思ふよ。」

シッドは大に満足した様子でクス／＼笑つた。

「シッド、それを言つたのはお前だらう？」

「誰だつて宜いぢやないか。兎に角誰か言つたんだ。」

「シッド、この町中でそんな卑怯なことの出来る奴は一人しか居ない。其奴はお前だ。お前がハックだつたら山からコソコソ逃げ下りて泥坊のことを知らせるところぢやなかつたらう。お前は卑怯なこゝとしか出来ないんだ。お前は他の褒められるのを見てゐることが出来ないんだ。そら——お禮は要らないよ。」さう言つてトムはシッドの耳を殴りつけ、彼を幾度も蹴りながら戸口まで引き立てた。「さあ伯母さんの所へ行つて言ひつけるが宜い。その代り明日ひどいぞ。」

數分後に未亡人の招待を受けた一同は食卓に就き、十數名の子供はその頃その地方の習慣に従つて同じ室の小さな食卓に居竝んだ。刻限を見計らつてジョーンズ氏が挨拶をした。彼は先づ自分と息子達がこの懇切な招待にあづかつた光榮を未亡人に謝して、實はこれには他にもう一人、但し自ら卑下して名を匿してゐる者があると前提を述べ、それからその事件にハックが關係してゐた次第を芝居がかりの當て込み澤山に發表した。しかしこの打ち明け話の惹き起した驚愕は大抵は拵へ事で、場合が場合だつたらかうも想像されるほどに喋々しくなかつた。けれども未亡人は可なり表情たつぷりに仰天して、言葉の限りハックに感謝の意を表した。お蔭で彼は皆の凝視と稱讚の標的になる窮屈の中に新しい着物の窮屈を殆んど忘れた。

未亡人はハックをこの儘家へ引取つて教育を施し、行く／＼は資本を授けて小仕掛けの商賣をさせる積りだと言つた。そこでトムの口を利く機會が出来た。彼は言つた。「ハックは資本は要りませんよ。ハックは金持です。」

一同は唯々禮儀作法上濟まないとの考へから、多大の努力をしてこの突飛な言葉を笑はずにゐた。しかしその場の沈黙には稍不自然なところがあつた。そこでトムは再び言つた。

「ハックは金を手に入れました。皆さんは本當になさいますまいが彼は金を澤山持つてゐるのです。さうニヤ／＼笑ふことはありません——謙だと仰有るなら御覽に入れませう。一寸待つて下さい。」トムは戶外へ走り出した。一同は合點に苦みながらも興あり氣に顔を見合はせ——それから石のやうに黙つてゐるハックを訝しさに打目成つた。

「シッドや。トムはどうしたの？」と伯母さんのポリイは言つた。「あの子は何を始めるか譯の分らない子だよ——ほんたうにあの子のすることは——」

トムは袋を二つ抱へてヨチ／＼しながら入つて來た。それで伯母さんは言ひかけたことを中途でやめてしまつた。トムは金貨を山になるまで食卓の上へさらけ出して言つた。

「どうです？——謙ぢやないでせう？ 半分はハックのです。半分は僕のです。」この光景はピタリと一同の息を止めた。皆目を見張つて、差當りは誰一人口を利くものもなかつた。それから一齊に説明の要求が始まつた。トムは御希望ならばと言つて註文に應じた。物語は長かつたが、眞に面白かつた。一度としてその進行を途絶えさせる差出口が入ならかつた。彼が話し終つた時、ジョーンズ氏は言つた。

「今晚俺は御一同の前で一かどの貯蓄箱を開けた積りでしたが、それは今となつては子供だましのや

うなものです。この吃驚箱にはとても及ばないと老人茲に兜を脱ぎます。」
金は數べられた。額は三萬圓を少々越してゐた。その席には其よりずつと以上の財産家が大勢ゐたけれども、一時にこれだけの現金を見た事のある者は一人もなかつた。

三十六、大團圓

トムとハツクの零れ幸ひは小さい貧乏な聖ペテロ町に著しい感動を與へた。悉皆現金でのこんな大金は殆んど謎のやうな話であつた。この金額は到るところで噂され、羨まれ、拜まれた。町民の多數は不健全な刺戟を受けて逆上の氣味になつた。この町と近村の所謂幽霊屋敷は床一枚々々まで解き崩され、土臺石まで掘返された——それも子供でなく、分別盛りの大人の仕事であつた。トムとハツクは何處へ行つても下にも置かれぬ持て方であつた。町の新聞は彼等の傳記を連載した。

ドグラス未亡人はハツクの金を六分利で廻し、サッチャー判事もトムの金を伯母さんのポリイの依頼によつて同様に處分した。二人の子供は今や素晴らしい収入を持つやうになつた。年九百圓——牧師さんの俸給と同額であつた。

サッチャー判事はトムに頗る敬服してゐた。彼は普通の子供だつたらとても娘をあの洞窟から救ひ出せなかつたらうと言つた。ベツキイが學校でトムに鞭打ちの罰を背負つて貰つたわけを父に極く内證で打明けた時、判事は面に現れる位感激した。さうしてその折トムのついた謎に就いて彼女が辯護の勞を取ると、判事はそれは義侠の爲めの謎で、ワシントンンの櫻の木を切つた眞と共に後世まで歴史に傳へるに足る價值のあるものと言つた。ベツキイは彼女の父親が床を歩き足を踏ん張つてかう言つた時ほど立派に見えた事はないと思つた。そして彼女は直様トムの所へ行つてその事を告げた。

サッチャー判事はトムが將來立派な法律家か軍人になるやうに面倒を見たい希望だつた。彼はトムを陸軍士官學校に入學させるやうにしたい。そして卒業後はその地方で一番良い法律學校で勉強させたいと言つた。それは彼は孰れかの職業に就くため、若しくはその兩方を兼ね併せるためであつた。ハツク・フィンは今が財産が出来たし、ドグラス未亡人といふ保護者があるしから、社交界へ出るやうに——いや、無理やりに交際場裡へ引き摺り出されるやうになつて、當人の迷惑は傍で見ると氣の毒であつた。彼は絶えず身綺麗にしてゐたり、床の中に寝たり、ナイフとホークで食事をしたりするのが實に辛かつた。その上に書物を読んだり教會へ出たりしなければならず、前後左右文明の手枷足枷で弱り切つてゐた。

彼は三週間この辛い生活を辛抱した末或日行方不明になつた。未亡人は甚く心配して二晝夜あらゆる方面を探索した。町の人も心配して到る所を探し廻り、彼の死骸を揚げる爲に河底に網を引いたりした。三日目の朝早く頭の良いトム・ソウヤーは今使はない屠殺場の裏にある空樽を検査して逃亡者を發見した。ハツクはこゝで眠つたのだつた。彼は恰度盗んだ食物の切れ端で朝飯を濟ませ、パイブをふかしながら一休みしてゐる所だつた。彼の髪は櫛が掛けてなく、以前宿無しで自由で幸福だつ

た頃と同じ風雅な襦袢服を着てゐた。トムは彼を叩き起し、彼のお蔭で他人が困つてゐるから家に歸るやうに勵ました。するとハックの顔は平和な満足の色を失つて忽ち陰氣になつた。彼は言つた。

「その話はよしてくれ、トム。乃公はやつて見たが駄目だ。駄目だよ、トム。乃公には向かない。乃公は慣れてゐないんだ。未亡人は深切で乃公に好くしてくれ。けれどもおれはあの家の暮し方が厭だ。毎朝決つた時間に起きたり、身體を洗つたり、髪を梳いたりしなければならぬ。物置に寝てもいけない。息の詰るやうな服も着なければならぬ。あんな服を着てゐると風通しが悪くて仕様がな。それに餘り立派なものだから坐することも横になることも轉げ廻ることも出来やしない。乃公は穴藏の戸口で寝なくなつてからもう何年か経つたやうな氣がする。教會にも出なければならぬ——乃公は難かしい説教は大嫌ひだ！ 教會の中ちや蠅を殺すことも噛み煙草をやるのもいけないんだ！ 未亡人は食事の時に鐘を鳴らす。寝る時も起る時も鐘だ——何でもかんでも恐しく几帳面だから誰だつて我慢出来ない。」

「だが誰だつてさうしてゐるぢやないか？ ハック。」

「他の誰がしたつて、乃公は出来ないよ。あんなに窮屈ぢやたまらない。食物の心配が丸でないからかへつて甘くない。釣に行くんでも游泳に行くんでも一々斷らなければならぬ。それに良い言葉を使はなくちやならないから話をして一向面白くない。乃公は毎日一遍は屋根裏に登つて惡態を吐かなければ羨ぎがつかない、死んでしまふよ、トム。未亡人は煙草も喫はせないし大きな聲も出させ

ない。人の前では口をあいても、身體を延ばしたり搔いたりしてもいけないつて言ふ。」それから殊更に癩に觸つてゐるやうな凄まじい勢で「畜生！ それに未亡人は何時もく祈つてく祈り通しだ！ あんな女は見た事がない！ 乃公は全く逃げ出すにはあられなかつたよ、トム。それにもう直學校が始まると行かなければならぬと來てゐる。乃公はとも我慢出来ない。おい、トム、金があるのは人が言ふ程好いもんぢやないよ。只苦しんで汗を掻き通して死んだ方が好いと思ふだけだ。所がこの襦袢もこの空樽もおれに相當してゐる。乃公はずつとこの儘で暮す積りだ。トム、あの金さへなければあんな苦勞はしないで済むんだ。乃公の別け前はすつかり君にやるから、君は時々乃公に十錢玉を呉れ、ば宜い——始終呉れなくても宜い、乃公は中々手に入らない物の外には金を使はないから。君は未亡人の所へ行つてさうするやうに談判してくれ。」

「いや、ハック、そんなことが出来るものか。それは善くない。それに君は少し辛抱してゐればその方が好くなるよ。」

「よくなるつて？ うん——温い煖爐の上に長く坐つてゐれば煖爐が好くなるやうに、いや、トム、乃公は金持は厭だ。窮屈な家に住むのは厭だ。勝手にしやがれ！ 折角鐵砲や洞穴が手に入つて山賊ごつこを始めようといふときに、こんな馬鹿げたことが起つて何も彼も臺無しになつてしまふ！」

トムは好い機會を見つけた。

「おい、ハック。金持になつたつて僕は山賊を止めようとはしないぜ。」

「さうか？ それは本統かい、トム？」

「無論本當さ。しかし君がちゃんとした暮しをしてゐないと仲間に入れる譯にはいかない。」

「ハックの喜びは消え去つた。」

「乃公を入れて呉れないつて？ トム。海賊ごつこの時は入れて呉れたぢやないか？」

「それはさうさ。しかしあれとは違ふ。山賊は海賊より上品なものだ。何處の國だつて山賊と言へば立派な貴族だ——公爵か何か。」

「ねえ、トム。君は何時もおれと仲善しだつたぢやないか？ おれを仲間外れにはしないでだらう？」

「ハック、僕はしたくないが他が何と言ふだらう？ 屹度かう言ふよ。『トム・ソウヤー——一味か。下等な奴が入つてゐるな！』それは君のことだぜ。さうしたら君も厭だらうし、僕も厭だ。」

「ハックは暫く黙り込んだ。彼の心中には争鬭が起つた。遂に彼は言つた。」

「よし、仲間に入れて呉れるなら乃公は未亡人の所へ歸つて一月程辛抱して見よう。」

「それは好い。ハック、素敵だ。さあ一緒に行かう。僕は君が辛抱出来るやうに手加減をしてくれるやうに未亡人に頼んでやらう。」

「さうしてくれるかい、トム？ それは有難い。若し未亡人が一番辛いことを、大目に見て呉れるなら、乃公はそつと煙草を呑み、そつと悪態を吐いて、出来るかどうかせいよくやつて見よう。山賊ご

つこは何時始めるんだい？」

「直に始める。仲間を集めて今夜あたり結黨式をやらう。」

「何をやるつて？」

「結黨式さ。」

「何だいそりや？」

「それはかういふことを誓ふのさ。仲間同志助け合ひ、たとひ身を切り刻まれても仲間の秘密は言はない、仲間の一人に害を加へる奴はその家族全體と一緒に殺してしまふ。」

「それは面白い——素晴らしく面白い、全く。」

「それは保證するよ。そしてその誓ひは真夜中、出来るだけ寂しい、恐ろしい所でするんだ——幽霊屋敷が一番好い。しかしこの邊の町の人々が皆壊してしまつたからなあ。」

「兎に角真夜中は好い、トム。」

「さうだ。誓ふのは棺桶の上でなくちやいけない。そして血で署名するんだ。」

「それは素敵だ！ 海賊より千萬倍も素敵だ。乃公は死ぬまで未亡人の所にある積りだ。それで乃公が若し偉い海賊になつたら未亡人は乃公を引き取つたことを得意がるよ」

(終り)

社會改良家

先年私は博覽會を見る積りでシカゴへ行つた。博覽會は竟に見ないでしまつたが、私の旅行は全く損失でなかつた——といふのは勞を償ふだけのことであつたのである。ニウ・ヨークで私は同じく博覽會へ行く途中だといふ常備軍の少佐に紹介されて、一緒に旅をすることになつた。私は先ホストンへ行かねばならぬ用向があつたが、彼は一緒に旅行して宜いと言つたから、これが何等相互の差支にもならなかつた。少佐は立派な風采の、骨格鬼をも取挫きさうであつたが、様子は何處までも閑雅で、その談話振には温言能く人を服すといふ趣が見えた。彼は親み易かつたが、甚だしく物靜かであつた。のみならず眞面目一方で、洒落の洒の字も分らなかつた。彼は見る物聞く事にその何たるを問はず多大の興味を持つて居たが、彼の沈着は動かすべくもなかつた。何事も彼を煩はせなかつた。何事も彼を激せしめなかつた。

しかしながら最初の一日の暮れないうちに私はこの人の物靜なるにも拘らずその心の奥底に一種の熱情——事苟くも公共に關する悪習は悉く之を改革したいといふ熱情の潛むのであるのに氣がついた。彼は人民の權利の保護といふことに力を致した——これが彼の道樂であつた。彼の意見によると共和國の人民は一人殘らず自己を一箇の表向ならぬ警密官と心得、法律及その執行に對して無俸給の

見張番を爲すべき筈であるといふのであつた。而して公權の維持及保護といふことにかけて唯一の有効なる方法は人民が各自の目に留つた公權侵害の行爲を妨げたり罰したりするに自ら與つてその一端を果すことにあると彼は考へた。

これは名案であるが、若しこんなことを實行したら、面倒の絶える間がなからうと私は思つた。始終不都合な腰辨を免職にして貰ふのに骨を折つて、草臥れ儲けどころか、恐らくは世間から笑はれるのが落だらうと思はれた。しかしながら彼は、否、然うでない、君は考へ違ひをしてあると言つた。何人も免職する必要はない。否、實際の話、免職してはならぬ。若し免の字にして貰ふやうなら、それは最早それで失敗である。吾人は不都合をした本人を改良せねばならぬ——改良してその儘有用とせねばならぬのであると言つた。

「それでは不都合者を届けて置いて、免職にせずして譴責で濟ませて呉れとその上官に頼まなくちや可けないと仰有るのですか？」

「否、然ういふ意味ぢやありません。全く届けないのです——届けると當人の地位を危くしますからね。それは逆も一筋縄で負へない時には届け出るやうな風をしても可うございますが。しかしこれは極端の場合です。かういふことは一種の腕力沙汰で、腕力沙汰は面白くない。ところで權謀術數といふことが口を利きます。若し掛引が上手なら、若し權謀術數を行ふなら……」

二分間私達は電報受付口に立つてゐた。この間少佐は若い電信手の中の一人を此方へ向かせようと

努めたが、彼等は皆委細頼着なく巫山戯騒いでゐた。少佐は今や聲を出して、その一人に電報の受付を求めた。返答に曰く「一寸お待ち下すつても宜うございませう。」

さうして巫山戯騒ぎは以前の通り續いた。

少佐は、宜しい、別段急ぎでないと云つた。それから又一通の電報を次の通りに認めた。

「今晚飯を喰ひに來い、貴社の一支局の執務振を話して上げる。」

受信人を見ると、西部聯合電信會社長とあつた。

間もなく今しがた小癩の言を弄した青年が手を伸して電報を受取つた。それを一讀すると彼は顔色を失つて言譯や辯明を始めた。彼は、若しこの恐るべき電報が發せられるなら、地位を失つてしもふのみならず再び新しい地位に有付くことは決して出来まいと言つた。若し御慈悲を以つて今回だけ御勘辨下さるならば、必ず再び御迷惑は掛けませぬと言つた。少佐はこの示談の申出に應じた。歩き出してから少佐が言つた。

「御覽の通りあれが權謀術數です——どうです、靈驗灼然なものでせう、皆の始終やるやうに騒いだつて何にもなりません——彼の小僧は此方から言つただけの口返答も出来ずから、迂りかゝると結局此方が言負かされて恥を搔くのが御常例です。しかし御覽の通り小僧も權謀術數には一たまりもございませぬ。外は辭令を溫和にして内は術數を廻らす事——これが改革の秘訣です。」

「成程、分りました。しかし十人が十人ながら貴君のやうな具合の好い立場にはゐますまい。何人

でも社長と懇意だといふ譯には參りませんからな。」

「否、貴君は考へ違ひをしてゐる。私は社長と半面の識もない——唯社長を外交的に利用しただけの話です。かういふ風に利用するのは社長の利益になり且つ又公共の利益になります。何の害もありません。」

私は言つて然るべきか、否かを決定し兼ねたやうな様子をして、

「しかし謙を吐くのは元來正しい——立派な事ではせうか？」

彼はこの質問に含まれてゐる聖人ぶつた非難には氣がつかずに、きはめて落着拂つて、何の造作もなく、

「さうです。時には差支ないです。他人を害する爲めの謙や自を利する爲めの謙は申譯が立たないけれど、他人を向上させる爲めの謙と公共の利益の爲の謙は——これは、貴君全く別問題です。こんな事は何人でも分つてゐます。しかし貴君は結果を御覽になつたのだから、方法を御心配になるに及びません。彼の青年はこれから有用の材になります。作法の正しい人になります。彼奴は可愛い顔をしてゐました。助けて置く價值があります。本人の爲めにでなくも、母の爲めに助けて置く價值があります。無論母があるでせう。妹もあるでせう。この邊の考慮をしない人には困ります。私は今迄に決闘をした事がない——一遍もない——しかし決闘の申込は世間並に受けてゐます。私には何時も相手の罪も科もない家族が、相手と私の間に立塞がるやうに思はれるのです。彼等は何等の不都合も

いてあません——私は彼等を悲ませるのに忍びないのです。」

その日の中に彼は幾多の小弊害をその都度極めて圓滑に後に何等の傷も残さぬやうな巧妙なる權謀術數を用ゐて矯正した。彼はかくの如き成功によつて私が彼の商賣を羨まざるを得なかつた程の幸福と満足を得た——實際の話、若し私が多少練習の後の活版の蔭に隠れて筆先でやれると信するくらゐ手確に口先で謔を吐くことが出来たなら、一つこの改革商賣をやつて見ようといふ山氣を起すところであつた。

その晩おそく私達が鐵道馬車で山の手へ差掛ると、騒々しい無頼の徒が三名乗込んで来て、婦女子供さへ混つてゐる氣弱の乗客達に聞いてゐられないやうな言葉を浴せかけ始めた。何人あつて逆らう者も答へる者もなかつた。車掌は宥め賺さうと努めたが、連中は車掌を罵つたり冷かしたりした。間もなく私は少佐がこれは自分の畑の仕事だと悟つたのに氣がついた。彼は確に胸の中で例の權謀術數を廻らして、用意ヲサ／＼怠りなかつた。私は場合が場合、相手が相手だから、彼の樽俎折衝の第一歩が山崩れのやうな嘲笑を招き、ことによるとそれだけで濟まなからうと感じた。しかし私が耳打ちをして引止めようと思つてゐる中に、彼は最早始めて了つたから、何うにも仕様がなかつた。彼は無造作な而も落着いた調子で、

「車掌さん、この豚共を追出さねばなりませんぞ。私が手傳つて上げよう。」

私は眞逆かう出るとは思ひがけなかつた。電光石火、三人の無頼漢は彼を目がけて飛掛つた。しか

し一人として彼の許まで手の届いた者はなかつた。彼は拳闘の競技場以外では逆も思ひ儲け得ぬやうな鐵腕を揮ふこと三度、相手の三人は踏つた所から立上るだけの元氣さへなかつた。少佐は彼等を引摺つて行つて、往來へ投げ出した。そこで馬車は再び動き始めた。

私は吃驚してしまつた。羊のやうに優しい人がこんな事を仕出來したのに膽を潰した。彼の現した腕力とこの遺憾なき結果に感心した。全體を通じての敏活な事務的を遣口に呆れて了つた。終日この腕力家から温言と術數の説法を聞いてゐたのかと思ふと、この事件には一種の滑稽な趣があつた。さうして私はこの方面に彼の注意を呼んで、一番諷刺を言つてやりたかつたが、彼の顔を見た時に、その全く無益な事を知つた——彼の晏如たる顔容には諧謔の微光すら見えなかつた。これでは言つても分らなからうと思つたのである。馬車を下りてから私は、

「立派な權謀術數でしたね。しかも三發は驚きましたね。」

「あれですか？ あれは權謀術數ぢやありません。貴君は考へ違ひをしてゐる。權謀術數は全く別です。あゝ、いふのには適用出來ません。適用しても分りませんからな。全く彼は權謀術數ぢやありません。腕力です。」

「貴君が腕力だと仰有るからは矢つ張りそれに相違ありませんが……」

「無論相違ありません。純粹の腕力です。」

「私も何うもさうらしいと存じました。改革もあゝ、いふ風にしてやらなければならぬことが度々起

るのですか？」

「否、どう致しまして。あんな事は滅多に起りません。一番多くても半年に一度とは起りません。」

「彼の連中は直りませうか？」

「直りますとも。決して心配はありません。私は打ち方と打ち所を知つてゐます。私は願の下を打たなかつたでせう。願の下だと奴等は助かりません。」

私は確に然うだらうと思つた。私は——自分でも聊か頓智を利かした積りで——一日小羊 (Lamb) だつた人が一變して撞槌 (Ram) になつた——破壊用撞槌 (Battering-Ram) になつたと言つたが、しかし彼は見るから清々するやうな率直と朴訥の様子で、否、破壊用撞槌は全く別問題で、昔の軍用器具であると言放つた。どうもこれには私も恐入つて了つた。私は殆んど噴飯して君は洒落の分らぬことにかけては常に驢馬の兄弟分だと言はうとした——實際言葉が口許まで出て來たけれど、思ひ止つた、別段急ぐ要もなし、何時か又電話で言つても言へることだと思つて。

翌日私達はポストンへ向けて出發した。娯樂車の喫煙室が一杯になつてゐたから、私達は眞正の喫煙車へ入つて行つた。前方の席に顔色の悪い百姓風の老人が通路を遮るやうにして坐つてゐた。彼は空氣を入れる爲めに開けた戸を足で押へてゐた。間もなく巨大な静動手がツカ／＼とやつて來た。彼はその戸のところへ來ると立止つて、百姓に澁面を浴せかけ、殆んどその靴を振り取る位の勢で戸を引張つた。それから彼は大急ぎで自分の爲に來た仕事に取掛つた。これを見て數名の乗客が笑つ

た。老人は首を垂れた。

少時すると、車掌が通り掛つた。少佐は車掌を呼止めて、例の慇懃な態度で問ひかけた。

「車掌さん、静動手の不都合は何處へ届けますか？ 君に届けますか？」

「お届けになるなら、ニウ・ヘーヴンでお届けなさい。一體静動手が何を致しましたか？」

少佐は一部始終を話した。車掌はこれは面白いと思つたらしかつた。さうしてその溫和な語調には既に皮肉の針先が現れてゐた。

「承つたところでは静動手は何にも申しませんでしたね？」

「何にも申しませんでした。」

「しかし顔を擧めたと仰有るのでせう？」

「さうです。」

「さうして無作法な戸の開け方をしたと仰有るのでせう？」

「さうです。」

「それだけでございますか？」

「それだけです。」

車掌は愉快さうに微笑むた。

「成程、お届けになるなら御勝手にございしますが、お届けになつても何にもなるまいと思ひます。お

察し申すところ静動手がこの老人を侮辱したと貴君は仰有るのでせう。すれば社では彼が何を言つたかと訊きます。何にも言ひませんでしたと貴君が仰有る。社では何にも言はないと御自認になるからは何うして貴君は侮辱したといふ證明が出来ますかと申すに定つてゐます。」

車掌の簡潔なる論法を聞いて、低聲に感歎の意を洩した者があつた。車掌は満面の得意を藏すことが出来なかつた。しかしそんな事に競ともする少佐でない。

「そこです。君の議論は恰度申告制度の大缺點に觸れてゐます。鐵道の役員は——公衆竝に君と一般——口に出した侮辱以外に侮辱は何程もあるといふことに氣がつかないのです。そこで何人も會社へ行つて、様子、手眞似、目付等でやつた侮辱を届けたいのです。しかもかういふ侮辱は時とすると言葉の侮辱よりも怵へ難い。捕捉するところが無いだけに怵へ難いのです。さうして侮辱した人間は會社の役員の前へ引出されると、決して不都合をする考へはなかつたと十人が十人ながら申します。それで役員は口に出さない無禮や侮辱を届け出るやうに特に又切に公衆の依頼するのが至當だと私は思つてゐます。」

車掌は笑つて

「成程、さうなれば大層結構なことでございますが。」

「否、餘り結構なこともない、私はこの事件をニウ・ヘーヴンへ行つて届ける決心です。さうしてお禮を言はれる積りです。」

車掌の顔は聊かその得意の色を失つた。さうして出て行く頃には屈托の餘り全く相が變つてゐた。

私は、

「貴君は本氣で今の小事件に時間潰しをなさる積りですか？」

「小事件ぢやありません。かういふことは必ず届けなければなりません。公の義務です。かういふ義務を怠ける権利は何人にもありません。しかしこの事件は届けずに済むだらうと思ひます。」

「何故ですか？」

「届ける必要がありません。權謀術數が功を奏します。まあ、見てゐて御覽なさい。」

少時すると、先の車掌が又廻つて來た。彼は少佐のところまで來ると、腰を折つて、

「只今の事件でございますが、彼は最早御心配下さいませ。御届けになる必要はございません。あの静動手は私の責任です。若し再び不都合があつたら、私から小言を申す積りでございます。」

少佐の返答は懇篤なものであつた。

「それが私の希望してゐたところ。私が復讐的精神に驅られてゐると思つてはなりません。決してさうぢやないのですから。義務です。單に義務の觀念から言つたことです。唯それだけの話です。私の義弟はこの線の重役を勤めてゐます。義弟は君が、この次に静動手が無害の老人を思ひさま侮辱した時に小言を仰有る積りだと聞いたら、必ず喜ぶ事です。」

車掌は喜ぶべき筈のところだが、一向に嬉しさを様子も見せず、却つて何だか浮かぬ顔をして、

居心が悪さうであつた。少時立つてゐてから、彼は、

「私は静動手を何とかしなければならぬと思ひます。免職にしませう。」

「免職？ 免職して何になりますか？ もつと作法を能く辨へるやうに教へて、その儘にして置くのが何よりだとは思ひませんか？」

「成程、御道理でございます。では差當り何うしたら宜しうございませうか？」

「静動手はこゝにある方々の面前で彼の老人を侮辱したのです。何うでせうこゝへ呼んで来て、皆の前で謝罪をさせては？」

「直様呼んで参ります。それから私はかういふことを申上げて置きたいのでございます——若し一般の方々が唯今のやうなことを不問に附してお歸りになつて、蔭で會社の悪口を仰有る代りに、貴君の爲すつたやうにして御届下さるならば、現業員の執務振が忽ち一變するだらうと存じます。いや、どうも有難うございました。」

静動手は來て謝つた。それが行つて了ふと、少佐は、

「御覽なさい。極めて簡單なものでせう？ お手軽に行つたでせう？ 普通の人間では何を言つても駄目ですが、しかし重役の義兄となると又格別で、何でも料簡次第に事が運びます。」

「しかし貴君は眞正に重役の義兄ですか？」

「何時でもさうです。公共の利益が必要とする場合は何時でも然うです。私は何處の會社の重役會で

も一人宛義兄が義弟があります。さうしてこれが多大の面倒を省いて呉れます。」

「廣い上等の親類關係ですな。」

「さうです。總計三百人以上もあります。」

「さうしてその親類關係が車掌に疑はれることはありませんか？」

「さういふことは一遍もありません。正直の話です——全くありません。」

「お得意の改革主義にも似ず、何故貴君は打棄つて置いて、静動手を免職にさせなかつたのですか？」

彼奴は充分免職の價値がありましたぜ。」

少佐は稍焦れつたいといふやうな色を見せて答へた。

「少しお考へになつたら、貴君はそんな質問はなさるまいと存じます。静動手といふものは犬ぢやありません。犬ならば犬待遇でなくちや効果が無いでせうが、彼も人間です。さうして人間としての奮闘をしなければなりません。彼には彼を杖柱と頼む妹、か母か妻子があるに定つてゐます。必ずさうです——例外はありません、彼から生計を奪ひ取るのは同時に彼の係累の生計を奪ひ取ることにあります——彼等が此方に何ういふ不都合をしましたか？ 何にもしてゐません。さうして無禮な静動手を一人免職にして、また同じやうなのを一人雇つたところで何になりますか？ 決して策の得たものでありません。合理的な方法は彼の静動手を改心させて、その儘職に留めて置くことだと思ひませんか？ 無論さうです。」

それから彼は聯合線の一課長の行爲を驚歎しながら引合に出した。

それは七年勤めた轉轍手が一度不注意の爲めに列車を脱線させて、大勢の人を殺した時の話で、公衆が立腹のあまり、その男を免職にしろと言つて押掛けて來たけれど、課長は次の通りに答へたといふ。

「否、貴君方は考へ違ひをしてゐなされる。彼の轉轍手は今回の失策で一大経験を致してゐますから、最早この上脱線させるやうなことはございませぬ。それで彼は當方から見れば以前に倍して貴重な現業員です。私は今の儘にして置く積りです。」

この旅行中に事件が尙一つあつた。ハートフォードとスプリングフィールドの間で、新聞や雑誌を抱へた汽車のボーイが、呼賣しながら入つて來て、寢てゐた紳士の上へ見本を一つ落した。すると紳士は吃驚して目を覺し、大層立腹して、同伴の二人と共に頻りに不都合を鳴らし始めた。竟に彼等は娯樂車の車掌を呼付けて、事の次第を説明し、是非共ボーイを免職にさせる決心と見えた。この三原告はホールヨークの豪商で車掌が多少彼等を恐れてゐたことは明白であつた。彼は彼等を宥めようと努め、彼のボーイは自分の配下でなく、新聞社のですからと言譯をしたが、相手は頑として動かない。

すると、少佐はボーイを辯護する爲めに自ら進んで證人に立つた。曰く、

「私はすつかり見て居りました。無論貴君方にはこの事柄を針小棒大に仰有るお考へは御座いますま

い——素より御座いますまいが、失禮ながら貴君方は多少その針小棒大の弊に陥つてゐられると存じます。彼のボーイは普通のボーイのやることをやつたに過ぎませぬ。若し彼のボーイの行儀作法を改めさせようと仰有るなら、私も同意見です。極力お手傳ひ申上げます。が、しかし何等改悛の機會も與へず追拂ふのは公平でありませぬ。」

しかしながら、彼等は憤つてゐたから、示談の申出には一切耳を藉さうとしなかつた。彼等はボストン、オルバニーの社長と昵近の間柄である——明日は何を差措いてもボストンへ行つて、ボーイを首にする決心だと言つた。

少佐は又少佐で、私にも手脱はない。ボーイを助ける爲めには全力を盡すと言つて力んだ。連中の一人が少佐の顔をジロ／＼と眺めながら言ふやう、

「成程、これは畢竟何方の側が一番社長を動かせるかといふ問題になりさうですな。失禮ながら、貴君はプリツスさんを御存知ですか？」

少佐は泰然として答へた。

「はい、プリツスは私の叔父です。」

これだけで最早充分であつた。一二分間は皆妙に黙つて了つたが、次いでその場繕ひの挨拶や、一足飛の處分案と大袈裟過ぎた立腹に對する辯解が始まつて、今しがたの活劇は何處やら、問題は中止、ボーイはその儘お咎めなしといふことに定つた。

私はこれも亦例の權謀術數の一種だらうと思つてゐたが、果せる哉、この線の社長は——當日限り、當列車限り、臨時に採用した外——少佐の叔父でも何でもなかつた。

歸途には別段書き立てる程のことも起らなかつた。是は多分夜汽車に乗つてずつと寢通したからであらう。

私達は土曜日の晩、ベンシルバニヤ線でニウ・ヨークを立つた。翌朝食事が済んでから、私達は娯樂車へ入つて行つたが、いやはや退屈千萬のところでも人も殆んど居らず、何にもはじまつてゐなかつた。そこで私達は同じ車の喫煙室に入つた。こゝには三人の紳士が居た。その中の二人は會社の一規則——日曜日には車中でトランプをやつてならぬといふ規則に不服を唱へてゐた。彼等は今しがた罪のない點取りのゲームをはじめて車掌から注意を喰つたところであつた。少佐は此奴は面白いと思つて、もう一人の紳士に向ひ、

「貴君はトランプに故障を仰有いましたか？」

「否、何う致しまして、私はエール(大學)の教授で信神は致しますが、大して堅苦しい思想は持つて居りません。」

と聞くと、少佐は今度は二人に向つて、

「貴君方はゲームをお続けになつて、少しも差支ありません。こゝには故障を申す者は一人も居りません。」

その一人は規則に觸れる危険を辭退したが、もう一人は少佐が相手をするなら又始めても宜いと言つた。そこで、彼等は膝の上に外套を一枚擴げて、ゲームを始めた。間もなく娯樂車の車掌がやつて來て、無愛想な調子で、

「もしく、貴君方は困りますねえ。札をお仕舞ひください——トランプは、禁じられてゐるのであります。」

折から、少佐は札を切つてゐた。さうしてなほ切り續けながら、

「何人の命令で禁じられてゐますか？」

「私の命令です。私が禁じます。」

少佐は札を配り始めた。さうして配りながら、

「君はそんなことを考へ出したのですか？」

「どんなことですか？」

「日曜日にトランプを禁じるといふことです。」

「否、無論私ぢやありません。」

「何人ですか？」

「會社です。」

「それでは結局君の命令ぢやない。會社の命令です。さうでせう？」

「さうです。が、貴君方はお中止になりませんね。私は直様お中止になつていた、かなければなりません。」

「まあ静になさい。急いではこのことを爲損じます。一體何人が會社にそんな命令を發する權力を與へましたか？」

「さあ、それは私には一向關係のない問題です。さうして……」

「しかしこの場合、關係者は君だけぢやありませんか？ これは私には關係ある問題になるかも知れません。否實際極めて重大な關係のある問題です。私は自分の名譽を毀損せずには、國家の法律的要求を蹂躪することが出来ません。私は相手の個人たると團體たるとを問はず、自分の公權を毀損せずには不法の規則でもつて——鐵道會社が絶えずやらうとしてゐるやうに——自分の自由を拘束させることが出来ません。そこで、私は前の問題に戻ります——何人の權力によつて會社がこの命令を發しましたか？」

「私は存じません。それは會社の問題です。」

「同時に私の問題です。果して會社にそんな規則を發布する權利があるか否かを私は疑ひます。この鐵道は數個の州を貫いてゐます。君は今汽車が何處の州を通つてゐるか、又この種の問題に關して、その州の法律がどうなつてゐるか御承知なのでですか？」

「州の法律は私に關係ありません。しかし會社の命令が私に關係あります。このゲームを止めるのが

私の義務です。是非止めて戴かなければなりません。」

「或はさうかも知れませんが、しかし急ぐ必要はありません。旅館へ行つて見ると、室々に規則が揭示してありますが、同時にその規則の典據として州の法律から章句が引用してあります。ここには一向そんな揭示が見えません。何卒君の命令の典據を出して下さい。さうして兎に角結着をつけませう——御承知の通り、君は先刻からゲームの邪魔になつてゐる。」

「そんなものは何にも持つてゐませんが、私は命令を受けてゐます。それで充分です。命令に服従して戴かなければなりません。」

「否、早合點は御免蒙りませう。虚心平氣に問題を攻究して、お互に間違をしないやうに、雙方の立場を明かにするのが萬全の策だらうと思ひます——何となれば、合衆國民の自由を殺ぐといふことは、君なり鐵道なりが考へるよりは、餘程重大な問題です。さうして、私にあつては殺ぐ人が殺ぐだけの權利を證明するまでは、決して殺がせません。それで……」

「もし、札をお仕舞ひになりますか？」

「仕舞ふ時が來れば仕舞ひます。仕舞はないとは申しません。君はこの命令には服従せねばならぬ、と仰有つた。ねばならぬ、これは強い言葉ですぞ。何れ位強い言葉か、君は御承知でせう。こんな強い命令を君に授けるからは、賢明なる會社は、その違犯に對して何か罰を制定してゐるに相違ありません。さもなければ、折角の命令も空文に流れて、笑ひ草になる虞があります。この法律の違犯に對

しては、一體どんな罰が制定されてゐるのですか？」

「罰と仰有いますか？ そんな事は一向聞きません。」

「何うも君は何か考へ違ひをしてゐるに相違ない。會社は君にここへ来て、亂暴にも無邪氣な娛樂を中止させる命令を與へて置きながら、それを強行する手段を授けてゐないと仰有るのですか？ それぢや全く無意義ぢやありませんか？ 若し相手が命令に服さなかつたら、君は何うしますか？ 札を没収しますか？」

「否」

「反則者を次のステーションで下しますか？」

「さあ、無論——切符を持つてゐる以上は、さういふ譯に參りません。」

「裁判所へ突出しますか？」

車掌は黙り込んで、如何にも弱つたやうであつた。少佐は又札を配り始めて、言ふやう、

「御覽なさい——君は手も足も出ない。會社は君を馬鹿氣た立場に置いてゐるのです。君は僭越な命令を授つて、聞いた風な取次方をなさるが、さて問題の根本を調べて見る段になると、これはしたり、服従強行の方法が全く缺けてゐます。」

車掌は決然として、

「では皆様、貴君方は私の命令をお聞きになりました。それで、私の義務は終つた譯です。服従する

しないは、貴君方の御隨意になさいませ。」

さうして、その場を立去らうとした。すると少佐は、

「お待ちなさい。問題は未だ片付きません。義務が終つたといふのは君の考へ違ひかと思ひます。若し眞正にさうなら、私にも一つ果さなければならぬ義務があります。」

「何と仰有いますか？」

「君は私の規則違反をピツツバグの本部へお届けになる積りですか？」

「否、届けたところで仕様がありません。」

「君は私を届けなければなりません。さもなければ私が君を届けます。」

「何ういふ理由でお届けになりますか？」

「君がこのゲームを止めないのは會社の命令に反いた行爲だからです。個人として申せば、使用人中にその職務を怠る者のないやうに會社の便宜を計るのが私の義務です。」

「御冗談でせう？」

「否本氣です。個人としての君には、私は何等の悪意を持つてゐません。が、しかし役員としての君が會社の命令を果さなかつたのを不都合と思ふのです。で、若し君が私を届けなければならぬなら、私は君を届けなければなりません。屹度届けます。」

車掌は當惑顔をして考へてゐたが、やがて急に、

「どうもこれは自分で自分を縛るやうなものです。こんなに弱つたことはございません。狐に誑まれたやうです。こんなことは今迄決してございませんでした。お客様は皆閉口して、一言も仰有らないものですから、罰の件はない命令がどれ位滑稽なものだか判りませんでした。私は何人も届けたくありません。又届けて戴きたくありません——届けられたら、どんなことになるかも知れません。さあ何卒ゲームをお続け下さい。御希望ならば晩まで勝負をなさいませ。さうして最早この問題はこれだけに致し度うございます。」

「否、私は唯この紳士の権利を確證する爲めにここに坐つたのですから、この席は最早このお方にお戻し致します。が、君は彼方へ行く前に何の爲めに會社がこの規則を拵へたか、君のお考へになるところをお話し下さいませんか？ 抑々どういふ理由で、會社がこんな規則を設けたと思ひますか？ 私は見るから馬鹿々々しい辯解や、子供瞞しのやうな言ひ譯は御免蒙つて、合理的の説明が欲しいのです。」

「さあ、それは私にも申し上げることが出来るかと存じます。この規則の出來た理由は極めて明白でございます。他のお客さまの——殊にその中の信神者の感情を重んじる爲めでございます。彼等は乗車中トランプのゲームで安息日を汚されるのを厭がるからでございます。」

「私も恰度さう考へました。彼等は日曜日に行方をして、自ら日曜日を汚すのは平氣な癖に、他人がトランプをやれば……」

「そこでございます。貴君は急所をお突きになりました。私は今が今までそこへは氣が付きませんでした。成程、貴君がお調べになつて見ると、これは全く馬鹿々々しい規則でございます。」

恰度、この時に列車の車掌がやつて来て、非常な權幕でゲームを禁止しようとした。しかし娛樂車の車掌は、

「君、一寸、一寸」

と慌しくその男を遮つて、説明の爲めに横合へ連れて行つた。その後、この問題に關しては最早何等の音沙汰もなかつた。

私は、シカゴへ着いてから、十一日間寢込んでしまつた。さうして旅行が叶ふやうになるや否や、東部へ歸らなければならなかつたから、博覽會は一眼も見なかつた。少佐は私が窮屈な思ひをせず、又居心地の好いやうにとの親切から、出發の前日に寢臺車内の寢室を一個借切つて、料金を拂つて置いて呉れた。しかるに、私達がステーションに着いた時には、何か手違が起つて、私達の寢臺車は列車についてゐなかつた。車掌は私達の爲めに一區劃を用意して置いた。さうして、

「遣線算段の結果、漸つとこれだけの都合がついたのでございます。」

と言つて、丸め込まうとした。しかしながら少佐は、

「否、私達は急ぐ旅でないから、寢臺車のつくまで待つてゐませう。」

と答へた。すると、車掌は爲たり顔に皮肉つて言ふやう、

「それは仰せの通り、貴君方はお急ぎでございますまいが、手前共は大急ぎでございます。さあ、お召し下さい。何卒、お早く、最早時間がございません。」

ところが、少佐は自ら乗らうとしないのみならず、私の乗ることも許さなかつた。彼は契約の寢臺車を要求して、どうしても仕立て、貰はなくてはならないと言つた。これが急ぎ立てられて、大汗になつてゐる車掌を焦らした。彼の言ふやう、

「手前共は出来るだけの遺練をつけたので——出来ないことは出来ないでございます。區劃で御満足下さるかそれとも唯でお出になるか、二つ一つでございます。行違が起りまして、唯今となつてはどうすることも出来ません。かういふ行違は時々起るのでございますから、精々御辛抱して戴くより外はございません。他のお客さまは皆さうなさいます。」

「成程、そこが問題の要點です。若し他のお客が皆その権利を固執強行してゐたなら、君はそんな平氣な顔をして、私の権利を蹂躪しようとはしなからうと思ひます。私は君に餘計な面倒をかける積りはありませんが、この次にこんな詐欺に懸る人のないやうにするのが私の義務でございます。それで、私は契約の寢臺車を仕立て、貰はなければなりません。さもなければ、私はこの儘シカゴに止まつて、契約違背の廉を以つて會社を訴へる決心です。」

「會社をお訴へに？　こんなことで！」

「眞正にお訴へになるお積りでございますか？」

「眞正です。」

車掌はツクツク少佐の顔を眺めて、さて言ふやう、「これは迎も敵ひません——どうも驚きました。——こんな例は決して見たことがございません。しかし、貴君は確にお訴へになりさうです。まあ、お待ち下さい、驛長を呼んで参りますから。」

驛長はやつて来たが、大層迷惑した——間違を仕出来した者に對して、なく、少佐に對して迷惑した。彼は稍無愛想な調子で、最初に車掌が執つたと同じ態度を執つたが、何うあつても寢臺車を仕立て、貰はねば承知がならぬといふこの言葉おだやかな軍人を動かすことが出来なかつた。しかしながら、この場合道理のある側は唯一つあるばかりで、それが少佐の側だといふことは素より明白であつた。驛長は今や迷惑らしい様子を棄て、遽に愛嬌を作り、進んでは半ば謝罪的の口調を用いた。これが和解の緒になつて、少佐は讓歩した。彼は契約の寢室は棄てるけれども、兎に角寢室でなければ困ると言つた。それから散々探した擧句、その持主がさういふ次第ならば讓つても可いといふ寢室が一個見つかつた。彼はそれと此方の區劃とを取換へて、私達は到頭出發した。車掌はその晩私達のところへ顔出しをして、懇切と鄭重を極め、私達は長い間談話をして、大分親しくなつた。彼は公衆が尙一層度々苦情を言つて呉れ、ば宜い——苦情が出れば出る程、好い好果が上るのですからと言つた。さうして、

「鐵道會社もお客さまの方で多少營業に興味を持つて下さらなくては、ナカ／＼痒いところへ手の届くやうに萬端の責務が果せる譯のものぢやありませんよ。何とさうではございますまいか？」と附足した。

私はこれでこの旅行中の改革事業が終つたのだらうと思つてゐたが、實際はさうでなかつた。翌朝少佐は食堂車で鶏の焼肉を注文した。給仕の言ふやう、

「それは獻立表にございませぬ。手前共は獻立表に載つてゐる物の外は一切御用立致しません。」

「でも、彼處の彼の紳士は鶏の焼肉を食べてゐます。」

「成程、食べて居られます。が、しかし彼は又譯が違ひます。彼の方はこの鐵道の監督さんでございます。」

「それでは尙更のこと、私はこの種の差別が大嫌ひです。大急ぎで鶏の焼肉を持つて来て下さい。」給仕は賄方を連れて來た。賄方は丁寧な調子で、

「どうもお氣の毒でございませぬが、さういふ次第には參り兼ねます。規則に反きます。」と説明した。

「よろしい。それならば君はその規則を公平に守るか公平に破らなければなりません。君は彼の紳士の鶏を取上げるか、私に一皿持つて來なければなりません。」

賄方は弱つてしまつて、何うして宜いか判らなかつた。彼は辻褄の合はない議論を始めたが、恰

度その時に車掌が通り掛つて、何か面倒が起つたのかと訊いた。賄方は渡りに舟で、今一紳士が規則に反いて、獻立表に載つてゐないにも拘らず、鶏を食べると言つて剛情を張つてゐると告げた。車掌が言ふやう、

「規則を固く守り給へ——君は自分の一存でどうかうすることは出來ない。が、一寸待ち給へ——相手はこのお方かね？」

それから彼は笑つて、又言ふやう、

「おい、君、規則は何うでも構はん——これは私の忠告で間違ない積りだ。このお方には何でも御註文通りに御用立てなさい——このお方に權利を主張させ始めると大變なことになる。何でも御希望の物を差上げなさい。若し品がなかつたら、列車を止めても融通をつけなさい。」

少佐は鶏を食べた。しかし彼は専ら義務の精神から又主義を貫徹する爲めに食べたので、元來鶏は好きでないのだと言つた。

私が博覽會を見損つたのは事實である。が、しかし私は二三の外交的詭計を學び得た。さうして、これは斯く申す私にも又讀者諸君にも、處世上便利で有益だらうと思ふ。

(終り)

死んで生きてゐる話

私は千八百九十二年の三月を、リビエラのメントナで暮してゐた。この浮世放れのした土地にあつては、私達はそれから數哩先きのモンタ・カロやニスに於て表立つて味へる利益を悉く内輪で持てる。換言すれば私達は雑沓や虚飾の如き要らざる不愉快な分子なしに、漲るやうな日光と馨しい空氣と美しい青海原を恣にするのが出来るのである。メントナは靜な質實な落ちついた無虚飾な町であつて、金持や見榮坊は來ない、否、來ないでは稍語弊がある。通則として紙幣ビラを切る連中が來ないのである。事實を言へば時々富裕な人も見える。さうして私は間もなくその中の一人と懇意になつた。多少本人の名を匿す爲めに私はその男をスミス君と呼んで置く。或日の事、英吉利旅館で朝飯を食べてゐる時に、スミス君はかう頓狂な聲を立てた。

「一寸々々、あの人を御覽なさい。あの今出て行く人を。能うく見てお置きなさい。」

「何故ですか？」

「あなたあの人を御存知ですか？」

「存じて居ります。あの人はあなたより五日六日早くから御宿に來て居ります。最早可なりの年配で、隠居してゐるリオンの絹絲業者だといふ評判ですよ。察するところ、親類も何にもないのでせう

——いつも沈み勝ちの夢でも見てゐるやうな様子をしてゐて、人と碌々口も利きません。名前はシオ
ファイル・マダナンと申します。」

何故このマダナン氏がかう甚くスミス君の注意を惹いたか——私はこれからスミス君がその説明を始めるのだらうと思つてゐると、案に相違して、彼は急に深く考へ込んでしまつた。さうして少時の間は見たところ話相手の私を始めとしてこの世の一切萬事を悉く忘れてゐるやうであつた。なほ彼は頭腦の作用を扶ける爲めに、時々その房々とした白髪頭に指を通しながら、食べ半した朝飯を冷め行くに委せた後、漸つと口を開いた。

「どうも駄目です。忘れてしまひました。どうしても思ひ出せません。」

「何を思ひ出せないかと仰有るのですか？」

「ハンス・アングルゼンの物語の中にある奴ですが、忘れてしまひましたよ。何でもこんなところだけは覚えて居ります。或子供が小鳥を飼つてゐる。子供はその小鳥を大層可愛がつてゐるが、時々つい不注意で世話を忘れる。小鳥は褒められもせず、大切にもしられないのに聲を張り上げて騒つてゐる。しかしその中に飢と渴に責められて、その歌の音が訴へるやうになり、細くなり、竟にビタリと止んでしまふ——小鳥が死んでしまひます。そこへ子供が來る。さうして今更ながら心の底まで悔恨の情に打たれる。それから嘆き悲みの裏に友達を呼集めて、丹誠を罩めて立派に葬式をする。しかも悲い哉詩人を餓死させて置きながら、後になつてその葬式や記念碑の爲めに、彼等詩人を生かして置

いて安樂な生涯を送らせるに充分の金を使ふ矛盾は、獨り自分達子供ばかりぢやないといふことに氣がつかない。ところで——

しかしそこへ邪魔が入つたので話は其儘胸切りにされてしまつた。その晩の十時頃、私がスミス君に廊下で行會ふと、彼は、どうです、一服やりにいらつしやい、一緒に飲まうぢやありませんかと私を彼の室に請じた。それは坐り具合の好い椅子が並べてあつて、明るいランプが點つてゐて、能く枯れた橄欖の薪が口の廣い燐燼の中で人を迎へ顔に燃えてゐる如何にも居心地の好いところであつた。なほその上の事には遠く大浪の碎ける微かな音が聞えた。二杯目のホイスキーを乾して、種々と暢氣な世間話のあつた後、スミス君は、

「これで漸く眞正に支度が出來ました——私が先づ以つて珍無類の物語の話し役になり、あなたがその聞き役になる支度が出來ました。この物語——否、寧ろ實歴ですなあ——この實歴は最早長いこと祕密になつてゐたのです。しかし今私とその封印を破ります——何卒お樂に。」

「有難う。存分我儘を働いて居ります。何卒お話を進め下さい。」

これから先きはスミス君の話したことである。

「その昔私は青年畫家でございました——實際眞の雜つ子あがりで——其處此處を寫生しながら佛蘭西の田舎廻りをして居りました。さうして間もなく私と似たり寄つたりの仕事をしてゐた、氣心の好い二人の佛蘭西の青年と一緒にになりました。何しろ若い同志の寄合ですから、私達は貧乏だつたと同

程度に於て愉快でした。若しくは愉快だつたと同程度に於て貧乏でした。ハツハ、、、何方でもお氣に召した方にお取り下さい。クロード・フレールとカール・ブーランジェといふのがその青年の名前で、二人とも實に面白い奴で、貧乏を物の數とも思はず、降らうが、照らうが、風が吹かうが、笑つて暮すといふ樂天家でした。

ところで竟に私達はブレインの或村で到頭二進も三進も行かないことになつてしまひました。すると私達と同じやうな貧乏な或畫家が私達を引き取つて、餓ゑ死するところを——決して形容ぢやありません、實際餓ゑ死するところを文字どほりに救つて呉れました。その畫家の名はフランソア・ミレエ……」

「何と仰有います？ 彼の豪いフランソア・ミレエですか？」

「豪いと仰有いますか？ どう致しまして、先生も當時は私達と同様少しも豪いことはなかつたのです。自分の村ですから一向に評判がなかつたのです。さうして非常に貧乏で、蕪善の外何にも私達に食べさせるものがないのです。その蕪善さへ時とすると、事を缺くといふ有様でした。ところで私達四人は刎頸の友、好き連れの泣き連れ、離れ難い仲間になりました。それから私達は描いた事も實際描きましたよ。總勢四人大車輪になつて、山を成す程仕上げましたが、さて、その中の一枚でも賣れるといふことは滅多にありませんでした。それでも私達は愉快に暮して居りましたが、しかし時々は随分苦みましたよ、貧の病でね、實際。」

二年と少しばかりのあひだこの調子でやつて行きましたが、到頭或日のこと、クロードがかう申しました。

「おい、連中、最早イヨ／＼駄目だぜ。分つたらうなあ？——到頭眞底に達してしまつた。皆ストライキをしてゐる——我々に對する同盟が成立つてゐる。僕は村中を歩いて來たが、今話す通りの次第だ。何處へ行つても、今迄の拂ひ残りが綺麗に片付くまでは、最早この上一サンチームも掛賣をしないと言つてゐる。」

これには皆ひやりとしました。何の顔も狼狽の餘りに色を失ひました。私達は今や眞正に窮乏の眞底に達したと感ぜました。少時の間は誰一人人口を利くものもありませんでしたが、竟にミレエが溜息を吐きながらかう申しました。

「どうも好い分別が浮ばぬて——どうも。何か策はないかな、策は！ 皆の衆。」

一向に返答がありませんでした。尤も悲しさうに黙り込んでゐる有様を返答といふことが出来るなら、それが即ち返答なのでしたらう。カールはプイと立上つて、室の中を少時彼方此方とイラ／＼しながら歩いた後に、かう申しました。

「事茲に至るのは屈辱といふものだ。こゝにある畫を見給へ、山のやうに積上げてある一枚々々皆是歐羅巴のどんな畫家——それが何誰だらうと構はない——歐羅巴のどんな名家が描いたのにも遜色のない立派なものばかりだと僕は信じてゐる。さう／＼、逍遙をしてゐる見ず知らずの人達が、大勢然う

いふ批評をしてゐた——少くともそれに近い事を言つてゐた。」

「しかし褒めるばかりで買はないから仕方がない。」

とミレエが申しました。

「買ふ買はないは別問題として、彼等は兎に角こんな事を言つてゐる。さうしてそれが又事實なので、例へばそこにある君の『夕の祈』を見給へ、何うですか、皆……」

「チエツ、俺の『夕の祈』か？ 五フランで買はうといふ人があつたが……」

「何時？」

「何誰が買ふつて？」

「何處の人が？」

「何故君は賣らなかつた？」

「まあ——さう皆で一時に責めかけるな。俺は先方が尙少しは出すだらうと思つて——確にさうと見込をつけて——何うもそんな顔付をしてゐたので、八フランならばと言つた。」

「成程、それから？」

「それなら又來やうと言やがつた。」

「南無三寶！ フランソア、それだから……」

「わかつてゐる——わかつてゐる。俺が失策つたのだ。俺の考慮が足りなかつたのだ。しかし俺は成

るべくみんなの都合の好いやうにと思つてやつたのだ。それはみんなも認めて呉れるだらう。さうして俺は……」
「それは無論みんなも分つてゐる。最早言ふな。最早言ふな。けれども二度と再びこんな馬鹿をするなよ。」

「俺か？ それは最早大丈夫。俺は何人か来て甘藍一個であの畫を買つて呉れ、ば宜いと思つてゐるくらゐだ。最早大丈夫だ。」

「甘藍？ まあ、そんなことを言ふな——涎が流れて来るわ。この際だから尙一層休へ易いものを言へ。」

「諸君！」

とカールが申しました。

「諸君！ こゝにある畫は皆真正の價値を缺いてゐるだらうか？ それを僕に答へて呉れ給へ。」

「決してそんな事はない。」

「果して皆立派な眞價のあるものだらうか？ それを答へて呉れ給へ。」

「さうともく。」

「それでは若し大家の名前を附加したら素晴らしい値段で飛んで行く位立派な眞價があると思ふんだね。さうぢやないか？」

「確實にさうだ——大丈夫金の脇差だ。」

「しかし——僕は冗談を言つてゐるんぢやない——確實にさうぢやなからうか？」

「勿論さうだ——僕等も冗談を言つてゐるんぢやないけれども、それがどうしたと言ふのか？ どうしたと言ふ？ そんな事がどういふ風に我々に關係があると言ふのか？」

「かういふ風に關係がある。諸君、聴き給へ——我々は我々の畫に大家の名前を附加しよう！」

こゝで今まで弾んでゐた會話が途切れてしまひました。皆の眼はどうも合點行かぬといつたやうにカールの顔に注ぎました。これは一體何ういふ謎でせう？ 何處から大家の名前を借りて來るのでせう？ さうして何誰がそれを借りに行くのでせう？」

カールは坐つて、かう申しました。

「ところで僕は一つ全く眞面目な問題を持出さなければならぬ。これが差當り貧民院送りをまぬかれる唯一の策だとおもひ、且つ策としては極めて確實なものだと信じてゐる。僕のこの意見は人類の歴史の長い間定つてゐる多數の事實に根柢を置いてゐる。僕の計畫を實行すると、みんな金持になるぜ。」

「金持に？ こら、貴様は氣が狂つてゐるな。」

「何、氣が狂つてゐるものか。」

「否、狂つてゐる——正氣の沙汰ぢやない。一體金持といふのはどんなことか？」

「さあ、内輪に見積つても一人前十萬フラン。」

「イヨ／＼これはキ印だ！ どうも可怪いと思つた。」

「キ印々々。カール、可愛さうに、貴様は到頭貧乏に負けてしまつたな。さうして……」

「カール、何か薬を飲め、さうして直ぐ寝たら宜からう。」

「それよりも先づ繻帯をしてやれ。頭を繻帯してやれ。それから……」

「否、足を繻帯してやれ。腦の方は先達から落ちついてゐる——僕は能く承知してゐる。」

「まあ、静にせい！」

とこの時ミレエが如何にも威嚴を粧つたやうな調子で口を出しました。

「カールは言ふだけのことを言はせたら宜からう。さあ／＼、カール、卿の神算鬼謀を打明けい。何と申すか？」

「それでは先づ前提として人類の歴史に於ける一大事實——即ち多数大美術家の眞價はその本人が餓ゑて死ぬまでは決して認められた例がないといふ事實に各自意を留めて戴きたい。この事實は幾度となく起つてゐます。それで私は之を根據として一法則を立てるに憚らない。即ち——名なくして世に持囃されざる大美術家は其の死後に於て認められ、彼の作品はその死後に於て高價に騰る可しといふ法則です。随つて僕の神算鬼謀なるものは次のことに歸着致します——我々が圖を引く。さうして申つた者が死ななければならぬ。」

話し振りが餘り落ちついて居り言ふことが餘り思ひがけなかつたので、私は殆んど驚くことを忘れてゐました。それから又醫者よ薬よとカールの狂氣を治す手段をみんなは異口同音に喚き立てました。が、カールは辛抱強くこの大騒ぎの靜まるのを待つてゐて、それから又つゞけて自分の計畫を述べました。

「さうです。我々の中の一人が殘餘のものを——且つ自分を救ふ爲めに死ななければならぬ。我々は圖を引く、さうして中つたものが有名になり、全體が金持にならうといふのです。まあ靜にして呉れ——靜かに。邪魔をするな——實際僕は成算あつて畫策してゐるのだ。辨へなしに喋つてゐるのぢやない。そこでかういふ謀略になるのです。死ぬことに定つたものがこれから三ヶ月の間に精かきり描いて、出来るだけ作品を殖して置く——畫でなくても宜い。荒削りのスケッチ畫で宜い。下繪で宜い。下繪の一部分で宜い。下繪の碎片で宜い。十回ばかり繪刷毛で打つけた——無論爲體の分らないものでも宜いが、しかし一枚々々彼の落款のついてゐる彼のものでなければならぬ。一枚々々何か直彼の筆だと分るやうな特質か異癖の入つたものを一日に五十枚も製作する——さうしてその製作者たる大美術家が死ぬと、さあ大變——一枚々々畫に翼が生えて飛んで行きます。世界各国の博物館に仕舞つて置く爲めに諺のやうな値段で蒐集されます。それで、今の中にかう作品を一噸も用意して置く、一噸も。さうしてその間餘殘の連中は病人の看護と巴里の人間や取引人の操縦でこれもナカ／＼容易ぢやない——皆將に來らんとする大事件の準備だ。さうしてイヨ／＼機熟したところを見計らつて

大先生噫竟に起たすとそれ、巴里と取引人に向けて吃驚箱の蓋を明け、同時に大袈裟な葬式を行ふ。どうだ？ 呑み込めたかな？

「さあ、未だどうも全くは……」

「全くは呑み込めない？ 分らないのかなあ？ 鬮に中つた本人は眞正に死ぬのぢやない。名を變えて、姿を暗ますのだ。そこで我々は薬人形の葬式をする。さうしてワイくと嘆き悲しむ——世間一般に手傳つて貰つて。それから僕が……」

しかし皆はカールに終尾まで言はせませんでした。

「出来したく——」

と言つて、誰彼の差別なく忽ち氣の浮立つやうな喝采を連發し、有難さ嬉しさあまつて有頂天になり、飛立つて室の中を躍り歩くやら、お互に頸つ玉へ纏りつくやら大騒動を致しました。それから私達は饑餓を忘れて、この大計畫の相談に何時間かを移しました。さうしてつひに萬般の手筈が限なく定つた時に例の鬮を引いてミレエが當りました——ミレエが所謂死鬮に當つたのです。そこで私達は各自今之を玉なしにしてもその爲め後になつて大金が入るといふ見込のつくまでは、何人しも手離さないやうな品物——即ち記念に貰つた品々を掻集めて、右から左へ質に置き、簡単な留送別の夕飯と朝飯の支度をして、尙ほ五六フランの路用とミレエが數日間露命を繋ぐ爲めの、僅かの八百屋物が餘るだけの金を拵へました。

翌朝早く私達三人は朝飯を食べると直に出發致しました——無論徒歩です。各自賣る積りでミレエの畫の小さいのを十二三枚携へました。カールは巴里に向ひ、そこで彼は來らんとする大切の日の用意に、ミレエの名聲を固めるといふ仕事に着手するはずでした。さうしてクロードと私は手別けをして佛蘭西中を歩く豫定でした。

さあ、かうして取かゝつて見ると、仕事の容易で面白いのには私も驚いてしまひました。私は二日歩いて、最早商賣を始めたのです。と申すのはその節私は或大きな町の郊外にあつた別荘の寫生に腰を下したのです——それも其家の持主が階上の廊下に立つてゐるのを見たから一つ遣付けると思つたのでした。すると先生ノコノ下りて來ました——下りて來るだらうと思つてゐたのです。私は先方に興味を持たせ続ける爲めに、ドン／＼と繪刷毛を使つて見せました。大將感に入つて、時々稱讚の言葉を洩らし、間もなく熱中して談話を始め、あなたは大先生だと申しました。

私は繪刷毛を置いて、胸亂の中に手を突込み、ミレエの畫を一枚取出して隅の方の落款に指しました。さうして得意になつてかう申しました。

「あなたは無論これがお分りでございませう？ どうでございます、これが私の先生でございませう。

ですから私だつて多少は仕事に心得がある筈だと存じます。」

するとその人は大變に困つたやうな顔をしました。さうして黙つて居りました。私は情なさうな聲を出してかう申しました。

「あなたは眞逆フランソア・ミレエの落款を御認めにならないとおつしやるお積りではございますまいな！」

彼は實際そんな落款は分らないのが當然です。それにも拘らず彼は分らなくて弱り切つてゐたところから、かう手もなく助け出して貰つたので、その満足つたら譬へやうがありません。彼はかう申しました。

「いや、成程これはミレエ、ミレエでございます——確實なものでございます。私は一體なにをぼんやりかんがへてゐただかわかりません。無論今となればミレエの落款だといふことが分ります。」

次いで彼はそのミレエを譲つて貰ひたいと言ひ出しましたが、私は、

「私も金の有餘る方ではございませんが、さうかといつてこのミレエを手放すほど貧乏でもございません。」

と答へました。しかし強つてといふので、到頭八百フランで賣つてやりました。

「八百フランと仰有いますか？」

「さうです。本人のミレエなら豚の肉一片とでも取換へたところです。さあその小さい畫一枚で八百フランの金が入りました。しかし今となると八千フランで買戻したいくらいです。けれどもさういふ時代は最早過ぎてしまひました。ところで私はその人の家を綺麗に描き終つて、十フランで差上げま

せうと申出しましたが、どうも可けません。かういふ大先生のお弟子だといふので、その人は百フランで買つて呉れました。私はその八百フランを直様その町からミレエの許へ送つて、翌日再び出發致しました。

けれども私は最早歩きませんでした——決して歩きません。馬車に乗つて行きました。それから最早始終馬車でした。私は一日に一枚といふ割で畫を賣りました。決して二枚賣らうとはしませんでした。さうして買つた人には何時もかういふことを申しました。

「苟めにもフランソア・ミレエの畫を賣る等とは私も餘程馬鹿者でございます。と申すのは先生は最早三ヶ月とは保ちません。さうして先生の死後になると、先生の作品は最早金銭づくでも意氣づくでも、決して手に入らないのでございますからなあ。」

私はこんな風な事柄を出来るだけ遠方まで擴め、例の來らんとする大事件に對して、世間一般に準備を與へて置くやうに力を盡しました。

畫を賣る方法に就いては私は手柄を自分に歸しても差支ないのです——これは私の考案なのでした。出發の前夜、作戰計畫の談合をしてゐた時に、私がこの方法を持出しました。さうして私達三人は兎に角これを充分に試して見て、若し面白くなかつたら何か又他の方法に換へようといふことに意見が一致したのです。ところが誰彼の別なくこの方法で大成功を博しました。私はたゞ二日歩き、クロードも二日歩きました——二人とも餘り家郷の近傍でミレエを有名にするのは氣味が悪かつたので

すが——カールはどうも非道い奴です。たつた半日歩いたばかりで、後は公爵のやうな旅をいたしました。

時々私達は田舎の新聞記者と懇意になつて、新聞に記事を出して貰ひました。一人の新しい畫家が見つかつたといふことを知らせる記事でなくて、今の世にフランソア・ミレエを知らぬ者は一人もなといふことを傳へる記事でした。何等ミレエを褒める記事でなくて、單にこの天才畫家の容體に就いて——或時は稍見直したやうに又或時は頼みの綱が切れたやうに——兎に角早晚危いといふやうなことを香はせる消息でした。さうして私達はかういふ記事に赤い棒を引つぽつて、その新聞を私達から畫を買つた人々に洩れなく發送するのを常としました。

少時するとカールは巴里に入り込み、そこで一段高飛車に出てことを運びました。彼は在住の通信員と交誼を結び、ミレエの容體を英吉利から歐羅巴大陸一面、亞米利加、その他有らゆるところへ通信させました。

發端から恰度六週間して、私達は巴里で會ひ、旅行の一段落を告げて、ミレエの許へ新規の畫を取りに遣ふことを止めました。最早何等の躊躇もせず今直様打撃を下さないのは大の料簡違ひ、後から地團太を踏んでも追付くまいと思はれたくらの景氣が良好で時機が悉く熟して居りました。そこで私達はミレエに——床に就いてドン／＼衰弱し始めるやう、若し用意が出来たら十日経つてから死んで貰ひたいといふ手紙を出しました。

それから私達は勘定を締めたところが、三人がかりで小畫下繪合せて八十五枚を賣り、代金として六萬九千フランをせしめたことになりました。カールが最後の——さうして一番鮮かな取引を致しました。即ち彼は例の「夕の祈」を二萬二千フランで賣つたのです。私達はカールを褒めたの褒めないのぢやありません——神ならぬ身の、間もなく佛蘭西中がそれを手に入れようとして喧嘩をはじめたり、外國人が現金五萬五千フランを差出して、掌を合せたりする時代が來るとも知らないで。

私達はその晩成功祝ひの宴を張り、翌日クロードと私は行李を纏めて出發しました——これは死期までミレエを看病する爲め、おせつかいな連中を家の中へ入らせないやうにする爲め、且つ先生の毎の容體書を巴里に残つてあるカールの許へ送つて、案じてある一般社會に傳へるために諸大陸の新聞に發表して貰ふためでした。さうして到頭先生噫竟に今や亡しといふことになり、カールも葬式の手傳ひに間に合ふやうに歸つて參りました。

あなたはあの立派な葬式を御記憶でせう。あの世界中に及んだ大騒ぎと兩半球の名士が供をして來て悲痛を表したことを御存知でせう。私達四人——切つても切れない四人——が棺を擔ぎ、他の者には一切手傳ひをさせませんでした。さうしてそれには道理があつたのです。と申すのは棺の中には蠟細工の人間の外なんにも入つてゐなかつたのですから、他の擔棺夫だつたら重量のことで文句を言つたかも知れませんが。かういふ次第で今は昔がたりになつた不如意の頃に貧困を共にした舊の儘の四人で棺を擔いだので……

「四人と仰有いますか？」

「私達四人です——と申すのはミレエは自分の棺を擔ぐ手傳ひをしたのです。無論化けましてな。親類の者に——遠い親類に化けましてな。」

「驚きますなあ！」

「御道理ですが、さうかと申して矢張り全く虚偽のないお話です。それでミレエの畫がどれくらゐ高くなつたかはあなたも御承知でせう。儲つたらうと仰有いますか？ 儲りましたとも！ どうして宜いか實際金の處分に困つたくらゐです。今日巴里にはミレエの畫ばかり七十枚も持つてゐる人があります。その人は私達に二百萬フラン拂ひました。若し夫れ私達が旅行してゐた間に、ミレエが描き踏した柵で量る程の、スケッチ畫や下繪に至りましては、その今日私達が賣る——否、一枚手放して呉れといふ懇望に應じてやる——時の値段を御承知になつたら、あなたは呆れなさるでせう。」

「驚き入つた御實歴です——全く。」

「さう——まあ結局さうですな。」

「さうしてミレエはどうなりましたか？」

「あなたは秘密を守つて下さいますか？」

「守りますとも。」

「あなたは私が今朝食堂で能く御覽なさいと申上げた人を御記憶ですか？ あれがフランソア・ミレ

エです。」

「やッどうもこれは……」

「驚きましたらう？ 御道理です。唯一遍世間は天才を餓死させて置いて、彼が受くべき筈の報酬を他の人の懐中に入れるやうなことをしませんでした。この鳥だけは褒められもせず生命の限りを盡して、後から立派な葬式といふ冷たい行列で酬いられるやうなことになるので済みました。私達がさう行くやうに油断なく盡力したのです。」

(終り)

跳ね蛙

東部から書を寄せた一友人の要求に應じ、私は好人物で多辯の老人某君を訪れて、友人の友人なるフマイリー君のことを尋ねた。今その頭末をこゝに紹介して見よう。私は何だか怪いと思ふ——どうもこのスマイリーといふ人は作り事らしい——實は私の友人はこんな男とは半面の識もないのらしい——唯若し私が某君にこの人のことを尋ねれば某君はその知人のスマイリーといふ甚だ奇抜な男を胸に浮べ、その埒もない思出を、當方が閉口頓首する迄のべつ幕なしに喋り立て、私を惱ますだらうと想つての業らしい。しかし、若し果してかういふ計畫であつたとすれば、私は物の見事に擔れたのである。

某君は某嶺山の假小屋の古びた酒場の燧爐の側でこゝろもち好ささうに居睡りをしてゐた。彼は太りかへつた禿頭の長者、その落着いた顔つきには人を惹きつけるやうな溫和と朴訥の情があらはれてゐた。彼は眼をさまして、や、今日はと言つた。私は一友人からその竹馬の友スマイリーといふ——嘗てこの小屋に住んでゐたと聞く——若い牧師さんの消息を尋ねるやうに頼まれた趣を述べ、なほ若し某君がこのスマイリー君について、何事でもお話しくださるならばなほだ有難く存する旨を附加へた。

某君は私を室の片隅へ押して行つて、自分の椅子で私をそのまゝ、そこへ閉塞し、さあ、おすわりなさいとすわらせて、つきに出て来るやうな單調な物語りを喋々と辯じた。そのあひだ彼は莞爾ともせず、さりとして眉毛を蹙めるでもなく、また語り出した時の流暢な調子を最後まで持ちつゞけて、且つちよつぶりとも熱情の色を仄見せなかつた。が、しかしその際限のない物語りには終始一貫して人を動かすやうな誠實と眞面目の精神が籠つてゐたから、私はこの人がこの物語りを滑稽なものと思つてゐるところか、まことに重大な事件と心得、その主人公を比類なき超自然の天才として感歎してゐるのだといふことを明白に読み得たのである。それにしても私はこんな變挺な長談義を、たゞの一度も相好を崩さず、靜まりかへつてやつて退ける人の様子がどうも馬鹿々々しくてならなかつた。冗いやうだが、私はスマイリー牧師に關して彼の知るところを聞かして呉れと頼んだのである。しかして彼は次のとほりに答へたのである。當方から一切の差出口をひかへて彼の喋るがまゝに委せたところを左に。

成程、スマイリーといふ男がございましたよ。さあ——四十九年の冬だつたか、それとも——五十年の春だつたか、確には憶えませんがね。兎に角何方かに相違ございません。といふのは奴さんがこの小屋へ來たのは未だ彼の大槌が出來上らない時分でございましたからね。それは兎に角、大將餘つ程變つてゐましたぜ。向うへ廻つて相手になる者があれば何にでも賭をする。否、相手が進まない顔

をすれば、此方が其方になつても宜いからやらうといふ調子でね。全く奴さんは何方へ廻つても苦情はない——兎に角賭さへ出来れば氣が済むのでした。それでゐて滅法運勢の好い男ですよ——殆んど十が十まで勝ちましたからな。奴さん、年外年中賭けをしようで手薬煉ひいて待つてゐる。で、どんな話が出て、それぢや一番賭けようぢやないかと來なかつた例はない。それも唯今申した通り、何方側へでも此方のいふなりに廻るから面白いちやございませんか。一競馬あつた後は奴さんは紙幣びらを切つてゐるか、さもなければ一文なしになつてゐる。犬の噛合があれば賭ける。猫の喧嘩にも鶏の蹴合にも賭ける。それどころか鳥が二羽垣根に止つてゐれば、君、何方が先に飛ぶだらうか賭けをしようと言ふ。説教會があると、奴さん必ずやつて來て牧師さんに賭をする。奴さんはこの牧師さんを一番の口説上手と思つてゐたのです。全くそのとほり、好い人物でございましたよ、その牧師さんね。で、先生——牧師さんぢやない、スマイリー先生ですよ、草鞋蟲が歩いてゐるのを見ても、此奴が行くところまで行くには何時間か、るか賭けをしようと言ふ。さうして此方が應じたが最後、先生草鞋蟲の行先と途中の時間が分らないかぎり限りはメキシコまでも跟いて行くから堪りませんや。この邊にはスマイリーを見て知つてゐる子供が大勢あますから、何なら訊いて御覽なさるが宜い。しかし矢つ張り同じことです——大將は何にでも賭をする——よく、因果な男です。或時牧師さんの細君が大病に罹つて、何うも助かるまいといふ評判でした。ところが或朝牧師さんがこの小屋へ入つてお出になると、スマイリーめ病氣見舞を申しましたよ。「大分快い方です。有難いことです。かう翻

然と好い験の見える上は神さまの御恩恵で未だ助かるのだらうと思ひます。」との御返答。するとスマイリーは何の造作もなく、「私は助からないとして置きます。五兩賭けますが如何ですえ。」と言つたので、それから驚きまさあ。

このスマイリー、牝馬を飼つてゐました。子供達は蝸牛と呼んでゐましたが、それは眞の冗談です、實際はそれよりも無論速うございしましたからな。さうして奴さんはこの馬に賭けては儲け賭けては儲けしてゐました——遅い上に喘息かズステンバーか、肺病か何かそんな持病がありましたかね。皆は何時この馬を二三百ヤードも先に立たせて置いて、途中で追抜くのが常例でしたが、お仕舞際になると、奴さん——スマイリーぢやない、馬ですよ——屹度元氣が出て、荒つぽくなつて、飛ぶ、跳ねる、車軸を蹴る、空に遊ぶ、垣根に突當る、咳をせく、嚏をする、鼻を鳴らす、大騒動をさせてやつて參ります。さうして何時も版で捺したやうに勝つてございます。出来るだけ几帳面に計れば他の馬よりも、さあ、首だけ位早く溜り場に着くのでございます。

それから奴さんは小さいブルドックの子を持つてゐました。一寸見たばかりでは一文の値打も無い、——唯そこらへ坐つて間拔面をして物を盗む機會を待つてゐる位な能なし犬ですが、いざ賭けとなると、全く別物になるから奇態ぢやございませんか。先づ下頰がかう汽船の首のやうに突出します。それから齒を露出して、物凄く光らせます。相手の犬が捉へます。嚇しつけます。噛みつきます。二度も三度も轉がします。それでもアンドルー・チャクソンは——といふのがこの犬の名で——アン

ドルー・チャクソンは決して不満足の色を見せません。かう御出なさるなと思つてゐたといふやうな顔をしてゐます。で、向う側の賭金が倍になります。その又倍になります。竟に有金悉皆賭け切りといふことになります。すると全く突然に此方の犬は相手の犬の後足の真中どころを見事に啣へます。啣へたが最期、最早金輪際放しません。それも咬むのぢやなくて、唯勝負がつく迄は一年でも睨と捉へたなり堅く獅噛みついてゐるのです。スマイリーはこの犬では何時も勝ちましたが、到頭或時、機械鋸で切られたといふ後足のない犬と立合せました。例の通り有金賭け切りまで漕付けて、十八番のところを啣へる段になりましたが、アンドルー・チャクソンは、これはしたり、巧く一杯喰はされたわい、土俵際まで押して行つて投げられるとはこの事だと直様氣がついて、稍稍氣氣味になり、最早強ひて勝たうともしませんでしたから、結果散々の目に遇はされました。さうして、一口惜しうございます。此方の取柄が後足だのに、その後足のない片輪者と立合はせるとは御主人様も聞えませんか」と言つたやうな眼つきをスマイリーに浴せかけ、それから一寸跛足を引いて轉んだと思ふと可哀想にその儘死んでしまひました。好い犬でしたよ、アンドルー・チャクソンはね。生きてゐたら評判ものになつたでせうに、真正に惜いことを致しましたよ。性が好うございましたからな。業がございましたからな。實際のお話です。と申すのは餘り勝味のある勝負をしたことがなかつたのですからな。業がなくちや勝味のない勝負にあ、番毎勝てる譯がございませんからな。で、あのお仕舞の勝負の時のことを思出すと、私は何うも不便でならないのです。

さて、このスマイリーは捕鼠犬を持つてゐました。軍鶏を持つてゐました。雄猫を持つてゐました。何でも彼でも持つてゐましたから、此方はどうも始末に負へません。先方で賭ける物を宛てがつて、もくれなくちや相手が出来ないやうな始末でございました。或時奴さん、蛙を捉へて家へ持つて行き、此奴を教育する積りだと申すぢやございませぬか。それから三日間といふもの奴さん何にもしません——唯裏の庭に坐つたなりで、蛙に跳ね方を仕込んでゐました。さうして到頭最後に物にしたのだから驚きまさあ。奴さんが後から一寸突くと、蛙は忽ち護護鞠のやうに飛び上ります——若し立ちやうが巧く行くと、空中で一二度跳筋斗を打ちます。さうして平つくばつて落ちますが猫のやうに些つとも怪我を致しません。奴さん得意になつて、今度は蠅を捕ることを仕込みました。習ふより慣れるで、蛙は蠅を眼の仇のやうにみんな捕へてしまひます。スマイリーの言ふところでは蛙は教育さへすれば何でも出来るものだから、どうもこれが眞正らしいのです。現に奴さんダンネル・ウェブスターを——といふのがその蛙の名で——ダンネル・ウェブスターをこの床に置いて、「蠅ぢや、ダンネル、蠅ぢや、それ」と大聲で呼び立てました。すると奴さん——スマイリーぢやない。蛙ですよ。——瞬きする間に飛上つて、彼の帳場の邊の蠅を捕へました。さうして土の塊か何かのやうに撞平と床へ落ちて來ましたが、別段不思議でも何でもないと言つたやうな顔をして、後足でかう横鬚のところを搔きはじめましたからな。彼れだけの業を持つてゐて、あんなに勿體ぶらない大人しい蛙は一寸類がありませんや。さうして幅飛となると、奴さんは蛙といふどんな蛙にも負を取りませ

ん。幅飛がことに奴さんの得手なのでしてね。かうなると、スマイリーは黙つてゐません。懐中のつづくかぎりこの蛙に賭けたものでさあ。スマイリーはこの蛙を大層自慢にしてゐましたが、まつたく道理です。といふのは方々旅して来た連中がみんな口を揃へてこんな蛙は見たことがないと申すのでございませうからな。

スマイリーはこの蛙を金糸雀籠に入れてゐました。さうしてとき／＼市へ持つて行つて賭けをするのでした。或日のこと、まつたく見ず知らずの男が籠を提げて来たやつ、こさんとこの小屋で顔をあはせて、

「一體全體お前さんはその籠の中に何を入れてゐなさる？」

するとスマイリーは餘り氣の乗らない顔をして、

「鸚鵡ともおもへやう、金糸雀ともおもへやう、が、しかしさうぢやなくて、蛙がほんの一疋あるばかりさ。」

そこでその男は籠を手に取つて、しげ／＼と眺め、さうしてその序にかうぐる／＼と廻しながら、「うむ、違えねえ。一體この蛙が何になると仰有る？」

「さあ。」

とスマイリーは落着拂つて無頓着に、

「たつた一つ能が有るさあ。飛びつこと来りや此奴に勝つやうな蛙はこのカラベラスにや一疋もゐ

ませんわ。」

その男は又籠を手に取つて、又しげ／＼と眺め、又スマイリーに戻して、考へ込んだ様子をして、

「ふーむ、他の蛙と何處も違つたところは見當らねえやうだが。」

「見あたるまいて。お前さんに蛙の鑑識がつくかも知れない。つかないかも知れない。お前さんは経験があるかも知れない。それとも又ほんの素人かも知れない。とにかく俺は嘘は吐かない。この蛙は飛びつこならこのカラベラスのどんな蛙にもけつして負けない。嘘だと言ふなら五十兩の賭けをしよう。」

するとその男は少時考へて、稍がつかりしたやうな調子で、

「だが、わつちは旅の者で、あいにくと蛙の持ち合はせがねえ。蛙さへあれば此奴は一番賭けるところだが。」

かう聞くとスマイリーは、

「それは心配ない。それは心配ない。一寸この籠を持つてゐて呉れ、ば、俺が行つて一疋捕へて来てやる。」

そこでその男は籠を受取り、スマイリーの五十兩と一緒に自分の五十兩を列べて、蛙の来るまでとそこに腰を下しました。

奴さんは——スマイリーぢやない、今の男ですよ——奴さんは長い間獨りで何か頻りに考へてゐま

したが、やがて籠の中から蛙を引張り出して、その口を抉じ開け、そこにあつた茶匙を取つて、鷲打ちの散弾を蛙に詰めにかゝり殆んど頤の邊まで詰込んで、床の上へ下しました。スマイリーは沼地へ行つて、長いこと水溜りの中を歩き廻つた擧句、到頭蛙を一疋捕へて、後生大切に握つて歸り、相手の男に渡してから、

「さあ、用意が出来たら、お前さんのをダンネルの側へ置きなされ——苦情の起らないやうに前足を劃然ダンネルのと列べて、さうして俺が合圖を掛けませう。」

それから一二三の合圖で、兩雄は各その蛙の後から一寸觸りました。新しい蛙は飛んで行つてしまつたが、ダンネルは身體を膨らませて、フランス人のやうに肩を怒らせたが、一向駄目です。後退すらしません。鍛冶屋の鐵床のやうに地生えになつてゐます。動かないこと大錨を下してゐるよりも甚だしい。スマイリー大變吃驚しました、嫌厭してしまひました。道理でさあ。しかし無論何うしたのだか爲體が分らないのでした。

相手の男は賭金を懷中に收めて、行つてしまひました。戸口を出しなに振返つて、斯う拇指でダンネルを指しながら、思案の體よろしくあつて、

「どうも他の蛙と何處も違つたところは見當らねえやうだが。」と捨臺詞を残しましてね。

とスマイリーは頭を搔いて、ダンネルを見下したまゝ、少時の間立つてゐましたが、竟に、

「何うしてこの蛙が負けたのかどうも合點が行かない。どうかしてゐるのぢやなからうか、恐ろしく膨れてゐるやうだ。」

と咬いて、奴さんはダンネルの頸筋を捉へて吊上げました。

「これはどうぢや！ 重い何のつて、五百目もあらあ！」

と尙ほ獨言を續け、蛙を逆まにして、二摺みばかりの散弾を吐出させ、始めて野郎の計略に思ひ當ると。や、奴さん憤つたの憤らないのつて！ 蛙をその場へ置いて、すぐに跡を追つて行つたけれど、相手は最早影も形も見せませんでした。それから……

この時某君の名を表庭から呼ぶものがあつた。某君は何用かと思つて立上つた。それから出懸けながら私の方に振返つて、

「どうぞその儘、どうぞお樂に——私は直に戻つて参りますから。」

しかしこの上この企業心の熾んな無宿者スマイリーの閱歷を聞いたところでスマイリー牧師の消息が分りさうにも思へなかつたから、私も出懸けることにした。

戸口のところでは某君の戻つて來るのに出會した。某君は私を引止めて又話し始めた。


「さて、このスマイリーめは黄色な片目のしかも尻尾のない倭小な牝牛を持つてゐました。さうして

……」

「や、もうスマイリーは眞平だ。」
 と私は口の中で言った。さうして老人に別れを告げて出發した。

マーク・トウエーン名作集 終

昭和四年三月一日印刷
 昭和四年三月三日發行



世界大衆文學全集 第十卷
 マーク・トウエーン名作集

譯者 佐々木 邦

發行者 山本 美

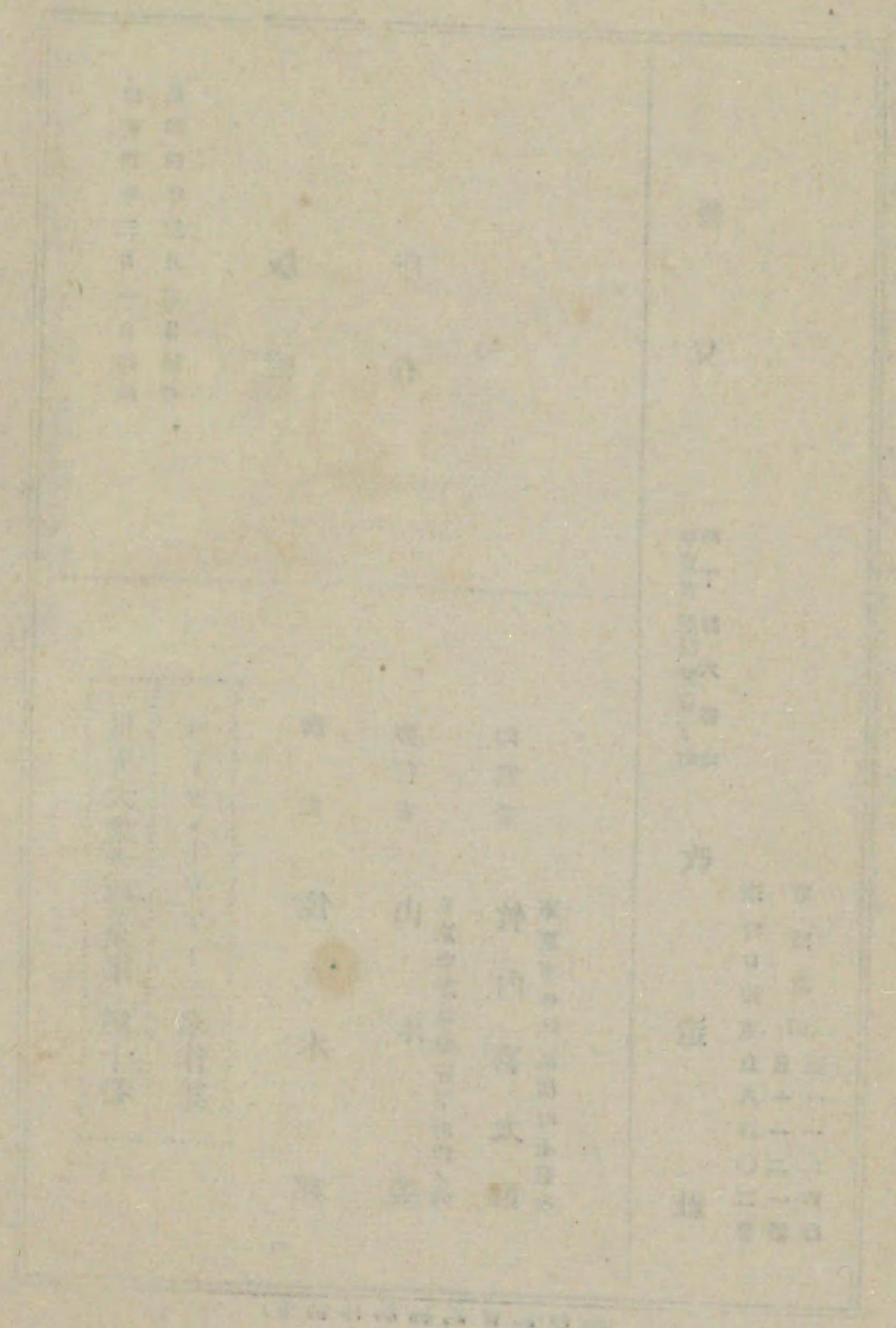
印刷者 竹内喜太郎

發兌
 東京市芝區愛宕下町
 四丁目六番地

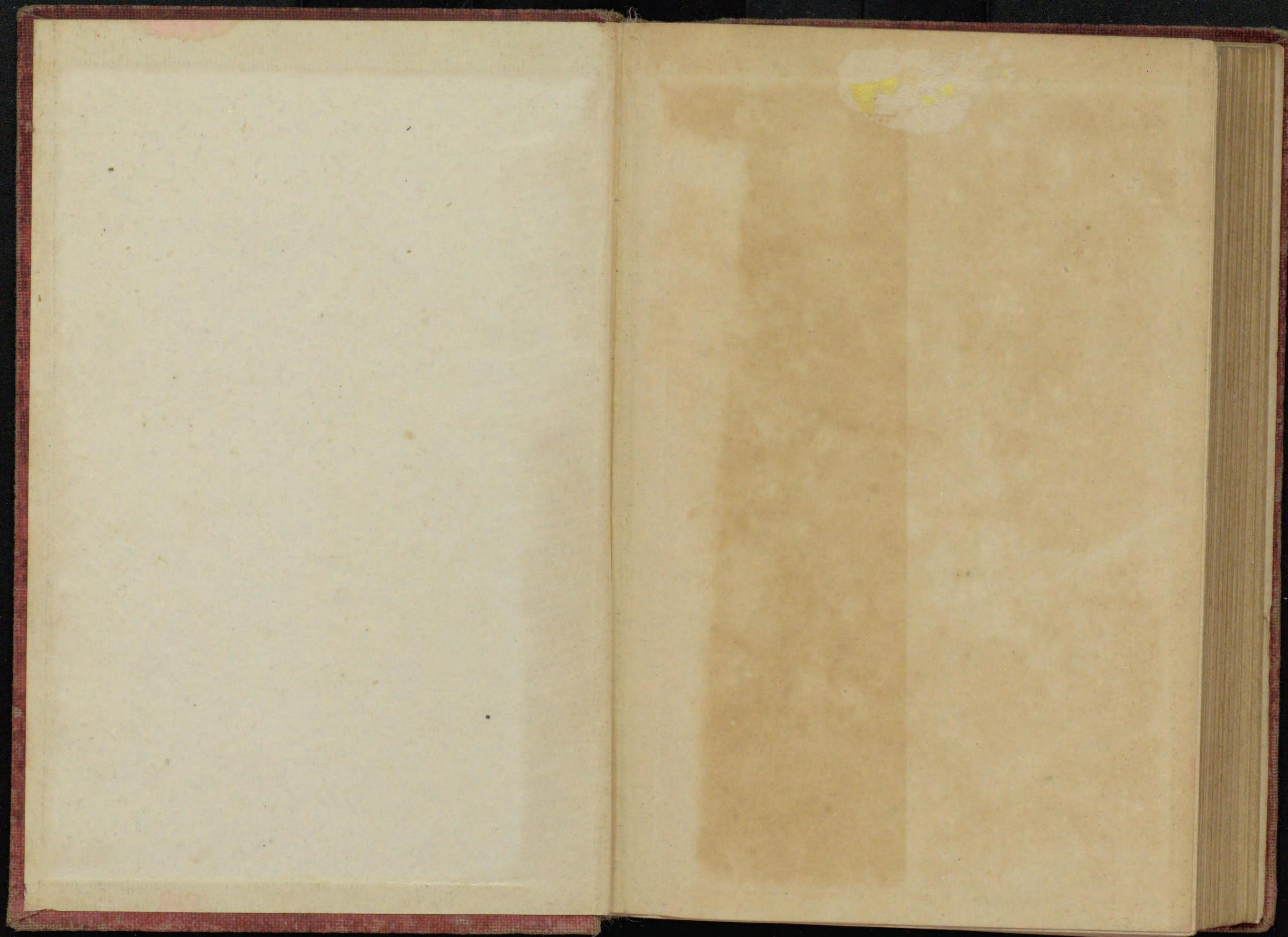
改 造 社

振替口座東京八四〇二番
 電話芝(43)自一一二一
 至一一二四番

(印 刷 所 芝 區 愛 宕 下 町 四 丁 目 六 番 地)



和山製本所



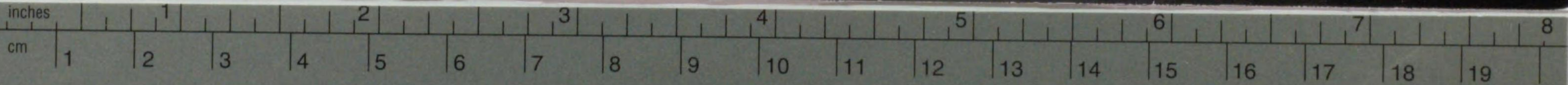


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

